

性癖全開★魔法少女モ
ドキ

烏何故なくの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如「凄まじく身体能力が凄まじい上に、自身の性癖ドンピシャな姿の女性に変身する能力」を手に入れてしまった男子高校生達が、訳も分からないまま性癖を晒しながら正体不明の怪物と戦う羽目になる話。

※内容はシリアスが4、コメデイが6くらいです。しっかりR15。

アバタールチューナ、ブラック★ロックシューター、ペルソナ、呪術廻戦、チェンソーマン。

好きな作品ミックスさせたら淫獄団地みたいな話が出来ました。

目次

推定、魔法少女	1
暴力の時間	19
自称、魔法少女	32
過去と今	47
轟く閃光	76
迫り来る過去	96
胎動	121
とある魔術師の失敗	137
殺意の発芽	154
死戦の先へ	177
エロスとタナトス	208
エピソード	229

推定、魔法少女

「好きな異性のタイプう？」

「おうよ」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、親友の相葉^{あいばただし}匡は僕に問いかける。

「学校じゃ言いにくいだろ？　ちよつとくらい下世話な話しようぜ敏弘^{としひろ}。ほら、フェチを曝け出してみ」

「……そう言われてもなあ……」

「カマトトぶんなよーっ、いいじゃねえか人っ子一人いない夜なんだから」

公共の場で猥談をかます事を躊躇っていた僕はそう言われて周囲を見渡す。映画好きの匡^{ただし}に連れられて、T S U T A Y Aで映画をレンタルした帰り道。今は夜の八時頃。

時刻も遅くなく、春の快適な気温の夜なのに本当に一人もいない。

「……この状況下ではやぶさかでは無い」

「おっいいねえ、そう来なくっちゃ。どんな女の子がタイプですか？」

「ご飯を作るのが得意な子とか」

「料理か。性癖って感じじゃ無いがまあ良しとしよう。…料理かあ。俺のクラスで一

番料理得意な奴誰だと思う?」

「料理の腕前とか家庭科の班で一緒にならない限り分かんないよ。…委員長とかは料理出来そうって感じするね。あとは哀悼あいとうくんとか」

「男じゃねーかよ。マ、確かに上手そうではあるけどさ。…あ、そういえばお前の姉ちゃんは料理上手いんだっけ」

「上手いね。いつもお世話になってます」

「お前姉ちゃんの事どのくらいスケベな目で見れる?」

「なんでそんな質問するんだお前っ!!? 実の姉相手はキツ過ぎるツ!!」

高校二年生、思春期の男が二人。ロクな会話をする筈も無い。下世話に下世話を重ねた言葉が春風に溶けて消えていく。まん丸な満月に見下されながら、僕達は住宅街を歩く。

本当に誰一人としてすれ違わない物で、そうになると猥談を止める理由もなくなっていくってだんだんとバカ話にも熱が籠こもっていく。

「最近自覚したんだけどさ。俺ホクロフエチかもしんねえ」

「ホクロ……………」

「こう、乳とかにホクロがあるのを見ると秘められた物を見た感じがしてさ…………。この子とかお気に入り」

そうやって匡はスマホの画面を俺に見せてくる。画面にはバニーガール衣装の金髪の女性が胸を強調した扇状的なポーズをしている。

右胸にはホクロが、「画面の左側には「びっくりするほど兎天国！」の文字。

「公共の場でAVの画像出すのやめろよ…」

「まあいいじゃん。人居ないし」

「そろそろ大通りやぞ」

駄弁りながら公園の横を通り過ぎ、大通りへ。

そこでふと、違和感を感じた。

「……人が、居ない?」

人どころか車すら走ってない。

普段なら川に流れる水みたいに沢山の車が走っているのに。

普段なら車のエンジン音と雑踏の足音が行き交っている筈の大通りを夜のしじまが満たしている。

空を見上げれば、カラス一匹も飛んでいない。ただただ丸い月がポツンと浮かんでいる。

「……なんか、怖えな」

匡がポツリと溢した。

整った目鼻、男子の癖にやたらと艶のある黒髪。

「あ、哀悼くんじゃん。脅かすなよな……。…こんばんは」

僕達に声をかけてきたのは同じクラスメイトの哀悼君だった。

噂をすれば影とでもいうのか、先程話題に上がった何でも器用にこなすイケメンくん。

…最初はビビったが、ようやく他人に会えた。異世界から現実に戻って来れた感じがする。

「お前達、どうしてここにいる」

「どうしてって、T S U T A Y A 行った帰りで……」

「……男二人じゃ夜道は危ないだろう」

「別にそんな事なくない?」

哀悼あいとうくんの言葉に匡ただしが答える。

高校生の男二人やぞ。まあ犯罪者に出くわさないと断言は出来ないが、危ないと注意される程でもないだろう。

「いいから。俺もついていこう」

「お前も文芸部の高校生だろ…? 高校生の男二人が三人になったって対して変わんなくないか…?」

「いいから」

…哀悼^{あいとう}くん、初めて喋ったが結構変な男かもしれない。

「まあいいじゃんか匡^{ただし}。人が何処にも居なくてなんか怖かったし……」

ぶっちゃけ結構不安だった。見慣れた場所から聞き慣れた音がしないのって怖い。そう思つて匡^{ただし}に声をかける。

人が多いに越した事はないし、一緒に帰つても不利益がある訳でもなし。二人より三人の方が賑やかでいいだろう。

「じゃ、いこうぜ哀悼^{あいとう}くん。君つて映画とか見るタイプ？」

「いや、映画はあま——伏せろっ!!」

僕は唐突に哀悼^{あいとう}くん^{あいとう}に押し倒され、地面に頭を打ちつける。めちやくちや痛い。思わず声が出た。

僕の目の前、ガチ恋距離に哀悼^{あいとう}くんの顔がある。うわまつ毛なつが。ビビる。

突然の情報^{しほう}の雨に混乱する僕の耳に、一拍置いて果実が潰れるような音が聞こえた。

反射的にそちらを見やる。

首から上が吹き飛ばされて、地面に尻もちをつく匡^{ただし}の姿が見えた。

「……あえ？」

思わず目を擦る。そして目を開く。

そこには変わらず匡ただしの死体があった。どぶどぶ首から血が溢れていて、悪趣味な噴水みたいだった。

視界の端で、哀悼あいとうくんが目を見開くのが見えた。

そして、匡ただしの死体の奥から、筋骨隆々の男が現れるのが見えた。

手には剣みたいな長さの包丁を持っていて目がギョロリとつき出ている。

肌が赤黒くて、額からサイのツノみたいな出っ張りがあつて。

一言で言えば、赤鬼。そう形容するのが正しい存在が突っ立っていた。

それも一人じゃない。

道いっぱいには赤鬼が整列している。口から涎がダラダラ出っていて、明らかに僕を餌として見ていた。

哀悼あいとうくんはいっぱいに目を見開いて、顔を怒りに歪ませる。

「……………悪い、助けられなかった」

そう言つて僕の上から退いた哀悼あいとうくんはまっすぐに赤鬼の集団を見据える。

哀悼あいとうくんは人差し指を首筋にくつつけて、「変身」と呟いた。それと同時に指が首にずぶずぶと沈んでいく。

第二関節まで指を沈めた後、哀悼くんは指を右回転させた。首のアザから中心に青い光の線が彼の全身に走る。その線を起点にして、彼の体が「開いて」いく。

レゴブロックで作ったものを分解してみたいに、指に、顔に、背中に線が走って、彼の体が分割されていく。

彼の体の断面からはグロテスクな肉は見えず、青い光が僕の目を焼かんばかりに漏れ出していた。

あんまりに眩しくって、僕は目を瞑った。

気がつくくと、僕の目の前にはゴシックなドレスを着た黒髪の美少女がいた。

服装も黒で統一されており、白い宝石がはめ込まれたイヤリングが一際目立って輝いている。

「逃げてくれ。守りきれぬ自身がない」

鈴が転がるような声でそう言った少女は、魔法少女の様なステッキを構えて赤鬼の軍勢に突っ込んでいた。

………は？

なんだコレ。

………えくくつと。哀悼くんが魔法少女で、あいでう匡ただしは死んで、僕は今から逃げなくちゃい

けなくて。

……。

コレ、夢か？　かなり夢だろ。風邪引いた時に見る達の悪いタイプの。親友がグロテスクに死んだというのに、心の中に困惑しか流れ込んでこない。あまりにも現実感がない。

なんなんだコレ。

……逃げなきゃ、いけないのかなあ。

そう思ってた僕はとりあえず後ろを向く。

すると、恐ろしく突き出た眼球と目が合った。

「……あ、青鬼？」

赤鬼と色合いが正反対な事以外は何もかもがそっくりな、もう一人の鬼がそこにいた。

鬼は表情をピクリとも変えず巨大包丁を一閃させた。

そう思った瞬間に、自分の視界が落下していく。

あ。胴体を真つ二つに、横一文字に切られたんだ。そう理解した瞬間、痛みもなく僕の意識はブラックアウトしていった。

▽
▽
▽

「……あえ？」

気づけば、僕は大通りに寝転がっていた。

寝起きのような回転がイマイチな頭で当たりを見渡せば、倒れている僕を避けて、鬼達が歩いていく。

……な、なんだ？

僕はさつき、明らかに即死したんじゃないかなかったか？

僕は起こった事象を考察する事で精一杯だった。

上半身だけを起こした状態で固まっていると、僕が生きている事に気がついたのか赤鬼青鬼が円を作りこちらを見つめてくる。目、目、目。何処を向いても恐ろしい顔に睨まれている。めちやくちや怖い。

「え、あ……」

「ギャガバギャアツツ!!」

「ひ、ひえっ……!!」

鬼達は唸り声を上げながら僕に向かって巨大包丁や金棒を一齐に振り上げてくる。あまりにも鬼達が恐ろしすぎて、信じられないくらい可愛い声が僕の口からこぼれ落ちた。

この同時攻撃を防ぐ方法も逃げるスペースも無い。僕はただ、腰を抜かして腕を顔の前に持ってくるしか出来ない。

「やせん」

その瞬間、鈴のような声が響いた。

小さい影が鬼達の頭上を飛び越え、僕を庇うように立つ。

「あ、哀悼くん……!?!」

哀悼あいとうくんは無言で一瞥を僕にくれると、手に持ったステッキを振り上げた。

プラスチック製にしか見えないステッキのてっぺんに付いているハートが回り出し、星型の光が凄いい勢いで全方位に撒き散らされる。

星型の光は囲んでいた鬼達の体を抉り、その眩い光を血で汚していく。ファンシーな光景なのに効果がエグすぎる。

星型の光は鬼達だけでなく、道路や壁に突き刺さっている。この技はつまり、発光する手裏剣を周りに撒き散らしているような物なのだろう。

鬼達は声を上げながら倒れこみ、動かなくなつた。そしてぱふ、とコミカルな音を立てて破裂する。

風船のように鬼の死体は霧散し、数秒後には元々死体があつた場所には何も残つていなかった。

哀悼あいとうくんは僕の方に向き直り、ふうと息を吐く。

「良かった。島咲しまさきも魔法少女として目覚めたんだな」

「はっ!!? な、何言ってる」

意味不明な事を言われ、思わず声を上げる。

そして気付いた。俺の口から俺の意思で声を出している筈なのに、声が女のそれだ。

自分の体を見下ろす。

両手は明らかに普段と比べて大きさが違うし、色も白くなっている。

身につけている服装は無地のTシャツからケーブル編みのセーターに。胸の部分を、双丘が服の下から押し上げている。穿いてたズボンズボンは膝丈の緑のスカートに。そして右手にはトンカチを握っていた。なんで???

「——危ない!!」

「はえ?」

間拔けな声を出した僕を、哀悼あいとうくんは有無を言わさずに抱き上げる。

自分より小さい少女に抱き上げられる感覚に驚くのも束の間、僕の頬の近くを弾丸が通過していった。

斜線上にいた鬼達は絶叫を上げながら絶命していく。その威力に思わず冷や汗が流れる。

……ちよつと待て、僕は今放たれた弾丸を視認出来たのか？

どんな動体視力が有ればそんな事は可能なのか。どんな形をしているかまでくつきりが見えた。

「ホゲエ~~~~ツツ!!」 な、なんじやコリヤああああああつっつ!!
??!!」

僕の思考を打ち切るように、甲高い女性の絶叫が響いた。

それと同時に鳴り響く発砲音。弾丸が雨あられとこちら側に撃ち込まれる。

「おそらく相葉だろう。あいつも魔法少女として目覚めたんだ」

哀悼くんはそういうと足に力を込め、僕を抱えたまま跳躍した。

一気にビルの三階程の高さまで跳躍した彼（彼女）は鬼達の残骸も、弾幕もいつきに飛び越え絶叫の元へと迫る。

「うわーっつなんだコレなんだコレなんだコレ!!」

「……………バニー、ガール……………?」

空から見ると、バニーガール姿の女性がどデカイスナイパーライフルを構え絶叫しながら倒れ込んだ鬼の体を撃ち続けている。

哀悼くんは素早くバニーガールの元に近づき、スナイパーライフルの先を掴む。

「……………相葉だな? 落ち着け、俺は哀悼だ」

「え……………?」

女性は呆けた顔をして弾丸を撃ちまくるのを止める。：僕は、その女性に見覚えがあった。

明るい金髪にバニーガール姿、そして右胸のホクロ。

「……『びつくりするほど兎天国』……?」

間違いなく、ただし 匡のスマホに映っていた女優だった。

▽
▽
▽

「……俺がこの世界に紛れ込んだのは四日前からだ。お前達同様に鬼に殺され、気がついたら女になる力を得ていた」

パニックになっていた匡をただし 落ち着かせた後、あいとう 哀悼くんは語り出した。

「女の状態だと身体能力、反射神経が著しく向上する。その上、再生能力があるらしく、一度腕もがれたがくつつ付いた。この力で襲ってくる鬼を返り討ちにしていたら、いつのまにか元の世界に戻っていた。毎日、この繰り返しだ。コレで俺の知っている事は全てだ」

そう言つて黒髪の少女は息を吐いた。彼（彼女）のイヤリングがきらきら揺れる。

その言葉を聞いて、僕は疑問に思つた事を尋ねる。

「…………ここに居た鬼は全部返り討ちにしたよね？　なんでまだ元の世界に帰れないの？」

「他にも鬼の集団がいるんだろう。以前にもそういう事があった」

「殺されて女性になる力を得るって事は、殺されても大丈夫なんですよ？　なんでさつき謝ったの？」

「俺以外も殺されて復活するか確証がなかった。…………俺はてつきり、俺に何か特別な力があるから魔法少女…………この姿に変身出来たのだと思っていた」

勘違いだったようだが、と付け加えて哀悼あいどうくんはバニーガール姿の匡ただしの方を見る。

「…………蘇ったお前を見て、てつきり、ここで殺された人間は自動的に魔法少女になるのだと思っていたが…………どうやらそれも違ったらしい。島咲しまぎはまだ魔法少女と言ひ張れるが、相葉あいははどう考えても魔法少女って感じじゃないな」

「そうだね…………」

匡ただしの服装は兎耳に真つ赤な肩出しボディースーツ、兎のしつぽに長いストッキング。胸元を大胆に曝け出した、体の線が浮き出るような衣装だ。

ただ一つ、AVの画像と違うのは首筋についた鍵穴型のアザだ。

「…………な、なんだよおつ、二人して変な目でみんなよおつ」

「変な目って…………」

「いいや見たね！ えっちな視線を感じた！」

匡は顔を赤くしてふりふりと怒っている。

……正直匡の巨乳に視線が吸い寄せられていた事は否定できない。だってこんな間近におっぱいあるの初めての経験だったんだもの。

男友達にそういう視線を向けてしまったという事実。僕は気まずくて目を逸らす。

目を向けた先に合ったショーウィンドウの中から、穏やかな顔つきの女性が見返していた。

長い髪は丁寧に梳かされ、頭の後ろでポニーテールにされている。そんな優しい印象とはチグハグにゴツイトンカチが右手に握られている。

年齢は十七、十九歳程。魔法少女と呼ぶにはギリギリアウトといった所。ケーブル編みのセーターに緑のミモレスカート。僕の理想の優しいお姉さんといった様子である。

……コレが、今の僕の姿。男だった時の面影は全然ない。

うん、僕の好みドンピシャって感じだ。こんな感じの近所に住んでる優しい姉さんに甘やかされたいだけの人生だった。

「……一体、どういう法則なのだろうな。この女性化は……」

「あ、それなら多分だけど想像つくよ」
哀悼あいとうくんの言葉に僕は答える。

僕の変身した姿は僕の好みドンピシャで、^{ただし}匡が変身したのはお気に入りのAVの女優さん。

「つまり、この姿は、僕達の性癖が反映されてるんじゃないかな……」

「せ、性癖……?!?」

^{あいとう}哀悼くんが衝撃を受けたように体を凍り付かせる。

「しかし、そんな、……あり得ないだろう」

「こんな夢見たいな状況化であり得ないも何もないだろ」

^{あいとう}哀悼くんの言葉に^{ただし}匡が突っ込む。

「………なんでそんなに否定するのさ」

「いや、その………。俺は、ロリコンじゃない」

思わず彼の姿を凝視する。

ぱつと見の年齢は十二歳程。髪の毛もドレスも美しい鳥の濡れ羽色だ。その指は白魚のようであり、その紫の瞳には星雲のような光が閉じ込められている。

あどけなさの中に何処か女の色気を秘めた下のつくその美貌は、世紀の彫刻家が妄執を注いで掘り出したかのように。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が僕達の間流れた。

哀悼^{あいとう}くんの言葉には必死さが感じ取れて、それがますます「ガチ」つぼくて。

何処か寒くなった場の空気を壊すように匡^{ただし}は無言で親指を立てる。

「……俺はロリコンもいいと思う!!」

「だから違うといっているだろう!!!」

哀悼^{あいとう}くんの叫びが誰もいない大通りに響き渡った。

何処か切ない絶叫だった。

暴力の時間

「……ひとまず、これからの事を考えよう。これから俺達はこの世界にいる怪物を倒さなければ、元の世界に帰れない」

一通り叫んだ後、哀悼あいとうくんは落ち着いたらしい。いつもの調子に戻って真面目な話をし出した。

「各々の武器を確認しよう。島咲しまぎはハンマー、相葉あいばはスナイパーライフルか。相葉あいばはソレ、扱えるのか？」

「多分大丈夫だ。本物ならもつと色々手間がかかるんだろうけど、なんか引き金を引くだけで弾が出る。……多分コレ、俺の好きなゲームに出てくる武器だ。弾撃った反動とかも無くて、ホントにゲームしてる時みたいに戦える」

そう言つてただし匡は手に持った銃身を上げ下げする。かなりゴツイ見た目ののに、オモチャの銃みたいに軽いらしい。それを見た哀悼あいとうくんは今度は俺に話しかける。

「島咲しまぎのハンマーは？ 何か特殊な効果とかあつたりしないか？」

「いや……ただのトンカチみたい」

そう言いながら僕はトンカチを空に振るう。

……どっから見ても、本当にただのトンカチだ。

ただし 匡はスナイパーライフルで、あいどう 哀悼くんは魔法のステッキ。おかしくないか？ なんだこの格差。

「俺らの姿に性癖が関係してるんだから、この武器にも俺らの好みが反映されてるとかなのかな」

「さて。まだ姿に性癖が反映されているとは限らないだろう」

ただし 匡の言葉に噛みつく哀悼くん。

しかし、現状そうとしか……。

まあ、仕方ないか。自分の思わぬ一面を突きつけられて、動揺しない人間など居ない。性癖が可視化されるといえるのは、人によっては死活問題だろう。

ここは生暖かい目で見守ってやるべきだ。

そう思って優しく彼（彼女）を見つめていると不機嫌な視線を返された。余計なお世話だったらしい。すまん。

……しかし、妙な話だ。僕はトンカチに思い入れなど一切ない。何故僕はトンカチを持っているのだろうか……？

「はあ……。俺の「ナイトワンド」……魔法のステッキは、振ると光の刃が飛び出てくる。光の刃はある程度俺の意思で操作でき、ステッキ自体の強度も中々で鈍器とし

でも使用可能だ」

名前あるんだそのステツキ。

匡ただしの銃たしみたいたしにそのステツキも何か元になった物があるのかな。

「俺あいつと島崎しまざきが前まへを歩き、相葉あいばが後ろから援護射撃えんごせつげきというののがいいだろう。……もちろん、戦ういくさのが怖いこわいのならば遠慮えんりょなく言いってくれて構かまわない。それは当然当然の反応はんおんだ」

そうあいついって哀悼あいとうくんは僕ぼくらを見る。

確かに、僕は生き物いきものなんかまともまともに殺ころした事こともない。むしろグロ画像ぐろがざなんかは苦手がたな部類ぶるいだ。あの鬼達おにたちは攻撃こうげきすれば血ちが出るし、逆に僕ぼくらを攻撃こうげきしてくる。哀悼あいとうくんも腕うでを千切ちぎられたらしい。

でも。

こんな非日常ひにちじょうに巻き込まれて、内心うちしんワクワクしない程ほど、男の子おとこのこの心こころを捨ててないつもりだ。……現実げんじつ離れなしてる事ことが立たって続けつづけに起おこって、自分が事ことの危険性けいけんせいを実感じつかん出来こてないのは自覚じかくしてるけど。男の子おとこのこはいつになってもチャンバラチャンバラが好き好きなのだ。

「大丈夫だいじょうぶだよ。むしろワクワクしてるあいつって感じ」

「……そうか？」

哀悼あいとうくんは心配しんぱいそうあいつに僕ぼくを見る。……哀悼あいとうくんは怖こわかっただろうな。一人ひとりきりで右

も左ひだりも分からないあいつのあいつに怪物かいぶつに襲襲われて。

僕がゲーム気分で鬼達に挑めるのは情報を整理してくれる哀悼くんがいるからだ。少し無遠慮な発言だったかもしれない。自戒。

「……俺はぶっちゃけ怖いけど、戦わないとここから出れないんだろ？ 他人任せつてのものなんだかな。……フレンドリーファイアしたらすまん」

そう言つて匡はスナイパーライフルを担ぎ、笑みを浮かべた。

哀悼くんも匡に笑みを返す。

「分かった。それでは行くぞ」

満月に見下ろされながら、僕らは静かな街を歩く。

僕にとって生まれて初めての、暴力の時間が始まるうとしていた。

▷▷▷

歩いて数分、見慣れた団地の駐車場に30人程の赤鬼の大群がたむろしてるのを視認する。

それと同時に赤鬼達は僕らを見つけたようで、僕らの方に体を向ける。

「島咲、今の状態の俺達は凄まじい身体能力を保持している。早歩きくらいのスピードで体を動かすんだ。全力で動けば群れに無防備に突っ込む事になるぞ」

「オス！」

あいつ哀悼くんの言葉に従い、僕は程々に足に力を込める。瞬間、僕は風になった。

「う、おおっつ!!?」

思ったより、速い。僕はなんとかブレーキをかけ、赤鬼の手前で止まる。

恐ろしい赤鬼の顔面が目の前に現れ、僕は反射的にトンカチを持った右手を振り上げる。正面にいた赤鬼の顔面がぐしゃ、と爆ぜた。それが開戦の狼煙になった。

「ガビババツ!!」

「うわうわっ、わっ！」

僕は遮二無二腕を振るう。腕の力だけの、不恰好な動き。

しかし振るわれたトンカチは、鬼の丸太の様な腕を、分厚い肉切り包丁を、棘のついた棍棒を。全てを叩き割った。

「う、嘘お…!?!」

少なくとも僕の身体を容易く両断出来る切れ味の武器と膂力を、コイツらは持っていた筈だ。その筈なのに、僕の一撃は鬼達の体を発泡スチロールでも削るみたいに容易く粉碎した。

僕の近くにいた四体の鬼は、瞬く間に四肢の一部を抉られ倒れ込む。

そしてぱあんという音と共に爆ぜ、跡形もなくなつて消えていった。

……どんな生態してんだコイツら。風船か？

「グギアアアツツ!!」

仲間を殺され怒り心頭といった様子で、後ろに控えていた鬼が飛びかかってくる。

右からの斧の大振りを後ろに下がって回避。続いて放たれる頭への攻撃をトンカチで弾く。

体制を崩した相手に向かって全力で蹴りを放つ。僕の蹴りは容易く相手の腹に減り込み、筋骨隆々な肉体を真つ二つに両断した。

……この肉体、思ったよりヤバいな。人間なんか、簡単に殺せそうだ。

「ゴギイイツ!!」

「……………っ!!」

戦いの最中に考え事をしていたのなら当たり前だが、思案に耽っていた僕に向かって鬼達の凶刃が飛んでくる。あまりに簡単に勝ててしまつて油断していたなど、自分の事ながらバカすぎる。

右、左下、上、突き。この隙を逃さんと大ナタを振るう赤鬼の猛攻を躲しきれず、僕は腕に傷を負つてしまった。

慌てて飛び退いて傷を確認する。大きな切り傷からは真つ赤な血が滲み、白い骨が顔を覗かせている。思わず声が出そうになる程痛々しい重症だが、痛みは全く感じない。

それどころか見ている端から傷が元通りに塞がっていく。話には聞いていたが、凄まじい回復能力だ。

トンカチを構え直し、残った鬼に向かい合う。

攻撃しようとして足に力を入れた瞬間、小気味いい破裂音と共に向かい合っていた鬼の頭に穴が空いた。

鬼は頭から血……血？ ……よく見れば血液に見えていたのは真つ赤な紙吹雪だ。

マジでなんなんだコイツら。どういう生き物なんだ。

とにかく鬼は頭から真つ赤な紙吹雪を垂れ流し、破裂して消滅した。

残っていた鬼達にも破裂音と共に穴が空いていく。

「なんかコツ掴んできた！ 後ろは任せとけ！」

「センキュー、助かった！」

^た匡の援護射撃だ。どんどん狙いが正確になっている。

後ろを見れば自動車の影に隠れながら膝立ちで銃を構えるバニーガールが。……絵面のインパクトが強すぎて未だに慣れない。

「おら、よそ見すんな！ 哀悼くんが全部倒しちゃもうぞー！」

確かに、哀悼^{あいとう}くんの戦闘スピードは凄まじい。

戦いながらも視界の端で煌めくステッキの光。それと共に飛んでいく鬼の首。

体の使い方がかなり上手なのだろう。哀悼くんは運動部にも負けず劣らずな中々のフィジカルを持っている。元々サッカー部だったとか、女子が噂してるのを聞いた事がある。運動音痴な僕では超人的な肉体を完全に使いこなせていないのだ。

僕が鬼を一体倒すくらい時間で、哀悼くんは鬼を四体くらい倒している。その上、戦い方が華やかだ。かれ（彼女）がステッキを振るう度に光の刃が複数の鬼に突き刺さる。まばゆい光と相反するような黒髪が宙に舞い、光のグラデーションを作り上げる。彼（彼女）の戦いに見入ってる内に最後に残っていた鬼の首が飛んだ。やっべ、僕鬼十匹も倒してない。かなりの数を哀悼くんに押し付けてる。

「……どうやら、今日はこれで終わりらしい」

哀悼くんがこちらに向き直る。彼（彼女）の首筋の鍵型のアザから、青い光が放たれていた。

匡も首から青い光を放っているし、僕の視界も左下辺りから登ってくる青い光を捉えている。

左の首筋が熱を持ち出す。その熱は全身に広がっていき、光も熱に比例するように強くなる。あまりの眩しさに一瞬目を瞑ってしまう。

「よし、帰って来れたな」

哀悼くんの声を聞き目を開ける。しかし視界に映る風景は先程までと変わらない。

無人の駐車場だ。

「帰って来れたはずだ。大通りに出てみれば分かる」

そう言われて大通りへの道を除けば、確かに人の雑踏が聞こえてくる。あるべき所にあるべき音が戻った事で、今一度自分が異常事態に巻き込まれていた事を実感した。手足から力が抜けていく。

そんな僕に向かってどこがぼおつとした顔で匡ただしが話しかけてくる。

「……さつきまでの、夢じゃねえよな？」

「夢じゃない。ほら、首筋見てみ」

匡ただしの首筋にはしっかりと鍵穴型のアザが刻まれていた。きつと僕にも刻まれているだろう。それが、さつきまでの出来事が現実であった事を僕らに教えてくれる。

「……話したい事がある。少しいいか？ これからの事だ」

背後から投げられた哀悼あいとうくんの言葉に、僕も匡ただしも足を止めて彼の話を聴く姿勢をとる。

「これを見ろ」

そう言っただけで差し出されたのはスマホの画面。中に映っているのは、ニュースの記事だった。

『未来の天才棋士の失踪 日頃のスパルタ教育のストレスか』と書かれたそれは、僕も

知っている内容であった。失踪した彼が、僕と同じ高校の生徒だったからだ。

「この街で起こった男子高校生の失踪事件は今月で二回目だ。……俺は、「向こうの世界」から帰って来れなかったのではないかと思っている」

「ちよ、ちよつと待ってよ。帰って来れなかったって、変身の力があれば鬼達には負ける事はないんじゃない……」

「現れる怪物の種類は日によって違う。一昨日のミノタウロスは、俺も負けかけた」
思わず声が出なくなる。自分よりも強化された肉体を十分に使いこなす彼が、負けかけた。

それはつまり、僕とただし匠がそのミノタウロスとやらに遭遇すれば。

「女になった状態なら腕がもげても治る。しかし頭や心臓を貫かれても生きていられるかは分からない。……もちろんこれはただの推測にしか過ぎない。失踪事件と「向こうの世界」が無関係な可能性もあり得る。が、もしもを考えるとゾツとする。実際、俺の他にも巻き込まれた者がいないか「向こうの世界」をパトロールしている時にお前達を見つけた」

パトロール。そういうえば、僕らに声をかけた時、彼は変身してはいなかった。いつ襲われてもおかしくないのだから変身しておくに越した事はない筈だ。あれは僕らを驚かせずに、僕らを護衛する為にあえて変身していなかったのか。キミちよつと性格良す

ぎないか？

「……これから毎日、夜になれば「向こうの世界」で戦わせられるだろう。これからは毎日八時前には集まっておくべきだ」

あいとう
哀悼^あくんの言葉に頷きを返す。

命の危機がある以上、油断は禁物だ。最大限に出来る事をしなければならぬ。

幸い僕も^{ただし}匡も部活は緩い。八時まで居残りするような事はないだろう。

「分かった、集合場所は……さっきの駐車場とかでいいかな？」

「俺は問題ないぜ」

「それで構わない」

僕にとって、初めての暴力の時間。

それは強い余韻を残しながら、僕の心に緊張を植え付けて過ぎ去っていった。

▽
▽
▽

「なんかいい事あった？」

家に帰ってきた僕に開口一番質問を投げかけてきたのはこの家の主、従姉妹の叶姉^{かなえ}ちゃんである。近場の中華料理店で働いてるので料理が上手い。癖っ毛が混じってる

ポニーテールと黒縁メガネが特徴の女性だ。

「……そんなに顔、ニヤけてます?」

「ニヤけてます」

自分の頬を抑える。……まだ僕は今の現状を楽観的に捉えていたらしい。命が危ないかもしれないって言うのに。

……正直言つて、今日の鬼との戦いは楽しかった。頭の中で想像するカッコいい動きを自分の体が簡単にしてくれるのだ。鬼達が思っていたより弱く、無双ゲームみたいにサクサク叩きのめせたのも大きい。自分がゲームの主人公になったみたいにつまみに捉え、暴力を楽しんでる自分がある。僕の中に、暴力の余韻が残っている。

自戒しなければ。明らかに今の僕の思考はデスゲームとかで真つ先に死ぬタイプの奴だ。落ち着け、落ち着け。

「あく、友達増えたんだよ。今日。TSUTAYA行った帰りに同級生に会って仲良くなった」

「二日で友達? アオハルじゃん。何話したんだよ」

「……下らない話だよ。マジで」

「キリキリ吐け。家主命令。詳細に情報を話すのじゃ」

この家では僕は姉ちゃんに逆らえない。春橋高校に通う為、彼女に頼み込んで頼み込

んで家事の大半を引き受ける事を条件に住まわせて貰っているのだ。実家からだど地理の問題で厳しかったのだ。

「……性癖トークだよ」

「ガハハ！ 想像の三倍は下らなかつたわ！」

嘘は言つてない、嘘は。

何とか姉ちゃんを煙に巻き、料理を食べて風呂に浸かる。そこまでしてようやく、僕は暴力の余韻を体から抜く事が出来た。

自称、魔法少女

「ちやつす、敏弘としひろ」

「……何の用だよ」

「八時まで暇だから遊びに来ちやつた」

せめて事前に連絡しろや。別にいいけどさ。

匡ただしはそういう所がある。ガサツというか、無駄を楽しんでるといふか。全体的に行き当たりばったりな生き方をしているのだ。

「お邪魔します。……うわ、お姉さん美人！ 写真撮ってもいいですか?！」

「ガハハ！ キミ見る目あるねえ！ いいよ！ 美人に撮ってくれよな！」

早いよ意気投合すんのが。

知り合ったばかりの人間に写真撮られるのには少し危機感持とうよ姉ちゃん。どんな悪用されるか分かんないよ。

それ匡ただしも初対面の人に遠慮なさすぎだろ。もっと過程刻めよ。

唐突に家の中が撮影会場と化した。姉ちゃんがセクシーポーズを取る度にスマホの

シャッター音が響き渡る。……身内のセクシーポーズ、結構キツいな。

数十秒程で突然の撮影会は終わり、ただし匡は満足そうな顔をする。

「あー楽しかった。そんじやなんかゲームでもしようぜ」

「つつても何するよ。八時までそんなに時間ないぞ……。……とりあえず僕の部屋に行つててくれる？」

「あいさー」

冷蔵庫からジュースを取り出してコップに注ぐ。

コップを片手に自分の部屋に行こうとした僕の背後から、姉ちゃんが話しかけてきた。

「今日もどっか行くんだ？」

「……まあね」

僕が哀悼あいとうくんに助けられた夜から三日が経った。

毎日八時になれば僕らは誰もいない街に放り込まれ、怪物との戦いを余儀なくされている。

当然、姉ちゃんには僕らの戦いの事を説明していない。上手く説明出来る自信もない。特筆すべき事象が多すぎる。

姉ちゃんは僕の目を数秒覗き込んだ後、プイッと目を逸らした。

「まあいいよ。重犯罪するんじゃないかなければウチは許す」

「軽犯罪だったらいいみたいなき草だな……」

やはり姉ちゃんはチャランポランだ。

でも、チャランポランなりに心配をしてくれている事も分かる。

「……大丈夫だって。別に危ない事してるんじゃないしや」

一応、嘘じゃない。未だに赤鬼青鬼以外の怪物には出会っていない。

手を軽く振るうだけで倒せる鬼達との戦いは、変身した状態の僕にとってチャンバラ

ごっこみたいな物だ。

だから嘘じゃない。多分。

▷▷▷

すまん姉ちゃん嘘ついた。むっっちゃ危ない事してるわ。

「大丈夫か敏弘^{としひろ}？」

「ダメ。体がダルい……」

学校の昼休み、僕は自分の机に横になっていた。

思い返すのは昨日の戦い。

いつもの様に駐車場に集まった僕らを誰もいない街で待ち構えていたのは、いつもの鬼達ではなかった。

見上げんばかりの巨大な体に力強い四肢。僕の背丈以上の長さもあるだろう牙に鼻。有り体に言えば象だった。それも尋常じやなく凶暴な。

僕らは車や電柱を跳ね飛ばしながら迫り来る象を相手に戦う事を強いられた。

そして哀悼^{あいとう}くんや匡^{ただし}より反射神経の鈍い僕は、象に踏まれ鼻で殴られ突進で吹き飛ばされ……と散々な目にあつたのだ。クソ象め、次会つたらボコボコにしてやる。

そこまでされて死んでないのは変身時の肉体の強度と回復能力が故だ。少し腕とか千切れたがなんか治つた。

しかしこの回復能力は決して無尽蔵という事はないらしい。戦いが終わつて変身を解いてからというものの、異常に体がダルい。朝からグロッキー状態で授業もまともに聞けていない。

もし哀悼^{あいとう}くんと出会っていなかったらと思うとゾツとする。

今回の象は三人でなければ勝てなかった。間違いなく、僕一人では勝てなかった。

僕は疲れた目で辺りを見回す。誰も座っていない空席が目についた。

「……あれ、今日斗越^{とこえ}くん休み?」

「おお、朝から居なかつたぜ。最近休み多いよなあいつ」

もしかすると斗越くんもあの空間に巻き込まれているんじゃないだろうか。そんな空想が頭を過ぎる。

本当はあの無人の街で怪物にやられてるんじゃないか。家出だと思われてるだけで、遠くないうちに失踪事件として扱われるんじゃないか……。

……ダメだな、少し考え過ぎだ。疲れているからか、陰謀論じみた事が頭を過ぎる。

「……少し寝るわ。五時間目になつたら起こして〜」

匡ただしにそう言つて、僕は返事を聞かずに机にうつ伏せになる。

微睡に身を任せ、僕は眠った。

▷▷▷

「何でテメエにそんな事言われなきゃなんねえんだ!!」

怒号が辺りに響き渡る。

七時半を過ぎた頃だった。いつも通り、八時からの戦いに備えて家を出た僕は、なんとなしにいつもと違う道を歩いて待ち合わせ場所である駐車場に向かつていた。

どうせだしなんか買おうかな、なんてコンビニを眺めていた僕は、路地裏から聞こえてきた怒声にビビり上がった。

普通であればスルーするであろう厄介ごとの気配。しかしそれが知り合いの声色を帯びていれば、無視する訳にもいかない。

こつそり、息を殺してそつと路地裏を覗き込む。

180cmを超えるガタイのいい男が吠えていた。後ろからでもわかるくらい特徴的な茶色の癖つ毛が揺れている。

「何やってんだよ四谷………！」

思わず小声を漏らす。

四谷善次郎よつたにぜんじろう。分類上は、一応僕の幼馴染に当たる。

小さい時から体格がよくケンカが強かった。性格も決定力があるというか、とにかくガキ大将気質な奴だった。

昔はよく一緒に遊んだんだが、四谷よつたには段々と頼り甲斐のある奴から横暴な奴に。

中学の最後の方では、ガキ大将というよりヤンキーみたいな奴になっていた。

僕と同じ春橋高校に通ってはいるが、高校になってからは一度も会話した事がない。普通のケンカ、例えば同年代の男子とのケンカであれば僕はこのままスルーしただろう。

しかし、相手がヤバイ。

「まあそうカッカすんなよ。大人の忠告は素直に聞いとくモンだぜ？」

四谷よったにに向かい合って声をかけるのは、190cmはあるだろう男。黒のスーツの上からでも分かる筋肉と合わせて、まさに巨漢と呼ぶに相応しい。

黒髪をオールバックにしており、右目にはこれまた漆黒の眼帯。明らかにカタギじゃなかった。明らかに暴力で飯食ってる人間の風貌だった。

し、死ぬ……！ このままでは四谷よったにが死んでしまう……！
ぐるぐると思考回路が巡る。

明らかにヤバい状況だ。真つ当な方法で四谷よったにを助けられる気がしない。

……ぼ、暴力か？ やるしか、ないのか？

このまんまだと明らかに不味い事になる。何にもしないのはあり得ない。

最近は途切れかけてきた縁だが、だからって見殺しにするほど安い縁じゃない。

……仕方がない。放って置いたら四谷よったにはコンクリ詰めににされて日本海に沈められる。

大丈夫だ、相手は人間……。鬼達を思い出せ、アイツらより怖くない！

「……………うおおおおあああつっ！！」

足に力を込めて、全力でアスファルトを蹴る。

四谷よったにの横を通り過ぎ、握りしめた拳を胴体に見舞おうと腕を振り下ろす。

その瞬間、足に痛みが走り視界が反転した。

「あ？」

巨漢の男は心底困惑したような声を出し、ひっくり返った僕を見る。びっくりするほど早い足払い。飛んでたハエを反射的に振り払うみたいな感覚で、男は僕を地面に転ばせた。

僕は急いで体を持ち上げ、右ストレートを相手の顔に向かって放つ。

これも顔色一つ変えずに右手で受け止められた。受け止められた僕の拳は万力みたいな力で締め付けられている。

「逃げろっよつたに四谷!! 死ぬぞ!!!」

「おいおい、なんだってんだよ……。俺が人を殺すような奴に見えるか?」
「見える!!!」

直後、顔を思いっきり男に引つ叩かれた。パシいいん、と頬からいい音がなり、僕は地面に崩れ落ちる。めっちゃ痛い。

「やたら血気盛んだな……。おいガキ、これお前の友達か?」

「あ? ……お前、島崎しまざきか?」

「そうだよバカ! 早く逃げろ! コンクリ詰めくみにされるぞ!!!」

「誰がするか誰が!! 人をヤクザやくざかなんか見たいに言いやがって!!!」

尋常じんじょうじゃない怒号が鼓膜を叩く。やべえめっちゃ怖い。僕死ぬかも。

「俺は刑事だ!! こいつが明らか未成年の癖してタバコ吸ってやがったから補導して

んだよ!!」

「えっ」

思わず振り返れば、四谷よったにの右手にはタバコが握られている。

「お、お前……! 何やってんだよ! 僕が意を決して飛び出した意味ないじゃん!!」
「知るか!! テメエが勝手にお節介焼こうとして自滅しただけだろ!!」

クソっ、全くの正論である。返す言葉もない。

「…………尋常じゃなくそそっかしいなあお前……。うっかりで公務執行妨害されちゃたまんねえぞ。今日の所は見逃してやるが…………」

「うす、すいません…………」

眼帯の刑事が、残念な物を見る目をしている。くそ、憤懣やるかたない…………。

正直最近人型の存在を攻撃する毎日が続いていて、暴力を振るう事に対するハードルが下がっているのを感じる。

ヤバイぞ僕。社会的動物として最悪だぞ僕。

自制だ自制。暴力良くない。

眼帯の刑事はあとため息を吐き、頭を搔く。僕のせいでストレスを増やしてしまい大変申し訳ない。

「…………あとお前、あれだ。最近夜に出かけるのは辞めておきな。最近、変な失踪事件

が多い」

「……何か、事件性があるんですか？」

……哀悼あいとうくんが気にしていた、男子高校生の失踪事件。

刑事だつて言うなら、何か知っているかもしれない。

普通の事件とは違う、異常性のある事件ならあの空間が事件に関わっている可能性は高い。逆に、異常性がないならそれはそれでいい。哀悼あいとうくんの杞憂きうだつたというだけだ。

「それはまだ分からないが……消えたタイミングなんか重なつててな。まあ一応念の為、近頃は外を出歩くのはやめ」

話の途中で刑事さんの姿が、突然ブレた。

古いビデオを見てる最中にノイズが走る見たいに、ぶちりと。

思わず目を瞬かせる。瞳を開けたら刑事さんの姿は、もうそこにはなかった。

「……あ？」

「……え？」

ずるりと、額に嫌な汗が流れた。

スマホを取り出し画面を確認する。「20:02」の文字が無機質に浮かび上がる。

路地裏から外に出れば、誰一人として歩いちゃいない。コンビニの中もすっからかん

だ。

四谷は信じられないような物を見る目で刑事さんがいた場所を見ている。

「……人が、消えた……?」

「……そうじゃない、俺たちが別の空間に移動したんだ」

「ああ……?」

四谷が溢した言葉に答える。

訝しげな視線が僕に向けられる。

「……何から話したらいいか。」

「とりあえず外を見てみる。誰も居ないだろ?」

「……テメエ、何を知ってやがる。何が起こってんだ?」

「あー。それは僕もよく分かってないんだけどさ……」

回らない頭から言葉をひり出そうとして、ふと気づく。

辺りが薄暗い。

ただでさえ光の届かない路地裏だから気付きにくかったが、暗すぎる。

まるで巨大な何かに月の光が遮られているかのように。

反射的に後ろを振り返れば、二つの巨大な眼光と目がカチ合った。

「ブオオオオオオーっっっっっ!!!」

猛獣の咆哮が路地裏を満たす。

マンシヨンの三階程もあるのかという巨体。大きく反った牙。全身に浮き出るグロテスクな血管。

間違いない、昨日散々な目に遭わされた、あのクソ象だ。

僕は躊躇いなく左手の人差し指を首のアザに突き立てた。

視界を埋め尽くす青い光。

右手に振り慣れたトンカチの重みを感じた瞬間、僕は両足に力を込める。

クソ象も僕の敵意を感知したのか、その長い鼻を全力で振りかぶった。

一瞬の溜めのあと、僕は飛んだ。

宙に飛び上がった僕を叩き落とそうと、象の鼻が僕に叩きつけられる。

「グギ……！」

痛い。

痛い、耐えられない程じゃない。

僕は胴体にめり込んだ鼻に、お返しとばかりにトンカチを叩きつけた。

痛みで身を振る象に握力だけで無理矢理しがみつ き、顔面に張り付く。

正面から戦っては力負けする事は昨日理解させられた。

僕の狙いは、初めからお前の急所だ。

トンカチを振りかぶる。狙いは相手の巨大な瞳だ。

どちやつ、という湿った物が潰れる音と共に象が吠えた。うつわ気持ち悪い感触。

「オオオオオオオツツ?!?!」

クソ象が悶え、顔を上下に振り僕を振り落とさんとする。

流石に潮時だろう。僕は象に蹴りを見舞い、その反動で顔面から離れる。

「プフーフ、プフ、ブオオオ!!!」

動物の気持ちなど普段はさっぱりわからない僕だが、今この象が怒声を発している事は分かった。

発狂したかのように足を動かし、近くの建物をやたらめったら破壊している。

相手は興奮してるようだし、視界も悪い。

よし、四谷よったにを連れて今の内に逃げよう。もし殺されても復活するとはいえ、みすみす殺させるのは目覚めが悪い。

僕は振り返り、腰を抜かして倒れ込んでいる四谷よったにをお米様抱っこする。

「な、な、なん……?!? なんだ、なんなんだお前………!!!」

「……んん、説明が難しいから後で!! 今は逃げるよ!」

象とは逆の方向に全速力で駆ける。

入り組んだ路地裏を抜け、誰もいない道路をひた走る。

直ぐに後ろから轟音が追尾してきた。僕を追って、無理矢理狭い路地裏に自身の体を詰め込んでいるらしい。

後ろを振り返れば、両足を血まみれにしながら鬼気迫る表情でクソ象が僕を追いかけてくる。

しかし、この無人の町で轟音を響かせながら僕を追うのは悪手だろう。

何せ、目立つ。目立つという事は、それだけ僕の仲間も僕を見つけやすくなる。

パアンパアンと、ここ数日で聞き慣れた発砲音が響いた。それと同時に、象の無事だったもう片方の目も赤く染まる。

たまらず動きを止めた象に向かって、近くの一軒家の屋根から黒い閃光が猛然と襲いかかった。

「はあああああつっ!!」

力強くも幼さを纏った声が響く。

次の瞬間、空中に巨大な星形の光が出現した。

それは一直線に射出され、象の巨体を脳天から真つ二つにする。

「ブ、オオオ……」

象はか細い声で鳴いたかと思うと、破裂して消滅した。

危機は去ったらしい。

僕はそう判断し、抱えていた四谷よつたにを地面に下ろす。

「……お、おとお、」

「え？」

「お前なんなんだっつ!! 何なんだよっ!! 何なんだよアレっつ!! 説明しろっつ!! 一言で説明しろっつ!!」

汗をダラダラ垂らした四谷よつたにが、全力で僕に掴みかかってきた。

うおっ、めっちゃ肩が揺れる。やめてくれ、酔いそう。

第一なんだって言われても僕だって分かんねえよ。何だよ性癖が具現化する空間って……。

しかし説明を求められてもうまく説明出来ないのは困るな。なんかいい言葉はないか。

そう思った僕の頭に、ふと哀悼あいとうくんの言葉が思い浮かんだ。

「あー、なんていうの……、魔法少女、的なの？」

……ダメだ、逆に四谷よつたにを困惑させてしまった、うわスツゲエポカンとした顔。写真撮つとこ。

過去と今

「……自分の性癖通りの姿になる空間、だあ………？」

巨象を撃退した僕らは馬鹿みたいな顔で突っ立ってる。四谷よつたにの前に集まり、今巻き込まれている事象に関して知っている事を全て話した。

四谷よつたには何度も額を抑えて、何度も目を擦って僕らを見て、ようやく現実を認められるようになったらしい。……現実を飲み込むのが無茶苦茶に早いな。

「……まあ、今の所は納得しといてやる。それで、バケモン倒さなきゃ帰れないんだろ。俺どうすんだよ。変身出来ねえぞ」

「あえて殺される必要も無いだろう。お前の事は俺達を守ろう」

四谷よつたには哀悼あいどうくんの言葉に少し不快げな表情を隠そうともせず、手をポケットに突っ込みながら続ける。

値踏みを続けるみたいな、嫌な視線で僕らを一瞥する。

「……あー、いいわ。怪物の攻撃で死ねば、俺は戦えるんだろ？ 別に守んなくていいよ」

「しかし、いいのか。生き返るだろうとはいえ、死ぬんだぞ？」

「いいよいいよ。誰かにおんぶに抱っこつてのもしょうに合わないし」

「……………だが」

食い下がる哀悼^{あいとう}くんに向けて、「うぎつてえなあ」などポツリとこぼれる言葉。

鳥の濡れ羽色の魔法少女が思わず怯んだ隙に四谷^{よつたに}は言葉を続ける。

「哀悼^{あいとう}だっけ？ お前も島咲^{しまさき}もいい人ですつて顔に書いてあるのが気に入らねえ。偽善臭くて気分悪い」

おいおいおいコラ、流石にライン越えだぞ……………!? 尋常じゃなく神経を逆撫でしてくるなコイツ。な〜〜にが偽善じゃカス。どうせ善意の定義もあやふやな癖によお……………。

ふと、哀悼^{あいとう}くんの顔を見やる。人形のような少女の美貌が、本当に人形のように固まつてしまった。結構ショック受けてんな……………。

匡^{ただし}は視線を彷徨わせオロオロとしている。ケンカ…というより、争い事に慣れてないらしい。

流石にこれ以上好き勝手言わせる訳にはいかない。僕は四谷^{よつたに}の罵声に口を挟む。

「お前なあ、僕らと敵対して何の意味があんだよ。行方不明者が多いって話、しただろ？ 最近休みの人も多いしウチのクラスだつて最近斗越^{とこえ}とか、学校来てないし……………」

「お前らが考えすぎなんだよ。学校休む理由がこの異常現象のせいだとは限らねえだ

ろ。……斗越とこえつてあれだろ、斗越とこえ貴たかゆき之し」

何故僕とクラスの違う筈の四谷よつたにが斗越とこえくんの事を知っているのか。

何故そんな、自分の手柄を誇るような嫌な笑みを浮かべているのか。何となく、嫌な予感がした。

「アイツが学校来なくなったの、俺が虐めてたせいだし」

一瞬の思考の空白の後。グ、と脳みその奥が熱くなる。

この感情は、きつと失望だ。一応は友人であった相手に対する、失望と怒り。

何言ってるんだよ。何やってんだよ。気分悪いのはこっちだよ。楽しそうに自分の悪行誇りやがって。

自分の中から溢れ出てくる罵倒はしかし、言葉にならずに消えていく。感情が飽和して何をしたらいいか分からない。

「……聞いていて不快だ。イジメなんぞやめろ」

「あ？ 何でお前に指図されなけりや行けねえんだよ。……オナニーに他人付き合わせでんじやねえよ、異常ペド野郎が」

「……っつ!! ……俺は、俺はおかしくなんかない!!」

哀悼あいとうくんの怒声が一体に響き渡った。喉から絞り出したような、心からの絶叫だった。

親しい関係になってまだ四日の短い付き合いだ、僕は彼がこんなに大声を出すのを初めて見た。そんな彼が拳に力を込めるのが視界の端に映った。

止めるべきか迷って……即座に今の自分達の膂力に思い至る。

思わず、哀悼あいとうくんを止めようとして――

「俺はおっぱいが好き!!!」

は？

「年上のお姉さんが好きだ！ バニーガールも好きだ!! あと、あれだ、おっぱいピンタも好きだ!!」 乳房で撲殺されたい!!」

「あ、ああ？ 何言ってるんだ変態野郎」

「そう！ 俺は変態！ そしてこの場には変態が三人!!! 民主主義的に異常野郎が正義だ!! どうぞマトモな四谷よったにくんは何処へなりとも失せろ!!!」

何言ってるんだこの匡バカは。

しかし意味不明かつ唐突な猥談に毒気を抜かれたらしく、四谷よったには「チツ、気色悪い……」と捨て台詞を吐いて踵を返した。流星に今回ばかりは同意するわ。

後に残ったのは怒りの矛先を失った哀悼あいとうくんと、居た堪れない空気に耐えられなくなったのか段々と顔色の悪くなっている匡ただし。お前が始めた事だろうがなに冷や汗かいてんだよ。

……クソつ。全く。

こういう所が、気に入ったんだよなあ……。

酷く奇つ怪な物を見る目で見てくる哀悼あいとうくんの視線に耐えられなくなったのか、哀悼あいとうくんから顔を逸らしてゐる匡ただしに声をかける。

「……なんだっけ、おっぱいピンタ？ 半分くらいギャグじゃね？」

「うるせえ掘り返すな別にいいだろギャグ入ってる方が又けんだよ!! ……いや、そのさ、アイツ斜に構えてるっていうか。何言つても皮肉で返されそうだからさ、な？ 意味不明な言動で翻弄するしかねえかなあつて。……分かるだろ？」

「狂人の真似とて大路を走らば……」

「うるせえなあ! 時と場合によるだろ!! 今のはかなり正気の狂気だったろ!!」

「はいはい立派だった立派だった」

「褒め方が雑う!!」

いやまあ、雑に褒めたが嘘を言つたつもりもない。

何も出来なかつた僕に比べて、荒事慣れしてない癖して声を張り上げた匡ただしの事を僕は

本当に立派に思う。

言わないけど。

絶対言わないけど。

「……凄いな、相葉は」

ポツリと、低い声が会話に挟まってきた。

哀悼あいとうくんの表情は暗い。彼（彼女）の拳は、まだ固く握り締められたままだ。

「それに比べて俺は。……情け無い」

「あー、まあ急にあんな事言われたら腹立つだろ。気にすんなって……」

「そうだよ。僕だって変身してる状態じゃなかったら殴ってるよアイツの顔面」

僕がしゅっしゅっとしてシャドーボクシングのように拳を放つ。

そうしたら哀悼あいとうくんはふ、と笑ってくれた。握り締められた拳も解かれています、よう

やく安心する。

そのまま数分間駄弁っていると、自分の首筋のアザが青く発光していくのが分かつ

た。戦いが終わって現実世界に帰る時の合図だ。四谷よったが敵を全部倒したらしい。

気づけば僕らの正面には車が止まっていて、大音量でクラクションを鳴らされた。急

いで歩道に出る。今度からアザが光り出したら歩道に出る事を心がけなければいけな

い。

僕は数分間喋った後、今日は解散する事にした。
何処からかカエルの鳴き声が、僕を慰めるみたいに鳴り響いていた。

▷▷▷

『あいとうくん、へんなの！』

小さい頃の、幼稚園の頃だろうか。

魔法少女のごっこ遊びをしている彼女達の仲間に入れて欲しくて、俺は必死に頼み込んで。返ってきたその言葉に、前後不覚になるくらいよつたにの衝撃を覚えた。

四谷の言葉に応じて掘り起こされた昔の傷は、今なお俺の心に新鮮な痛みを与えている。
る。

変。おかしい。

そんなことは自分でも分かっている。

だんだん子供らしい物からは卒業していく同い年の子供達。両親の視線。

好きな物を好きだと叫んではいけないのか。そんな事を考え反発すればする程、自分に自信が無くなっていく。世界が自分を受け入れてくれないように感じる。

偶然触れたネットの世界で知った、ロリコンのレットル。

自分がそれに該当する人種である事も、大きくなるにつれ、性欲を知っていくにつれて何となく分かってきて。

ただ俺は、俺が彼女達を好きだった理由が、性欲という言葉で塗りつぶされる気がして。自分が酷く悍ましい存在に感じられて。

認めたくなくて、自分が異常じゃない事を誰かに分かって欲しくて……。

「……アツつ」

沈んでいた思考が、頬に感じる熱で現実引き戻される。

隣を見れば、コーンポタージュの缶を両手に持った相葉あいばが笑みを浮かべている。頬に感じた熱はあの缶だろう。

「へへ。最近まだ寒いしき、買ってきたんだ。飲むか？」

「……すまないな」

「謝らなくていいって。俺が好きで買ってきたんだし」

気遣わせてしまったな、と思う。

相葉あいばは意外にも……と言っては失礼だろうが、見た目から受ける印象よりもずっと気を配る男だ。

今はその気遣いが少し嬉しくて、少し申し訳ない。

スマホを見て時間を確認する。「19:44」の文字を確認して電源を切る。

いつも集まっている駐車場の横にある公園のベンチに座り込み缶の蓋を開けた。

缶を煽れば、仄かな牛乳ととうもろこしの味がゆっくり口内に広がっていく。

コーンポタージュを一口に含んだ所で、相葉が話しかけてきた。

「なんか顔暗いけどさ、どしたん？ 四谷に合うかもしれないのが嫌とか？」

「……ああ」

会って間もないが、俺はもう四谷よったにの事が嫌いだ。

根も葉もない事を声高々に言われたからじゃない。むしろ、アイツの言葉は俺の本質をピタリと言いつけてる。

異常なものも、自己満足の為に他人に手を差し伸べているのも事実だ。偽善だと罵られるのも仕方ない事だろう。

「うーす、二人とも……。あ！ コーンポタージュだ！ いいなあ!!」

「今真面目な話してるんだよ！ 自分で買ってこいやコンコンチキが!!」

明るい声によつて沈んでいた意識が逸らされる。島咲しまさきの声だ。

島咲と相葉あいばはそれなりの声量で言い合いを始めてしまう。喧嘩というよりは、じゃれあつていてという印象だ。

……二人の明るい声を聞いていると、なんだか悩んでいる事が馬鹿らしくなってきた

た。

「……話の途中ですまんかった。話、続けようか」

「いや、もういい。お前達の声を聞いていたらなんだかどうでも良くなってきた」

「ええ……？ そんな事ある？ ……なんか納得できない事が、あつたんじやないのか？」

納得出来ない事、か。

四谷よつたにの言葉は事実ではある。納得出来ない訳ではない。

……しかし、そのフレーズには引つかかる物がある。

記憶を探れば納得出来ない事は、確かにあつた。納得出来ないというより、納得したくない事が。

「……俺は、所謂魔法少女系のアニメが、まあ、好きなんだが……」

言葉は自分でも驚くくらい、するりと口から溢れた。

まだ一週間程の短い付き合いだが、島咲しまぎも相葉あいはも心の底から信用している自分がいる。

二人が善人である事もそうだが、自分が魔法少女好きである事が既にあの空間のせいでバレてしまっている事も要因の一つだろう。

思い返せば二人は自分がロリコンである事を肯定してくれていた。否定しなかった。

……心の底から信頼出来る友達ができたという点では、この意味不明な現象にも感謝していいかもしれない。

「……大きくなるにつれて、彼女達を、その。……スケベな目で見てる自分に気づいてな。……もしかして、俺が彼女らに感じていたあの熱はただの性欲だったのか、ただの異常性の発露なのかと……。そう、悩むようになってな。四谷よつたにの言葉で悩みが再燃したんだ」

言っているうちに、自分の頬が熱くなっていく事が分かった。

自分でも小さな事に悩んでいると思う。溜まっていた物を吐き出したような感覚と、それなりの羞恥心が俺を襲う。

どんな反応をされるだろうか。呆れられたりしないだろうか。

そうやって羞恥に悶える俺に、島咲しまさきが声をかけてきた。

「んじや、レビューしてよ」

「え？」

「いやさ、自分の好きが性欲由来なのかどうか不安なんだろう？　じゃあさ、何処をどう面白く感じたとかかを言語化してみても、僕らに説明してくればいいんじゃない？」

……あ、そうだ。今日の戦いが終わったらTSUTAYA行こうぜTSUTAYA。魔法少女系のアニメ借りよう。僕そういうの見た事ないからさ、見所とか解説して欲しい

な」

何気なくかけられたその言葉に、じわりじわりと胸が熱くなる。

自分の言葉を真つ直ぐに受け止めてくれた事に。何より、自分の好きな事を否定せず、興味を持ってくれた事に。

「……いいのか？ 俺は今日、財布を持ってきていない」

「あ、僕も持つてねーや。じゃ、明日ね」

「そうだな。……明日、借りに行こう」

明日という言葉を口に転がして噛み締める。上がりそうになる口角をなんとか抑える。

こんなに約束事を楽しく感じるのはいつぶりだろうか。小さい頃は、友達と遊ぶ時は常にこんなにわくわくしていた気がする。

相葉あいばはそんな俺を見てふ、と笑った。

先程とはまた少し違った恥ずかしさに襲われる。

「……ま、俺としてはそもそも性欲で好きになつてもいいと思うけどな。エロいから好きつてのは、非難されるような悪い事じゃないだろ」

「……だが、胸を張れる事じゃ無いだろう」

「いやいや、俺達男子高校生だろ？ エロさとイタさは標準装備、どう足掻いても切り

離せねえって。みんなそんなモンだよ……」

みんなそんなモン。言葉にされれば簡単だが、本当にそうなのだろうか。

そこまで考えて、昨日の相葉あいばのおっぱい星人宣言に思い至る。なんだか途端に説得力が出てきた。

「……エロさとイタさは標準装備、か。ふ、確かに相葉あいばを見ると、そんな感じがしてくるな……」

「いやそれは普通に悪口だろ」

頭を叩かれた。痛い。

「おら、そろそろ八時だぞ。馬鹿やってないで戦う準備しろ〜」

島咲しまぎにそう言われ、気を引き締め直す。

数秒の後、街から一切の音が消えた。虫の羽音も、やたらと車道を走っていたエンジンの音も、不自然に聞こえなくなる。

この辺は交通量もそこそこあるから、異界に巻き込まれた時には直ぐに分かる。ここを集合場所を選んだのは正解だった。

ステッキを握る力に手が入る。とつと怪物を倒して、「魔法少女ナイトゴーン」のオススメポイントを紙にしたためたためねばなるまい。

▷▷▷

絹を裂くような悲鳴、とはまさにこの事だろう。

数分間無人の街を歩き回っていた俺達の耳に、絶叫が聞こえてきた。数秒の後、悲鳴は怒号に変わる。

間違ひなく戦闘の音だ。

戦つてる相手は恐らく、四谷よつたに。

「助けに行こう」

そう声を出した俺を、島咲しまざきと相葉あいばが覗き込んでくる。

「いいんだな」と確認するような目だ。

俺は笑つて頷きを返す。

『嫌いな貴方だけど、助けずにはいられないの。私が私である為にはね』。
魔法少女ナイトゴーンの主演、テスのセリフだ。

24話のこのセリフは気合いの入った作画と合わさつてめっちゃくちゃカッコいいのだ。あとでレビューポイントとして後でメモしておこう。

住宅街を変身の力で強化された足を持って一気に駆け抜ける。

邪魔な一軒家や川は飛び越える。家を飛び越える際に少し屋根を壊してしまつたが、

この無人の街で壊した物は現実に反映されたりはしないようだから、多少傷つけたとしても問題はない。

そうして最短距離を駆け抜けて、俺達は悲鳴の音源。小学校のグラウンドへと辿り着いた。

グラウンドには二人の人影が立っていた。

一方は女性だ。胸元を大胆に曝け出したナース服を着ており、綺麗な茶髪が月光に反射している。

荒い息をしており、立っているのも辛そうな印象を受ける。

恐らく四谷よったにが変身した姿だろう。……嫌いな相手だが、性癖を知ると何処か心の距離が縮まった気がする。

問題はもう一方の人影だ。

人影とは言ったがその身長は3mはあるだろうか。かなりの猫背であり、正確な所は分からない。

右手には斧を抱え、左手には小学生の身長程はあろうかという長い爪が並んでいる。頭から突き出る角と青い肌は、五日程前によく戦った青鬼を思い出させる。

頬はぷくりと膨らんでおり、突き出した目も合わさってカエルのような印象を受けた。

「……ちよつと可愛げのある顔してるな」

島咲しまざきがそう零す。

……正直よく分からないセンスだ。島咲しまざきはカエルが好きなのだろうか？
とりあえず今はあのカエル鬼を倒さなければいけない。

俺はステツキを振り、光刃を飛ばしながら四谷よったにの元に駆け寄る。

カエル鬼は俺の光刃に不意を突かれたようで、雄叫びを上げながら後方にジャンプをした。上手く四谷よったにと距離を取らせる事が出来た。

四谷よったには俺の事を確認するとくしやりと顔を歪める。

……なんて声をかけたらいいんだろうか。あんなに散々馬鹿にした相手に助けられれば、プライドも傷つくという物だろう。

取り敢えず無難な感じで挨拶でもしておくか。あんまり四谷よったにがピンチである事に触れない感じで。

「こんばんは。……いい夜だな？ 四谷よったに」

「嫌味かテメエ!!」

む。怒らせてしまった……。

やはり俺はダメだな。相葉あいはばのような気遣い名人には成れそうにない。これ以上刺激しないように黙っておこう。

「……シカトこいてんじゃねえ!! ぶち殺されたいか!?!」

むむ。さらに怒らせてしまった……。

今の四谷よつたには美人な為、怒った顔や声に迫力がある。怖いな……。

しかし昨日のような軽薄さというか、余裕が無い。やはりあのカエル鬼に苦戦している事は間違いないようだ。

「……やはり苦戦してるようだな、手を貸そう」

「……………つつ!! そんなモンいらねえよ!! 引つ込んでろ!!」

「そうはいかない。アレを倒さなければ、俺達は元の世界に帰れない」

相手を見据えて、ステッキを振るう。

星形の光刃が相手の首目掛けて飛んでいくが、カエル鬼は素早くステップを踏んで回避する。

俺を無機質な瞳で見つめるカエル鬼の視線からは、今までの怪物達と違いこちらを見定めようとする意思が伝わってくる。

「おおおおつ!!」

島咲しま咲が雄叫びを上げて突貫するが、難なくいなされ、カウンターに強烈な蹴りを見舞われた。

地面に転がる島咲しま咲にカエル鬼は拳を振り上げ追撃を放とうとするが、突如として体勢を崩す。相葉あいばの援護射撃だ。

間違いなく今がチャンスだ。ステツキを振るい光刃を飛ばす。

怪物はのけ反った視線のまま動けない。間違いなく当たる筈だ。

光刃が相手に当たった瞬間、カエル鬼が此方を向いた。

「ビュっっ!!」

突如として奇妙な鳴き声をカエル鬼が上げる。その瞬間、俺は全身に衝撃を感じながらグラウンドの端まで弾き飛ばされた。

「か、は……?!」

遅れて走る、鈍い痛み。

口から酸素が抜けていく。思考が纏まらない。自分が上を見ているか下を見ているかすら分からない。

気づいた時にはカエル鬼は目前まで迫っていて、その巨大な足を俺に振り下ろそうと――。

「おっ、らあ!!」

怒声と共に、突如カエル鬼の背丈が縮んでいく。

手足の比率はそのままだ。その体が縮小していく。

体のサイズが変わった事により、踏みつけ攻撃は俺の少し前にズレた。

二分の一程まで体を縮めたカエル鬼を、四谷よっただにが蹴り飛ばす。

「グギ……………」

蹴り飛ばされたカエル鬼は油断なく四谷を見つめ、警戒したように半歩下がる。カエル鬼の身長は徐々に大きくなっていき、数秒ののちに元の大きさに戻った。

その隙に島咲がカエル鬼に飛びかかった。俺の視界の端で戦闘が繰り広げられる。

「情けねえなあ。どの面下げて手を貸すなんて言い出したんだよ」

口角を歪ませ、四谷が俺を見下ろしてくる。

「……………今の現象は、四谷が起こしたのか？」

「あ？ ……教えて欲しけりや教えて下さいって土下座しろ」

「……………協力しなければ、勝てない」

「じゃあ協力して下さいだろ？ 上から目線でペチャクチャ喋ってんじゃねえよ」

……………こいつ。もしかして、俺の口調が気に食わないのか？

そういうえば、俺が守ると言った時も不機嫌そうにしていた。さてはコイツ、相手が自分より下の立場じゃないと気に入らないのか？

ワガママな態度にストレスは感じる。

こいつの発言に反抗心も沸いてくる。

だけど。

俺は躊躇い無く膝をつき、頭を地面につける。

所謂土下座の体勢だ。グラウンドの砂が額に当たって痛い。

「協力して下さい。俺達三人を、あのカエル鬼から助けて下さい。……お願い、します」

俺達が今こうして悠長に会話が出来ているのは、島咲しまぎと相葉あいはの二人が絶え間なくカエル鬼に攻撃してくれているお陰だ。カエル鬼の攻撃で倒れた俺を守る為に二人は戦ってくれている。

もしかしたら、俺達三人ならカエル鬼を倒せてしまうかもしれない。こんな性格が終わってる奴相手に頭を下げる必要なんか、無いのかもしれない。

でも、倒せないかもしれない。負けるかもしれない。……誰か、死んでしまうかもしれない。

そんな事、あつていい筈は無い。すでに明日の予定は埋まっている。みんなで生きて帰る為なら俺は土下座でも何でもしよう。

俺はチラリと四谷よつたの顔を伺う。俺の推察道理なら、四谷よつたには下手に出ればちゃんと協力してくれる筈だ。

四谷よつたには笑うでもなく、ただただポカンとした顔をしていた。数秒置いて、頭を掻きむしりだす。

「……分かったよ、助けてやる。それで文句ねえだろ」

「本当か?!」

よし、俺の推察は正しかったらしい。

これからも適度にヨイシヨを続けていれば、四谷よったには俺達に協力し続けてくれる筈だ。
四谷よったには俺に顔を寄せて、手の平を出す。そこにはものさしが乗せられていた。

「……ものさし?」

「俺の能力を説明しておくぞ。このものさしを相手に投げつけりゃ、相手は小さくなる。それだけだ。最大で二分の一くらいまで小さく出来る。ものさしはいくらでもポケットから出てくるし、伸ばす事も出来る。そしてアイツの能力だが、口から高速で巨大な水の塊を飛ばしてくる」

言われてみれば、俺の体は何かの液体で濡れている。てっきり出血したのかと思ってたが……。そういえば、島咲しまさきは象に踏まれようが潰されようが血を一滴たりとも流していないかった。

「俺の能力なら、水の塊を小さく出来る。これで敵の攻撃はある程度凌げる」

「なるほど、相手を小さくする……。自分を大きく見せたがる、お前らしい能力だな」

「テメエ土下座した時の殊勝な態度はどこ行つたんだコラ!!」

しまった、口が滑った。

貶すつもりは無かったんだが……。

……しかし、もしかしてそういう事なのか？

変身したと時にかいつの間にか持つてる武器は、俺達自身の性質によって決まる……？
俺達が何を武器としているか、そういう事が関わってるのか……？

「つたく、とつとといくぞー！」

四谷よつたにの声に従い、俺は島咲しまぎの元へと駆けていく。

カエル鬼の能力で厄介なのはその俊敏性だ。まずは足を狙うべきだろう。

俺は青色の足に向けてステッキを振るう。カエル鬼は機敏な動きで光刃を避けるが、ステッキを踏んだ瞬間を見計らって島咲しまぎがカエル鬼の膝裏を殴打した。

一瞬動きを止めたカエル鬼に、四谷よつたにの投擲したもののさしが刺さる。

1. 5 m程まで縮んだカエル鬼の脳天に島咲しまぎの金槌がクリーンヒットした。

「グゲツ!! びゅっつ!!」

「痛つたいな！ 何すんだよぶち殺すぞ!!」

カエル鬼は負けじと口から水弾を放つが、島咲しまぎは怯まず殴り返す。体が縮小した事で水弾の威力も下がって居るのだろう。

そのまま二人は至近距離で殴り合いを続けるが、段々とカエル鬼の身長が戻っていくに連れて島咲しまぎが押し負け始める。

「一旦離れろ！ 俺が撃ち抜く！」

相葉あいはの声を聞いた島咲しまさきはバックステップでカエル鬼から離れようとするが、それより速くカエル鬼の手のひらが島咲しまさきの体を掴み取った。

カエル鬼は島咲の体を盾のように胴体の前に構える。俺達は攻撃を一瞬躊躇って硬直してしまい、その間にカエル鬼は島咲しまさきを相葉目掛けて投げ飛ばした。

「うおおあああつ!!」

「ぐええええつつ!!」

二人は塊状態になって地面をゴロゴロと転がっていく。

無防備な姿を晒した二人に、カエル鬼は水弾を叩きつけた。

「があつあああああつ!!」

「いっただああああああつ!!?」

轟音と共に二人は校舎の途中で吹き飛ばされた。ガラスの割れる音が嫌に耳に残る。

「二人ともつ、大丈夫かつ!!」

「人の心配してる場合か! 来るぞつつ!!」

四谷よったにの言葉に視線を戻せば、カエル鬼が頬を膨らませていた。

水弾の予備動作だ。四谷よったにがカエル鬼の顔面目掛けてものさしを放り投げる。

水弾だったらこれで対処出来ただろう。しかし。

「……びゅううううううつつ!!」

「な、にっ!？」

カエル鬼の口から放たれたのは、巨大な水の柱だった。

点ではなく、線の攻撃。一発限りの弾丸では無く、絶え間なく浴びせられるレーザー光線。

それは四谷よったにのものさしを弾き飛ばし、俺達を飲み込んだ。

まるで巨大な滝に放り込まれたような衝撃を全身に感じたかと思えば、俺はなすすべなく校舎の壁へと叩きつけられていた。

「ぐうううっ………!!」

勢いそのまま、俺の体はコンクリートで出来た校舎の壁をぶち抜き、誰の物かも分からない机に何度も叩きつけられてようやくやぐ止まった。

後頭部を酷く打ち付けたからか、頭が痛い。視界がボヤける。

全身が痺れと倦怠感に襲われて、もう動けない。動きたくない。

首だけを動かして、辺りを見渡す。……四谷よったにの姿は、見当たらない。分断されてしまったらしい。

巨大な人影が、月光を背に此方へ近づいてくる。

らんらんと光る突き出た目が何処か笑っているようにも見えた。

………怖い。

怖い。怖い。怖い。

今までは漠然としていた、死への恐怖。

それが俺の背中を這いずつているのが分かる。

口から放たれる水弾か。それとも爪か。斧か。もしくは足で踏み潰されるのだろうか。

嫌な想像が頭をよぎる。

数秒、数分後があまりにも怖い。

怖い。怖い。怖い。怖い——。

『……こんな状況下で逆転勝ちしたら、めっちゃくちやにカツコいいよね!』

——ふと。

こんな状況下に相応しく無い、明るい声が響いた。

「アル、カ……」

アルカ・コアトル。「魔法少女ナイトゴーン」に登場する、主人公のライバルキャラ。落ち着いた性格の主人公、テスと違いそそっかしくて慌てん坊。物語をかき乱したりする時もあるが、ピンチの時はその持ち前の明るさで最善の未来を掴み取る女の子。

俺の手に握られているテスのメイン武器ナイトワンドが、微かに瞬いた気がした。

……何となく。

自分が何故これを持っているか、分かった気がする。

俺に取って彼女達の輝きは、きつと武器なのだ。

現実には負けない為の武器。未来の不安に負けない為の力。このステッキは、その力の象徴だ。

周りを見ろ。

目の前には巨大な怪物。

そして絶対絶滅の魔法少女俺。

逆転勝ちにはこれ以上ないシチュエーションだろう？

腕に力が籠る。

足の震えが止まった。

やろう。あの日入れてもらえなかった、ごっこ遊びの続きをしよう。

物語の花形、主人公は——俺だ!!

そう決意した所で、足音が聞こえてきた。

それと共に、聞き慣れた声も。

「おおおおおおりゃああつっ!!」

カエル鬼の顔面を咆哮と共に殴り飛ばしたのは、島咲しまいきだった。

何度もカエル鬼の攻撃を喰らって居るのにピンピンしている。二発攻撃を喰らっただけでふらふらな俺とは大違いだ。

「哀悼あいとうくん大丈夫?!? 生きてる!?!」

「生きてる、大丈夫だ……」

「……そうだ。俺には仲間がいるじゃないか。

島咲しまいきにも付き合って貰おう。多分、そっちの方が楽しい。

「なあ、島咲しまいき……。俺は多分ずっと、魔法少女ごっこがしたかったんだ……。お前達に会った日、街のパトロールなんてしていたが……。俺の本音は多分ごっこだ。知りもしない他人の為を思っていた訳じゃなくて、ずっと魔法少女らしい事がしたかっただけなんだ」

「……ごっこ遊びでも、それで僕らが助かったのは事実だよ」

「フフ……。そうか。……。これからも、俺のごっこ遊びに付き合ってくれないか?」

「良いよ。仲間でしょ?」

「……ああ、全く。最高の返答だ。

予感がした。

俺は今、何かしらのステージに上がった。

無意識に身を任せて体を動かす。根拠は無い。理屈も無い。意味があるかも分からない。

ただただ体が、「自分を解放しろ」と俺に囁いていた。

俺は現状を打開させる一步として——首のアザに、指を突っ込む。そして捻る。何回も繰り返した、変身の動作だ。

変身状態で、更に変身。何が起こるかはさっぱり分からない。しかし恐れは無い。高揚感だけが俺を満たしていた。

「俺の姿を見ろ。希望たり得る俺の姿を見ろ」

青い光の線が全身に走るのを感じる。

そしてそれは俺の足を伝って教室の床、そして壁に。その線を起点にして、空間が「開いて」いく。

「さあ、第二ラウンドだ」

▷▷▷

「さあ、第二ラウンドだ」

えつつちよつつちよつつちよと待って待って待って待って???

なんか右も左も凄い事になってるんだけど。何これ。これ何?? 哀悼^{あいとう}くんこれ何???

ねえさっきの詠唱っぽいやつなんなの? それも魔法少女ネタなの?? ねえこれなんなの怖いんだけど!!

轟く閃光

哀悼あいとうくんが地面を踏み締める。

そのたびに彼の足元から木の根のように亀裂が広がっていく。それは生き物のように床に、壁に、天井にまで広がっていく。明らかに、物理法則を超越した何かが目の前で広がっていた。

僕はただそれを唾然としながら見ていた。目の前に何が起こっているか、さっぱり分からぬ。

哀悼あいとうくんが自信満々にしてるから、多分カエル鬼を打倒しうる攻撃……なんだろうけど。

僕が呆然としてしていると、亀裂が「開いて」いく。自動ドアが開閉するように、左右に広がり亀裂の幅を広げていく。

その亀裂から、何かが僕目掛けて飛び出してきた。

「う、ええええっつっ?!?!」

驚きタタラを踏む僕に、飛び出してきたそれは甘えるように纏わりつく。

それは二本の緑色の線だった。素早く僕の腕を捉えたそれは生きているかのように

動き、可愛らしいリボン結びを僕の右手首に生み出す。

「可愛いリボンは魔法少女の証。常に優しさで満ちているお前には、グリーンが似合いだ」

「……………う、うす……………」

キメ顔でそう言う彼(彼女)に、僕は戸惑う事しか出来ない。なんか哀悼^{あいとう}くんテンションおかしくないか？

呆気に取られている僕は、突如としてじんわりとした光に包まれている腕のリボンに目を落とす。

直後。凄まじい熱が、リボンを通して僕の腕に流れ込んできた。

「おおっ!？」

熱は腕の血管を通して体全体に。足に、お腹に、脳に。全身の血管にグツグツの熱湯を入れられた気分だ。

そして熱は全身を巡った後胸に集まって、心臓の鼓動と共に再度全身を駆け巡る。全身がポカポカする。お風呂上がりのスツキリした気分によく似た感覚だ。

「このリボンは、お前の能力を向上させる。……答だ」

「答!?! 推定なの!?!」

「仕方がないだろう、初めて使うんだから」

僕の体大丈夫かな。

気分いいけどさ、この気持ちの人が人為的なモノだと思ふと途端に不安になるんだけど。哀悼^{あいとう}くんの匙加減一つで僕の体爆散したりしない？ 大丈夫？

「ゲエエエツツ!!」

不安に思う僕の耳に、幾度となく聞いたカエル鬼の鳴き声が聞こえてきた。

慌てて体を音の方向に向き直させる。味方の行動がインパクト強すぎて敵の存在を忘れていた。

カエル鬼は頬袋を膨らませる。水弾を放つ為のチャージの動作だ。

「ビュ ヅツツ!! ビュツツ!!」

慌てて斜線上から逃れようと足に力を込めるが、間に合わない。視認出来る速度を遥かに超えた水の弾丸。それが射出される音を鼓膜が捉えた。

衝撃に備え、腕を交差させ目を瞑る。

轟音、そして振動が僕を襲う。

しかし痛みも衝撃も無い。

目を開ければ、真紅のドームが僕らを守るように包んでいた。

「喚くな。新必殺技の解説シーンは、黙って聞くのが鉄則だぞ」

よくよく目を凝らせばドームは大量の赤いリボンの束で構成されている事が分かる。

哀悼^{あいとう}くんのリボンだ。

沢山のリボンで編まれた防壁は、放たれる水弾の衝撃を柔軟に受け流し、僕らをしかと守り抜く。

しかし水弾は止まらない。まさに五月雨のように、衝撃が絶え間なく襲ってくる。うめき声と共に哀悼^{あいとう}くんの頬に一筋の汗が滲んだ。

「ぐっ……。しまったな、このリボンへのダメージは少ないが俺に還元されるらしい。長くは持たない。……島咲^{しまさき}、アイツの攻撃が途切れた瞬間、防壁を解くから全力で突っ込め。今のお前はリボンの効果で強化されている筈だ」

「そんな事言ったって、そんな都合よく攻撃が途切れる訳もないし……」
「ふっ、忘れたのか？ 俺達には仲間がいるだろう」

「ビュツツツ!! ビュツツつ!! ……グエえっ?!」

瀑布のような音を立てながら攻撃音の最中だけど、僕の耳は確かに一つの破裂音を捉えた。

それと同時に水弾の音が止まる。ドームが解けていく。

「人のダチにチマチマチマチマ、何してんじや……っつっつ!!!」

「ただし、可愛らしくなっちゃったメゾソプラノボイスを聞いた瞬間、僕は駆け出した。」

全身全霊で床を蹴り飛ばす。

尋常じゃない速度だった。リボンから伝わってきた熱が足に集中している。

一步一步を踏み出すたびに、僕は加速していく。

カエル鬼が突き出た目玉を更に見開いて僕を見る。

拳を僕に振おうとするが、もう遅い。

僕は前のめりになりながら、カエル鬼の胴体をトンカチでぶん殴った。水を含んだポリタンク、あるいは大きめのゴムタイヤみたいな感触だった。

全力でトンカチを振り抜く。グシャリと音がして、カエル鬼の胴体に穴が空いた。そこから、パラパラと臓物の色をした紙吹雪が零れ落ちる。

「グエエエエエエエエエエエエツツツ!!」

「島咲!! しまさき ところで止まれ!」

そう言われ、地面に足を突き刺す。それくらいししないと勢いがついた今の僕は止まれなかった。

後ろを振り向けば、僕の右手首から伸びたりリボンが途中から枝葉のように分かれ、カエル鬼を締め付けている。

カエル鬼の向こうでは、哀悼あいとうくんがステツキを構えていた。彼(彼女)の掲げるステツキの先には、巨大な魔法陣が展開されていた。

濡れ羽色の少女の周りには淡い蛍のような光が纏わりつく。酷く神秘的な光景だが、それと同時に凄まじい力が渦巻いているのを肌で感じる。

「横に飛べ!! デカいのを一発打ちかます!!」

「りよーかい!!」

哀悼^{あいとう}くんに返事を返しながら真横にステップを踏む。

カエル鬼も僕と同じように真横に移動しようとするがそれは出来ない。蛇のように哀悼^{あいとう}くんのリボンがカエル鬼の手足に絡みつき、動きを阻害していた。カエル鬼も魔法陣に渦巻く力を感じているのか、必死になってリボンを引きちぎろうとしている。よほど哀悼^{あいとう}く人を警戒しているのか、^{ただし}匡の射撃で穴が空いていく自分の体に目もくれない。

「グエエエエエエ………つつ!!」

「……………つつ!!」

リボンが千切られる。そのたびに哀悼^{あいとう}くんの体がよろめく。しかし哀悼^{あいとう}くんも負けていない。千切られた端からまた新たにリボンがカエル鬼の手足に絡みついていく。しばらくの硬直の後、カエル鬼が一際大きく吠えた。

「グエエエツツツツツ!! ビュツつつ!!」

「アグああつ……………!」

カエル鬼の、自傷をも躊躇わないリボンへの水弾攻撃。放たれた水弾はカエル鬼の脚

の肉ごとリボンを引き裂いた。

哀悼あいとうくんが悶える。魔法陣の光が、チカチカと点滅した。

その瞬間、カエル鬼は跳躍した。

脚の肉が引き裂かれていたせいだろう。不恰好なフォームで、飛距離も大した事が無い。しかし哀悼あいとうくんが苦い顔をした事から、カエル鬼の判断は間違つて無いのだろう。

カエル鬼の口角が僅かに上がったかのように見える。

次の瞬間、カエル鬼の姿が消えた。

消えたと言っても僕の視界から完全に消えた訳じゃない。カエル鬼は着地した場所から跳躍した場所に瞬間移動していた。

まるで動画のスキップボタンを押したのかのように、カエル鬼は微動だにしないまま数mの距離を移動したのだ。

呆気に取られる僕ら。

カエル鬼は何度もその場所から動こうとするが、動いては動いては元の場所に戻っている。

「化け物は俺が押さえておく！ テメエはきつきとデカいのをブチかませー！」

校舎の二回から、四谷よったにの声が響く。アイツはずっと前線に出ず、縮める能力を使う機会を伺っていたんだ。

四谷よったにが腕を振るう。その度にカエル鬼はどれだけ動こうと元いた場所に戻ってしま
う。

……アイツ、何を縮めてるんだ？ ……まさか。

空間そのものを「縮小」させて瞬間移動させてる？

嘘だろ、そんなのインチキだろ。

いやでも、僕らが助けに来るまで四谷よったにはカエル鬼と一対一で戦っていた。

カエル鬼は僕らと四谷よったに、四人で戦ってギリギリ勝負の土俵に立てるくらい強い。瞬間
移動くらいのインチキ能力がないと、あの水弾攻撃で直ぐに押し切られてしまうだろ
う。

カエル鬼は頬を膨らませ、四谷よったにの方を向く。水弾の予備動作だ。

普段なら何とかして四谷よったにを守らなくてはいけないが、それには及ばない。

カエル鬼の頬に開いた穴から、ボロボロと大量の水が溢れているからだ。

「ぐ、グエつつ?! グエエつつ?!」

カエル鬼は自身に何が起こっているか理解出来ない様子で、何度も頬に水を溜めよう
とするがその度に頬の穴から水が溢れていく。

哀悼あいとうくんの拘束を外す為、匣ただしの銃撃をまともに受けた結果だ。

今のカエル鬼はレンコンのように穴だらけ、最早水弾は使えない。

「ゲゲケエエっつ!!」

カエル鬼が一際大きく鳴いた。断末魔のようだった。

そしてそれを掻き消す、鐘楼の音がグラウンドに響き渡る。

濡れ羽色の少女が金色に染まり切った魔法陣をカエル鬼へと向けた。

「――アルス・マグナあああつっつ!!」

あいどう
哀悼くんが吠える。

魔法陣から射出された、極大の光の柱がカエル鬼を飲み込んだ。

鳴り響く鐘の音と共に現れた力の奔流は、敵対者の最後の抵抗すら許さない。

咆哮と共に放たれたそれは、まさに必殺技。主人公にのみ許される、逆転を可能にする一撃だった。

数秒の蹂躪の後、最早破壊する物はないと悟ったのか光の柱はゆっくりと消えていった。後にはえぐれた地面だけが残っている。

完全にカエル鬼がチリ一つ残さず消し飛ばされたのを確認したのと同時に、僕の首筋にあるアザが青い光を放つのが分かった。戦いの終わりを示す光が僕を包み込んでいく。

つまり、完全勝利だ。

「……………おおおつっつしゃあああーっつっつ!!」

勝利を確信した瞬間、僕は吠えた。全力で吠えた。勝利の美酒を全力でかつ喰らった。

熱が、高揚が僕の全身を包み込む。

何処からか聞こえてきたケロケロという鳴き声が、僕を祝福していた。

▷▷▷

「で、結局あれ何??? 何あのビーム???」

戦いが終わった後、僕は哀悼^{あいとう}くんを質問責めにしていた。

匡^{ただし}が泡を食ったように哀悼^{あいとう}くんに詰め寄る。四谷^{よつたに}も気になるらしく、壁に寄りかかり

僕らの話を耳を傾けている。

かくいう僕も気になって仕方がない。なんだよあのリボン。なんだよあのビーム。マジで。

おら、説明しろ。早く。

「あのビームは、アルス・マグナと言ってだな。『魔法少女ナイトゴーン』の主人公の必殺技で……」

「いやそれも聞きたいけどさ、何で急にビーム出せるようになったの?? あのリボン

と何か関係があるの?」

哀悼あいとうくんはしばらく目線を彷徨させた後、少ししどろもどろなりながら言葉を話す。

「……何とかというか、だな。アルス・マグナを出せるようになったのは……。何とかというか、そう、お前達に俺が心を開いたからだと思う」

「心?」

「そうだ。あの時、島咲しまぎは俺を肯定してくれただろう。それで自分を曝け出す決心がついた」

「うん? その言い分だと、元々リボンもビームも使えただけ使わなかったって事か?」

匡ただしの言葉に哀悼あいとうくんは首を振る。

「いや、そうじゃない。あのリボンは俺の心そのものというか……。あー、俺達の容姿は、俺達の好みによって変わるだろう。……多分だけど、俺達の力の本質は願望の具現化……。俺達の願望を元にした、「現実の塗り替え」なんじゃないか?」

現実の塗り替え。

確かにそう言われると、何故かしっくり来る気がする。

「俺が自分を曝け出す決心……。自分の願望に素直になる事が出来たから、出来る事が増えたんだと思う」

出来る事が増えた。

ふと、哀悼あいとうくんがりボンを出す前の事を思い出した。

僕らが変身する時に出る青い線が、足元を伝って床や壁にまで広がっていた。

……能力が、進化している？

塗り替えられる対象が自分から、近くの物体にまで広がったって事なのか……？

「あの現象……そうだな、性癖全開とでも名付けようか」

「え？」

「は？」

ひつどいネーミングセンスだ。

思わず匡ただしと声が揃った。

え。マジ？ いや、え？ どんなセンスしてんだコイツ。

「……いや、自分の心の内を明かす……というか、あのリボンはおそらく俺の心の内の具現だ。心の内を全開にするという意味で、性癖全開。……分かるだろう？」

「分かんないけど？」

……あー、性癖って確か心の性質というか、心理上の癖……。つまり性格とかの事を指すのが本来の意味なんだっけ。

……。

いやでもなあ。

「正直どうかと思う」

「ええっ」

逆にかっこいいとでも思ってたの……？

「……」

「……」

「……」

「……」

僕ら四人の間に、絶妙な沈黙が漂う。

「……聞きたい事も聞き終えたし。今日は解散、するか」

「そうだね」

そんな感じで、勝利の後の熱は何処へやら。

何とも言えない空気の中、僕らは解散した。

▷▷▷

「いやあ、凄いですね。スイキ、やられちゃいました。一人は胚を開くまでに至ってる

……。中々優秀な子達ですねえ」

『どうした？　なんか声が硬いじゃん、じじい』

「いやね、ちよつと気になる奴がいて……。今から写真送りますね」

『……これは……』

「お知り合いだったり、しますかい？」

『……いや、覚えがないね。……ネツソスの血を使え。コイツの中身を暴いてこい。

神ローカバール兵を使つても構わない』

「了解。明日、しかけます」

▽
▽
▽

「ハツ、ハツ、ハツ……………」

目を開ける。見慣れた天井が目に入つて、今までの事は全て夢だったのだと悟る。思い出せ。思い出せ。

何処からが夢で、何処からが現実だった？

「き、昨日は、カエル鬼を倒して……………」

昨日はカエル鬼を何とか撃破して。

そして、そうだ、哀悼^{あいとう}くんが性癖全開だか何だか言い出したんだ。

それで僕らはちよつと不機嫌になつた哀悼^{あいとう}くんを宥めて解散した。ここまでは間違
いなく現実だ。

僕はその後、普通に家に帰つて、ご飯を食べて、風呂に入つて。

そして、そして、そして——。

「うう、う。ぶ。つ。つ……………」

思い出した夢の内容に吐き気が込み上げる。

そうだ。あれは夢、の筈だ。そうじゃなきゃいけない。そうじゃないとおかしい。

夢の中ではクラスメイトが、哀悼^{あいとう}くんが、匡^{ただし}が、僕が。

みんなみんな、死んでいた。

死体の山だった。一人残らず死んでいた。

絞殺だった。

刺殺だった。

射殺だった。

毒殺だった。

撲殺だった。

惨殺だった。

十人十色、それぞれ違うやり方で殺されていた。塵殺だった。

……マジで何だったんだ。

意味が分からない。何が、どうしたらあんな夢を見るんだ……？

ベットから体を起こす。

体を動かすと、下腹部の辺りに違和感があった。

何だか、体が重い。パンツの中が、冷たい。

嫌な予感がする。嫌な予感がする。嫌な予感がする。

しかし僕の指は止まらない。

ゆっくりと、ズボンに手をかけ、パンツの中を覗き見る。

「おっ。」

白濁色の液体が、ぬらぬらとそこにあつた。

「オエっ、」

吐き気がする。

気分が悪い。

何が起こっているのかさっぱり分からない。分かりたくもない。

頭の中がぐるぐるする。僕は何をしなくちやいけないんだっけ？

「えっと、学校行かなきゃ」

着替えをしなきゃ。遅刻をしてしまう。

そうなったら困る。

……何で困るんだっけ？

何で学校に行きたいんだっけ。何で遅刻したらダメなんだっけ？

「ぼ、くは。………出会いが、欲しくて」

僕は、そうだ。

高校で彼女を作りたいかったんだ。

その為に勉強も頑張ってた。この学校の事も調べて。

調べて。調べて。調べて。調べて。

………何の。何の確信があつてこの学校を選んだんだっけ。

「あ、え？」

何でこんなに頑張ってるんだっけ。

わざわざ姉ちゃんに頼み込んでまで春橋高校に通ってるんだっけ。
 何でこんな苦勞をしてるんだっけ。僕は本当に僕なんだっけ？いつから僕なの？

本当は全部分かってる癖に。

「あ、うえっ」

気分が悪い。

気分が悪い。

気分が悪い。

カエルの鳴き声が聞こえる。

カエルの鳴き声が聞こえる。

ケロケロという鳴き声が、僕を見つめている。

見下している。ケロケロ。ケロケロ。ケロケロ。ケロケロ。

こんなの僕じゃない。

こんなの僕じゃない。

こんなの僕じゃない。こんなの董コ縛控c縛エ縛?? 螟ア荳亥、オ縛? 縋域ツ 阪&縋灘

ソ?? 縛励→縛? 干縋縛薙ー縛ア縛セ縛溷? 驟壹j

▷▷▷

「うーっす、おはよー姉ちゃん」

「おはよーさん。ご飯出来てるよー」

寝ぼけ眼な敏弘としひろに声をかけられ、ウチは気の抜けた返事を返す。

今日の朝ご飯はちりめんトースト。料理をしつかりするのがダルい時はこれに限る。料理を食卓に並べ、椅子に座る。

ウチの正面に敏弘としひろが座り、目を擦りながらコップに牛乳を注いでいる。

「……そいえばさー、さっきあんたの部屋から物置がしたんだけど。何かあった？」

「ん、いやあ？ 特に何も無かったけど？」

ウチの質問に、心底不思議そうな顔をしながら敏弘としひろはトーストを口に運ぶ。その顔は嘘をついているようにも見えない。

「んー、寝ぼけてベットから落ちたとか？」

「いやいや、僕ベットで起きたって」

そう言つてウチを覗き込んでくる敏弘としひろの顔には傷一つ見当たらない。

……まあ、ケガとかしてないんないいや。

ウチはそう思いながら、淹れたてのコーヒーに口をつけた。

迫り来る過去

時刻は午後六時半。

いつもより早く、僕は待ち合わせの駐車場に集まっていた。昨日有耶無耶になった、哀悼あいとうさんと一緒にTUTAYAに行く約束を果たすためだ。

僕と匡ただしは暇つぶしに指スマをしている。マジで暇なのである。

「すまん、遅れたか？」

「お、来た」

「俺らが早すぎるだけだから気にしなくて良いぜ」

僕と匡ただしが指スマで数分に渡る激闘を繰り広げていると、哀悼あいとうくんが来た。

彼はその場で止まると、肩からかけていたメッセンジャーバッグを開いて封筒を出してくる。

「島咲しまいし」

「ん？ 何これ」

「アニメのレビューをしたためてきた」

封筒を開けば、原稿用紙くらいのおおきな紙が出てきた。中を見れば、イラストなど

を交えてストーリーやオススメのポイントが分かりやすく解説してある。

す、スゲエ。写真や図などを巧みに使って伝えたい事が一目で分かるようになってやる。

見る相手の事をキチンと考えられて作られたデザインだ。文字数がそんなに多くない所が人に読ませようとする意志を感じる。

そういうえば哀悼くんハイスペイケメンだったわ。結構天然気味だから忘れてた。ふと哀悼くんを見ると、カバンの中からもう一つ封筒が見える。

「ん、哀悼くん。そっちのは……」

「ああ、これは四谷用だ」

「四谷用って……」

「果たし状だ」

「!?!」

▷▷▷

僕らはTUTAYAに行つて、アニメを十話分借りた。

その後両親が居ないらしい匡の家に入つて、アニメを二話分見た。

僕はアニメをあまり見ないが、クオリティが高いのは分かった。軽快な話のテンポも心地いい。

ちなみに主人公は哀悼^{あいとう}くんの変身した姿にそっくりだった。

そうして三話目も見ていたが……。

「あれ。電源切れた？」

突然、ぷつりと音を立ててテレビ画面が黒く染まる。

「丁度八時になったんだな。こちら側ではインターネットは繋がらないらしい」

哀悼^{あいとう}くんが時計を確認し、そう言つて億劫そうに立ち上がる。

「ちえー、いい所だったのにな」

「戦わないといけないの、そろそろダルくなってきたねえ」

正直、この異常現象にも慣れてきた。既に未知は既知に変わっている。

昨日のカエル鬼のような強敵が現れないとも限らないが、全力を尽くせばどうにかなるだろう。僕らは何度か怪物を退けてきたのだ。

僕らはのっそりと立ち上がり、無人の街に繰り出した。

女体化した自分達の跳躍力に任せて、適当な一軒家の上に登る。

屋根から屋根へと飛びながら、無人の街を移動する。

最近発明した見回り方法で、こうした方がより多くの範囲を見渡せる。

「お、三時の方角に象はつけーん！」

匡ただしの声に従い視線を動かす。

その方向には、見慣れた巨象が家屋を破壊しながら移動している様子が見えた。

幸いにも相手は僕らに気づいていないみたいだ。僕はトンカチを構え直し、象へと足を進める。

10 m、8 m、5 m。象の尻と僕の間距離が近づいていく。

後一息で僕のトンカチがブヨブヨとした皮膚にめり込もうという所で――。

「え？」

――ずるりと。

巨象の首が落ちた。

見間違いかと、僕は瞬きをする。

何度見ても象の首はあるべき場所に無く、過去僕の体を散々打ち据えた怪物は首から赤い紙吹雪を垂れ流すだけのオブジェに成り下がっていた。

四谷よつたにか？

自分で自分に問いかけ、その考えを否定する。アイツのものさしじゃ、どうやってもあんな綺麗な切り口にはならない。

「……新しい魔法少女か？」

哀悼あいとうくんがそう呟く。

その可能性が高いだろう。

きつと自分の身に起こった出来事に困惑してるだろうし、なるべく早くこの世界について説明してやらねばならない。

そう思考を巡らしていると、象の体が細切れにされていく。結構グロテスクだ。

あの巨象をこんなにも簡単にズンバラリンしてしまうとは、余程強力な武器を持つているのだろうか。

象の肉塊が四散し、その向こう側に立っていた人影が視界に入ってくる。

「……………え」

思わず声が出る。

象の肉塊の先には二人の人間が立っていた。

一人は身の丈程ある刀を構えた、漆黒のスーツに身を包んだ姿の女性。

ベリーショートの髪型に鋭い目つきも相まって、デキるキャリアウーマンといった感じだ。

持っている武器からして象を細切れにしたのは彼女だろう。

そして彼女の隣に立っていたもう一人。

性。そう、男なのである。

太い指で錫杖を抱え、右目に眼帯をつけている。人を数人殺してそんな眼光は、一度見たら忘れられない。

というか、見覚えがあつた。

思い起こされるのは数日前、四谷よつたにとあつた日の夜。

「刑事さん……?」

そう、僕がヤクザと間違えて殴りかかった刑事さんである。

……な、何故ここに。ここに来るのは男子高校生だけなんじゃなかったのか？ 哀悼あいとう

くんの予想は外れていたのか？

いや、そんな事を考えている場合じゃない。この世界に巻き込まれて困っているなら

手を貸さなくては。

匡ただしと哀悼あいとうくんは突然のコワモテに驚いているし、ここは一応の知り合いである僕が行

くべきだろう。

「あ、その……」

えーつと、何て声をかけようか。突然トンカチ持った女が話しかけてきたら怖いよ

な。

「怪しい者じゃありません」とか？ いや、逆に怪しいよな。

よし、ここは無難に「こんにちは」で行こう。

今一度刑事さんに向き合う。刑事さんも僕に気づいたようで、視線が合った。

「久しぶりじゃねえか」

刑事さんの声を聞いた瞬間、ゾクリとした何かが自分の首筋を撫でていった。

思わず一歩足を引いてしまう。

その瞬間、刑事さんの体が目を見張る程の速度で跳ねた。

4 m程の高さまで飛び上がり、空中で脚を大きく振り上げる。

人間ではあり得ない身体能力に思わず目を見張るが、ギロチンのように僕に迫ってくる脚にハッと我に帰る。

「そう、りやあつ!!」

「うわわあつ……!!」

刑事さんの踵落としが、僕が立っていた場所にめり込む。着弾した所を中心に、コンクリートの屋根にヒビが走っていった。

「てめえつ、何すんだよ……!?!」

「こいつ、人間か!?!」

匡が困惑の声を発し、あいどう哀悼くんがステッキを振るう。

迫り来る光刃の群れを刑事さんは顔色一つ変えずに錫杖で叩き落とす。

哀悼あいとうくんは再度追撃をしようとするが、そんな彼の背後にスーツ姿の女性が迫っていた。

「あいと……!!」

僕が喉から声を張り上げるより早く、女性の刀が哀悼あいとうくんの右手を切り飛ばした。

ステッキを握った腕が月明かりに照らされながら落下していく。

怒りで頭が真っ白になるが、怒声を放つより先に僕の頬を衝撃が襲う。

刑事さん、いや、刑事の男にぶん殴られたのだ。

思わず地面に倒れ伏しそうになる体を気合いで押し留め、全力でカウンターを繰り出す。

「こんつのおっ!!」

「ちいっ」

刑事の男は滑らかな動きで僕の殴打を避ける。しかし僕の方がスピードは上らしく、刑事の男の耳を僕のトンカチが掠めた。

勢いそのままに二撃目を繰り出そうとした所で、僕の視界が上下反転した。

足払いだ。コンクリートの壁を破壊する程の力で僕の足首を蹴り飛ばし、僕をひっくり返したのだ。

「ふ、んっ!!」

「があっ」

空中で無防備な姿勢を晒した僕は刑事の男にぶん投げられる。

頭から地面に叩きつけられ思わず声が漏れた。

あまりの衝撃に倒れ込む僕に刑事の男は馬乗りになり、僕の胸ぐらを掴み上げる。

思わず息が出来なくなる。

僕を見下ろす刑事の男はあんまりに冷たい目をしていた。

きつと、殺意というのはこういう物を指すのだろう。

そう思うくらいに真っ暗で、黒曜石みたいな目だった。

僕が何をしたんだよ。

お前は何なんだよ。

言葉にしたいが声にならない。

喉が凍りついたように動かない。

そんな僕に、刑事の男は口を開く。

「久しぶりだな? さえずり 噂 アケミ!!」

あ?

こいつ、い まなん
て 言っ た？

▽
▽
▽

「哀悼ううーっつっつ!!」

目の前で切り飛ばされた人形のような腕を見て、思わず絶叫が喉から漏れた。
思わず落下する腕に手を伸ばす。

「相葉っ！ 俺に構うな！ 腕は生えてくる!!」

「でっ、でもっ」

「島咲より俺の方が強い!! 俺より島咲の所に行ってやれっ!!」

その声を聞いて、俺は哀悼に背を向けた。

島咲に馬乗りになっっている眼帯の男に銃口を向け、引き金に指をかける。

「久しぶりだな？ 嘖 アケミ!!」

な、何を言っているんだアイツ？

島咲を誰かと勘違いしているのか？

……眼帯の男も、島咲の反応を見て動きを止めた。

島咲はその隙をついて眼帯の男を腕力だけで強引に投げ飛ばす。眼帯の男は宙で一回転し地面に難なく着地した。

「……鏝やじり。コイツらなんかおかしいな」

「ええ。噂さえずりの手下にしては、些か……」

眼帯の男の疑問に、黒服の女が答える。

……敵じゃ、ないのか？ いや、まだ分からない。

俺は銃口を二人に向ける。

「一体、お前ら何なんだ……!」

思わず疑問を投げかける。警戒は止めず、いつでも頭を打ち抜けるようにしながら。

額から思わず汗が流れる。人を、自分が撃つかもしれない事に。震える銃口を根性で止める。

眼帯の男がゆっくりと唇を動かそうと、して。

強烈な破壊音が、左後ろから轟いた。

「あ?! 何——」

後ろを振り向こうとした俺の背に、何かが突き刺さった。

それは凄まじい勢いで俺の腹をぶち抜き、足元に音を立てながら転がった。

「なん、だこれ。——将棋の、駒?」

腹を押さえながら後ろを振り向く。

俺たちから15m程離れたそこに、ソイツはいた。

ゆつたりとした踊り子のような紺色のドレスを見につけ、口元を覆い隠すように布を着けている。

最も目を引くのは、彼女の肩の付け根から生えた、三対六本の腕。

黒服の女とは違い首筋には鍵型のアザが付いており、間違いなく魔法少女だ。

多腕の女はゆつくりと体をのけ反らせる。

「……………ああああああつっ!!! どいつもコイツも舐め腐りやがつて!!!」
爆発。

尋常じゃない絶叫と共に、六つの腕から何十もの将棋の駒を投擲してくる。

ただの将棋の駒じゃない。

一発一発が変身した俺の体を貫通する程の超高速攻撃だ。俺の弾丸より速いんじゃないか。

「ちくしょう!! ちくしょう!!! ちくしょう!!!」

「何だアイツ…………!!!」

「グッ……………」

多腕の女は癩癩を起こしながら四方八方に攻撃を撒き散らしている。黒服の二人に

も俺たちにもお構いなしだ。

周りの家屋や電柱が倒壊し、爆弾でも破裂したかのように崩れていく。俺たちの体も例外じゃない。俺や哀悼あいとうの体にも穴が空いていく。

「次から次に……!」

黒服の女が九字を切る。

するとまるで透明な傘でもあるかのように将棋の弾幕が女に当たる前に逸れ始める。明らかに物理法則を無視した、理外の技だ。

「ぐああつ……!!」

「……つ、敏弘!!」

黒服の女の技に驚いていると、敏弘としひろの悲鳴が聞こえてきた。

見れば敏弘としひろは両足に穴が空いている。右足は今にも千切れそうだ。将棋の弾幕に撃ち抜かれたらしい。

俺は急いで倒れ伏した敏弘を抱える。今すぐこの場所から離れなければ。

なるべく将棋の弾幕に晒されていない家屋を選び、ガラスを蹴破つて中に押し入る。リビングに置いてあった椅子に敏弘としひろを座らせる。

「だつ大丈夫かつ敏弘としひろつ……!」

「け、結構キツイ……」

返事は返ってくる。目はどこか虚だが、致命的なダメージは負っていないと思いたい。

「な、何で再生しないんだ？ 前お前の腕がもげた時は、すぐに新しいのが生えてきたのに……」

「あー……。多分、こま、駒が、刺さったままで……。それが、邪魔なんだと思う。ずっと足の中に、異物感がある……」

息も絶え絶えで声を漏らす敏弘^{としひろ}。

逡巡は一瞬だった。

俺はしやがみ込んで、ゆっくりゆっくり再生していく敏弘^{としひろ}の右足の傷口に視線を合わせる。

「……取れば、いいか？」

「あー、頼む……」

息を吸い込む。

俺は意を決して、敏弘^{としひろ}の右足の傷口を指でこじ開けた。

「ううあつ……!!？」

「……………つつ!!」

ぐちよぐちよと、柔らかい物が指先に絡みついてくる。気持ちが悪い。

聞こえてきた敏弘としひろの悲鳴に思わず指を引つ込めそうになる。

敏弘の右足の断面には、赤い血肉ではなく青白い光が広がっていた。

その断面の中に不自然に盛り上がった場所がある。俺はそこに、二本の指を突っ込んだ。

冷たいネギトロみたいな感触だ。そこを俺は指でほじくる。

しばらくの後、指先に硬い感触を捉えた。

俺はそれを指で摘み上げ、素早く引き抜く。「と」と書かれた将棋の駒が青色の肉の中から出てきた。

「あああああつ!!!」

「悪いっゆっくりやった方が良かったか?!

「……いや、素早くやってくれた方がいい。ただ、次引き抜く時は声かけてな」

「分かった。……気遣えずに悪かった」

話している内に、右足は凄まじい速度で再生していく。

まるで動画を巻き戻しているみたいに瞬く間に肉がくつつつき、数秒もしない内に傷跡一つない足が現れた。

……よかった。綺麗にくつついた。駒さえ引き抜けば大丈夫らしい。

「左足も、いくぞ」

「了解……。早めにしてくれよ……」

今度は左足に指を突っ込んでいく。

左足は中途半端に再生しているらしく、どこに駒が埋まっているか分かりづらい。

俺はゆっくり、慎重に指をつき入れる。

「……なあ、ただし 匡……」

「あ？　なんだよ、今集中してるんだけど……」

「いいじゃんか、痛みを誤魔化したいんだよ」

そう言われては反論できない。

俺は指を動かしながら、としひろ 敏弘の言葉に耳を傾ける。

「……さえすり 噂 アケミって、誰だろうな」

「そんな事言われたって分かんねえよ……。一番そいつに近そうなのは、今んところ

お前だぞ」

「……本当に、知らないんだ。知らない筈なんだ……」

鎮痛な面持ちで声を漏らすとしひろ 敏弘。

知らないってんなら、黒服の二人が勘違いしてるって風にしか考えられないんだが

……。

……。

俺達が変身した時のこの姿って、性癖を反映してるんだよな。

俺は何となく思った事を口に出す。

「あー、一つ仮説を思いついた。お前、一目惚れしたんじゃないか?」

「は?」

「いやさ、俺達の姿って、性癖が反映されてるんだろたぶん。で、俺も哀悼あいとうも、モデルが居るじゃねえか」

俺はお気に入りあいにのAV女優の姿に。

哀悼あいとうは大好きなアニメの主人公に。

だったら、お前のその姿にもモデルが居たっておかしくない筈だ。

「街中でお前がその、アケミって女に一目惚れしたとしたらどうだよ。その記憶事態は忘れてたけど、記憶の脳味噌に好みの女のモデルケースとして焼きついた……。とかどうだ? 一応筋は通って……」

「聞こえる」

「は?」

「カエルの、声が、聞こえる」

「……………は? ……なに言ってるんだよ」

今のこの街は無人大。

人っ子一人、生き物一匹もいやしない。俺達以外は。

そもそも今は外からあの多腕の女が暴れ回ってる音が響いてるし、カエルが鳴いてたとしても破壊音でかき消されそうなもんだ。

「きこえる、んだ。たしかに、たしかに、おとが」

「……おい、おい？ 敏弘!?!」

敏弘としひろの顔が、土気色に変わっていく。

思わず肩を揺する。しかし反応がない。

もつと肩を揺すろうとした瞬間。

「手錠はなんのためにある?」

「何っ、があっ?!」

聞き慣れない女の声。

それが聞こえると共に俺は凄まじい力で腕を引っ張られ、床に倒れ伏した。

手首を見れば、そこには手錠が。

手錠の先には、一人の婦警がいた。

常識的な婦警じゃない。スカートの丈は腰までしかないし、上着もへそがもろだし。

その上顔は特上の美人。体つきも扇状的だ。バストはどう見積もっても100以上

ある。

明らかに二次元の世界にしか存在しちやいけない、どスケベ警官である。

首筋には鍵型のアザが光っている。魔法少女で確定だ。

「逃がさないためにあるんじゃないやあない！ 屈服させるためにあるツ！ ……お前は果たして、私を屈服させられるかな？ ご主人様（仮） ……」

「マジで何言ってるんだよお前 ……！」

婦警が腕を引けば、俺は凄まじい力で引つ張られ民家の壁に叩きつけられる。

俺の体は壁を貫通し、外に叩き出される。全身がバラバラになったみたい痛む。

「うっぐ ……!! な、めてんじゃあねえーっつっ!!」

ライフルの銃口を手に持ち、手錠の鎖を目印に婦警に殴りかかる。この距離じゃ狙撃なんか無理だ。

婦警は俺に鼻っ面を殴り飛ばされ、呻きながらたたたらを踏む。

俺は追撃をしようと腕に力を込め、

「ぶっぶっ ……!!?」

「良いぞご主人様（仮） ……!! 私をもっと楽しませろ!!」

婦警に先程の意図返しのように鼻っ面を木製バットで殴り返された。

「こんんのおっ ……!!」

「はは!! いいぞ!! お前の全てをぶつけてこい!!」

俺と婦警は超近距離で殴り合う。

バットとライフルが何度もカチ合い、相手の意識を刈り取らんとうねりを上げる。

「ぐ、おおおおっ……！」

こ、コイツ!! 一撃一撃が尋常じゃなく重い!!

信じられねえ握力だ。殴られるたびにカエル鬼の水弾くらいの衝撃が体を襲う。

しかもコイツ、全然俺の攻撃を回避しねえ。全部の攻撃を頭で受け止めやがる。

スピードも威力も向こうが上。回避行動をしない分手数も上だ。

常識外の威力でぶん殴られ続けて、だんだん俺が押し負け始める。

「こ、こんのおっ……!! マゾ野郎が……!!」

「大正解だぜ、ご主人様（仮）」

体重を乗せられた一撃を鳩尾に見舞われ、俺はたまらず倒れ込む。

手足が動かない。全身が痛い。頭が割れそうだ。

右手に感じた圧迫感が無くなる。婦警が俺の手から手錠を外したのだ。

「じゃあな、ご主人様（落第）。お前は俺を満足させられないみたいだ」

そう言つて婦警は、俺を放つて部屋の奥に向かう。

そこには地面に倒れ伏す、敏弘としひろの姿が。

「お、おい!! 敏弘としひろっ!! そっち行ったぞ!!」

「……………声、声が……………」

「敏弘!! おい敏弘!! 立て、傷はもう治ってんだろ!」

「カエル……………うるさい、うるさい……………」

「おい!! 聞いてんのか、おい!!」

ダメだ。

敏弘は俺の声なんか聞こえちやいないみたいで、ぶつぶつ言いながらうつ伏せになつて動かない。

婦警はそんな敏弘の腕に手錠をかけ、腕を掴んで引きずっていく。そのまま窓ガラスを蹴つ飛ばして、外に出て行つた。

「ああ……………?!」

魔法少女による、魔法少女の誘拐。

今日は全くもって意味の分からない事ばかりだ。

心の中でそう愚痴りながら、這いずって外に出る。

見れば婦警は敏弘を引きずったまま夜の闇に消えていく。

それを止めようと哀悼が疾走するが、その行手は多腕の女の精密な攻撃によつて阻まれる。

「くそ……………!! 退け!!」

「黙れ!! 黙れ!! 黙れ!!!」

濡れ羽色の影と多腕の女が正面かが轟音と共にぶつかり合う。

哀悼^{あいとう}が星形の光刃を飛ばすたび、将棋の弾幕がそれを撃ち落とす。

「つ……………！ 俺の姿を見ろ!! 希望たり得る俺の姿を見ろ!!」

「俺の腕を讃えろ!! 無双たる俺の腕を讃えろ!!」

二人の足元から、同時に亀裂が走った。

それは地面に、家屋に、空間に。無尽蔵に走り回り、辺りを侵食し合う。

哀悼^{あいとう}の足元からはリボンが。多腕の女の足元からは雷鳴と共に紫電が溢れ出る。

「おおおおおおおおおっ!!!」

「あああああああああっ!!!」

リボンの津波を空に落ちる落雷が焼き尽くしていく。

焼き尽くした残骸を物ともせず、無数のリボンが雷を食い破っていく。

展開された二つの世界は、押し合い食らい合いお互いを侵食し始める。あまりのエネ

ルギーのぶつかり合いに空間が悲鳴を上げた。

「おーおー、大変な事になってら……………。おい、姉ちゃん！ とりあえず話通じそうだから

アンタの方を助けるぞ！」

「えっ?」

世界の終わりの様な光景に、似つかわしくない軽い声の一つ。

横を見れば、眼帯の男が俺を見下ろしていた。その隣には黒服の女もいる。

「思ったより大変な事になってますね……。全く、生きて帰れるんでしょうか」

「ごごご言つてないでいくぞ、オラ！」

黒服の二人は深呼吸を一つ。次の瞬間、風のように走り出した。

「ああああっ……？ ……勝負の、邪魔するなあああっ!!!」

多腕の女は迫り来る人影に気付いたのか、紫電を二人の方に投げる。

先行する黒服の男は焦りもせず、回避行動もせず。

ただその場で九字を切り、一言唱えた。

「祓へ給え 清め給え」

瞬間。紫電が曲がった。

まるで空間が歪んだかのようにも、雷が自分から男を避けた様にも見えた。

先程も黒服の女が使っていた、道理の外の技だ。

多腕の女もまさか雷の軌道が曲がるとは予想外だったらしく、一瞬意識が止まる。

その一瞬が致命的だった。

眼帯の男の背から、紫電に負けない速度で黒服の女が飛び出した。

まさに電光石火。うねる雷の嵐を掻い潜り、一息で多腕の女の懐に潜り込み一閃。

紫電が収まり、地面に走ったひび割れが消えていく。それで決着がついた事が俺にも分かった。

袈裟斬りにされた多腕の女は胴体を斜めに切断され、啞然とした表情でその場に崩れ落ちる。

「ふいー、怖かったー」

「うい、お疲れ」

黒服の女のぼやきに眼帯の男が答える。

……人の形をしたものを切って置いて、この気の抜けよう。

それは、どこか俺達とは別の世界で生きている事を感じさせられた。

無意識に手に力が籠る。

婦警にボコボコにされた体は、既に癒えてきた。いざという時は抵抗出来る筈だ。

そんな俺を見て、眼帯の男が口を開く。

「そんなに怖い顔色すんなよ姉ちゃん。俺らはここで何が起こってるか知りたいだけなんだ」

「……そりやありがたいね。俺達も意味不明な事ばかりで困惑してるんだ。とりあえず自己紹介して貰えるか？」

「俺は柊 邦夫。こっちのガキは鋏 静。簡単にいやあ警察だな」

「誰がガキだ殺すぞ不細工」

鍔やじりというらしい女性が、 柗ひいらぎと名乗った男の脛を思いつき蹴った。

柗ひいらぎは「痛つ……!!」と声をあげて鍔やじりを睨みつける。

俺は慌てて今にも喧嘩をし始めそうな二人に声をかける。

「お、おい！ 今警察って言ったか!?!」

「おう、そうだよ。警察手帳見るか？ 俺らは「公安所属霊的兵器」。この街で起こっている行方不明事件の調査、及びこの事件に黒幕と思われる魔術師、囀さえずりアケミの討伐に来た」

そう言つて柗ひいらぎは、歯を見せて笑った。

胎動

「あ!? ……………お前ら男子高校生なの!?!」

思わず声が漏れた。

……………この街に、行方不明者事件を調査しにきて数日。

ようやく街に張られていた結界の中に入れたと思っただら頭の痛くなる事ばかり起る。

目の前の、フリフリした……………ゴスロリというんだったか。全身真っ黒な、人形みたいな少女に状況を説明させて数分。

「男から女に」「性癖の姿に」「一度殺されてる」……………。

全くもって、聞きたくない情報が出るわ出るわ。

「柎ひいらぎ。つまりこの子達、全員神性を付与されて……………」

「ああ、それも格が尋常じゃねえ。もう半神と同レベルだ」

眼帯の下の俺のくり抜かれた筈の目玉が、ゆらゆらと揺れるコイツらの魂を捉えてい

る。
どいつもこいつも尋常じゃねえ。特にさつきやしり鍬が斬り飛ばした多腕の女が一番魂の

格が高い。こりやしばらくすれば復活するな。殺し切れん。

まあ話を聞く限り、あの多腕の女もこの空間の被害者らしい。そう考えるといくら本気で殴っても死なないってのはありがたい。

「……………どういう意味だ、分かるように話せよ」

「あー、……………簡潔に言えば、お前らはなんかの生贄にされそうになってんだよ」

性別を転換させる魔術は、魂の格を上げて生贄の質を上げる方法としてメジャーだ。

男女二つの性を持つという事は、アルダナーリーシュヴァラ、オメテオトルといった神に代表されるように、正反対の属性を兼ね備える完全な存在……………。「神」として魔術世界では定義される。

こいつらが一度殺されたっていうのも、正反対の属性を兼ね備えさせ神性の格を上げる為だろうな。

昼は男で夜は女。死んでいるのに生きていて、現実を生きていながら理想の姿である……………って所か。

そもそも現実を理想で上書きするってのは神性保有者の特権だ。

こいつらの肉体が傷ついても元に戻るってのも上書きの一部だろう。こいつらは自分で自分の肉体を「理想の異性」に上書きし続けているんだ。

「……………行方不明になってた奴は、全員男。って事は、連中の目的は男の属性を兼ね備え

た女？」

「おそらくだが、何かの苗床にする気だろうか」

バニーガールの女の疑問に答える。

イザナミ神は子宮からはもちろん、自分の血から、尿から、吐瀉物からさえ神を産んだ。

ハイヌウエレ神は自分の尻から宝物を排出し、その死体からは食糧が生じた。

女神はあらゆる方法で、あらゆる物を生み出す。

食物も、宝も、概念も、神だって。肉の一欠片だって使い道がある。

俺の話を聞いてバニーガールの女がサツと顔を青ざめさせた。

「じ、じゃあ敏弘としひろは、これから……!?!」

「………どうだろうな。さつきも言ったが、その島咲しまぎきって男には何かがある。わざわざ

ざそいつだけを攫さらったって所からもそれは確かだ」

先程見た女の顔は間違いなく噂ささずりだった。

数年前、大規模な失踪事件を調査していた際に一度見たつきりだが……。アイツの顔を間違える訳は無え。

「………噂ささずりアケミって女はな、日本の癌がんって二つ名がつくくらい物騒な魔術師なんだ

よ。もう何百年も……。江戸時代から、人を攫さらっては人体実験をしてる。………場合に

よつては、さえすり 噂が島咲しまさきつて人間を騙つてたつて事も考えられる」

「……そんな事」

「無いって言い切れるのか?」

「無い。アイツは人を傷つけられるような人間じゃない」

俺の言葉を、真つ黒な少女が真つ向から切つて捨てる。

澄んだ宝石みたいな目は、俺を正面から見据えて目を逸らさない。

ちよつと若いが育てばいい女になるな、こいつ。……ああ、男なんだっけか。もったいない。

「……よくよく考えれば、さえすり 噂が今も昔と同じ顔をしているとは限りません。自分は整形をして、自分とは全く関係のない少女を影武者にしている……という事も考えられます」

やしり 鍬がバニーガールの女を励ますように口を開く。おお、バカのくせに今日は比較的頭回つてんじゃねえか。

……まあ、その可能性は低いかな。

本当にさえすり 噂が無関係な男子高校生を自分の影武者にしてたつてんなら、俺らが偽さえすり 噂に注意を引きつけられてられてる間にもつとちやんと殺しに来た筈だ。

これは推測だが、多腕の女と露出狂婦警は島咲しまさきつてガキを捕まえに来たんじゃねえ

かって思う。動き方から考えて、その方が自然だ。自分とそっくりな容姿をした、得体の知れない不安要素を捉えにきた使いっ走りって感じか？

「……………あの婦警のコスプレをしていた女には、俺の式神をくつつけてある。俺らは今から、あの女を追跡しなきゃいけない。俺個人としては、お前らにや今すぐにも家に帰って宿題してて欲しいんだが……………」

バニーガールの女は握ったライフルを胸に掲げ、真つ黒な少女は静かに息を吐き出す。

……………そうだよなあ。コイツら無鉄砲な高校生のガキだもんなあ。しかも戦えるだけの力持ってるし。

目の前でダチ攫われてじつとしてられる訳ねえよなあ……………。

「……………俺達はこの夜を何回も乗り越えてきました。戦いの心構えは出来ています」

「俺らは未成年のガキを戦わせる心構えが出来てねえんだよ……………」

いやまあ俺らはその未成年のガキに思いつきり殴りかかったワケだが。本当にごめんな。

真つ黒な少女に闘志たつぷりな宣言をされて、思わずため息が出る。

……………どーすつかなあ。このままじゃ無理矢理ついてくるだろうし。

これから日本最悪の魔術師と戦うつてのに、半神を二体も相手してらんねえよ。

どうくしくしよっかなあ。

「……一応言っておくが、マジで命の保障はできねえぞ。死んでも責任取れねえからな」

「大丈夫だ」

「そのくらい、覚悟している」

「……^{やじり}鋏、コイツらのお守り頼めるか?」

「はあ、この状況じゃ仕方ないですね。いいですか二人とも。基本的に私の後ろを離れない事、それさえ守ってくればついてきてもいいですよ。……いざって時は、頼らせてもらいます」

^{やじり}鋏の言葉に、ガキどもは顔色を明るくする。

「……もしもの時は、すまねえ。俺はお前らを見捨てるだろう。」

内心に生まれた罪悪感をおくびにも出さず、俺は声をかける。

「……。式神が地面に潜った。地下鉄……にしては広いな。地下街か? ともなく、そこが敵の本拠地だ。ガキども、案内頼むぜ」

▷▷▷

「お集まりの皆様。……そもそも、我々の業界魔術世界における神の定義とは何か……ご存知でしょうか？」

無人の地下街に滔々と、女の声が響く。

まるでセールのようになみなく話される言葉をかけられたのは、強面の男達だ。

十五人程の男達は、見るものが見れば全身に途方もない金額の品を身に纏っている事が窺えただろう。

数千万もするスーツやネックレス、腕時計。服に着られず、堂々とそれらを着こなす男達は当然それに見合った立場についている。

暴力団の組長、マフィアの党首、後ろ暗い者とも関わりの深い国会議員。

ここにいるのは、所謂裏社会の人間達だった。それも特上の、浴びるように金と血を貪り、地獄行きが決まりきっているような。

彼らはさえずり噂のスポンサーだった。彼らの存在があるから、さえずり噂は街一つを対象とした強力な結界を張ることが出来たのだ。

男達の中でも一際若そうな男が声を上げた。

「ふむ……。信仰されている事、などですか？」

「それも一つの見方ではありますが、違います。……神とは、現実を塗り替える能力を持つ者を指します」

自身たつぷりに、女——さえすり 噂 アケミは、そう告げた。

「自分の内面世界を現実に出だし、世界を思う通りに上書きする超越者。なんでも出来る……という訳では有りませんが、おおよそ万能に限りなく近い存在です。二百年以上をかけた私の研究は、神の肉体こそが我らの願い……不老不死への道だと指し示しました」

不老不死。

チープで、有り溢れていて、もはや耳にタコが出来る程に聞き慣れた悪役の願望。

しかしさえすり 噂 アケミはそれを必死に追い求めていた。その為に全てを捧げてきた。

「神への変転。太古から魔術世界では研究されてきた物事であり、自らの魂に神性を施す方法は数多くあります。先程鎌山かまやま様が言われたように、大勢から信仰を集める事も一つの方法ですね。他にも自らを性転換させる、神話の再現を行う……。しかしこれらは不老不死には程遠い。魂が強くなるうとも、それに相応しい肉体を得なければ永遠には届きはしない。……私の編み出した方法は簡単に言えば、人の肉体を神の肉体に変転させる技術です」

さえすり 噂は誇るように、自らの偉業を謳う。

しかしその技術を編み出す為にどれほどの血を流したか、一般人であれば顔を顰めざるを得ないだろう。

「まず、男子高校生を私の結界へと取り込みます。そうして式神で命を刈り取り、私の編み出した術式を埋め込む。埋め込まれた男子高校生は、高い神格を持った女神として生まれ変わります」

さえずり
囀の言葉と共に、一人の少女が前に出た。

見事な金髪に、アメジストのような青い瞳。年齢は高校生程だろうか。

顔つきに不相応な大きな胸を星条旗ビキニで覆っており、彼女が歩くたびに豊かな果実が肉感的に揺れる。男達から下品な声が飛んだ。

下半身にはダメージジーンズを履いており、健康的な足が見え隠れしている。

「彼ら……いえ、彼女らと言った方が正確でしょうか。彼女らは、自分の内面世界を現実に出力する力を得ます。……しかし、精神の力で物理的な事象に影響を与えられるという事は物理的な事象で精神に影響を与えられるという事。このように、式神を用いて安全かつ簡単に洗脳する事が出来ます。男子高校生を対象にしたのはここにあります。思春期の揺れ動く心は繊細で壊しやすく、攻撃的だ。弄り方によつては戦神として兵器としても転用出来る」

閑話休題、と囀は一呼吸を置く。

「彼女らに、我らの肉体を産んで貰います」

おおおつ、とどよめきが男達に広がった。

「彼女らの精神を弄り、神を産むことに特化させる。女神のリソースをふんだんに使い、特上の神の肉体を産んで貰う。これが私の編み出した不老不死の技術、二百年の集大成。私はこれを、転生ならぬ「錬生」と呼んでいます」

「おお………!! ついに、ついに………!!」

「やったぞ!! もう、死に怯えなくとも良いのだ!!」

歓声が無人の地下街に走った。

それもその筈、ここに集っているのは誰も彼もが不死を求める俗物達。

その為に人の情もまともな肉体も捨てた魔人ども。外見からは想像出来ないが、平均年齢は百五十を超えるだろうか。彼らが死に怯えた夜は千を越えるだろう。

そんな彼らの歓声に水を差すように、下駄の音が鳴り響いた。

そんな彼らに顔を向ける。そこにいたのは一人の老人だった。
さえずり

顔に刻まれたシワは深く、年齢は七十歳だろう。背筋はピンと伸びていて老いを感じさせない。

深緑のコートとチェック柄のズボンには似つかわしくない、一本の刀を腰に佩いている。

「どうした、じじい?」

「良い知らせが一つ。先程使いに出した神ローカバール兵が、目的の物を持ってきました」

老人が指を後ろにやる。

そこには大胆な改造制服を身に纏った婦警が、一人の女を引きずっている。

その女は、^{さえすり}囀と瓜二つの顔をしていた。

「……報告が上がっていた不穩分子か」

「はい。それと悪い方向が。使いに出した神兵^{ローカバレー}は二人。一人帰ってきません。それに、帰ってきた一人はこんな物をくつつけて帰ってきました」

老人が手を差し出す。

その手のひらには、小さな小さな鳥が握られていた。

鳥の胸には穴が開き、そこから真っ赤な紙吹雪が溢れ出ている。

「式神……雁もどきか。公安だな？」

「ええ。おそらく、^{ひいらぎ}柊が来ています」

チツと^{さえすり}囀は舌打ちし、先程まで計画を説明していた男達へと振り返る。

「お集まりの皆様、誠にすいません。公安の手先が入り込んできました。一時地下街の奥へ避難を！」

^{さえすり}囀の声に従い男達はゾロゾロと地下街の奥へと避難していく。

いれ違うように二十人程の男達が地下街の奥から現れた。

彼らは男達の財力で雇われた呪い師達。

街を覆う程の結果を張れたのも、毎日のように式神を使い哀れな男子高校生達を追い詰めていたのも彼らの仕事である。

「話は聞いていたな？ こちらの居場所はバレている。仕事だ、守りを固めろ!!」
さえすり 囀さえずりの号令に従い、呪い師達が札を投げる。

札は空中で徐々に人の形に変わっていき、数秒後には筋骨隆々の赤鬼と化した。

赤鬼、青鬼、天狗、大ガマ、巨象……。瞬く間に百鬼夜の軍勢が姿を表し、地下街を目一杯に埋め尽くす。

「ふむ、このお嬢と瓜二つの子供はどうします?」

「……相手が攻めてくるまでまだ時間はあるだろ。どうせ一瞬だ」

懐から真紅の液体が入った小瓶を取り出し、さえすり 囀さえずりは自分と瓜二つの女に近寄る。

この小瓶はネツソスの血と言われる薬であり、理性を溶かす媚薬なのだ。これを相手に盛れば、戦う意志も蕩け落ち自慰に浸るだけの木偶の坊と貸す。特に精神の力を使い戦う半神らにとって致命的だ。

さえすり 囀さえずりは自分と瓜二つの女がぶつぶつと何か呟いている事に気付き、足を止める。

「聞こえる………声が聞こえる………」

「なんだ、何を言っている?」

「さあ。先程からカエルだかなんだか」

「……カエル？」

老人のその言葉を聞き、さえすり 轉の足が止まる。

思い出されるのは過去のトラウマ。命からがら逃げたした屈辱の思い出。二百年に渡って逃げ続けた、魔人の直感が警告を鳴らした。

「……何故、コイツが……。いや、まさか……」

目の前の女の正体に思い至り、さえすり 轉の動きが一瞬止まる。

その瞬間だった。

目の前の女の陰から小さな腕が伸び、ネツソスの血を奪い取る。

そして手は小瓶の蓋を開け、女の口に中身を流し込んだ。

▷▷▷

自分が溶けていく。

心が溶けている。

……僕ってなんだっけ。

なんなんだっけ。

「がまんしないでいいんだよ」「しなくていいんだぞ」

「力はある」「僕らが与える」

声。

声が聞こえる。

沢山の、子供みたいな高い声が聞こえる。

やりたい事？

やりたい事って、なんだ？

……そう思った瞬間、自分の腹の底から熱い物が込み上げてきた。

ああ、これは炎だ。

自分が大事にしていた物が、全部燃やされていく。

何もかもが燃えて、燃え尽きていく。

もう全部、どうでも良くなってきた。

やりたい事。

やりたい事か。

……ある。

たった一つだけ、ある。

したい。

したい。

したい。

エツチな事が、したい!!

▷▷▷

「あははははあつつははつつ!!」

目の前の女が笑い声を上げたのを見て、さえずり 嘖は顔を青ざめさせた。

突如溢れ出した死の気配に、さえずり 嘖の心臓が早鐘を打ち始める。

げろげろげろ。

途方もない熱気と、カエルの声が女の肉体から溢れ出して地下街を満たしていく。

「くそつ、しまぎき 島咲……………!! あのガキが、なんでここに!」

さえずり 嘖は自分の失態に下唇を噛むが、最早全ては遅かった。

しまぎき 島咲は自らの足で立ち上がり、笑いながらさえずり 嘖を見つめていた。

「……………本当に、アケミ姉さんだ」

そう呟いた瞬間、しまぎき 島咲の肉体が炎に包まれた。情欲の炎だ。しまぎき 島咲の心で燃え上がった

炎が現実に影響し、体を発火させているのだ。

炎は煌々と燃え上がり、島咲しまぎきの髪に纏わりついていく。

髪留めが燃えつき、ポニーテールがほどける。

炎のように流動し熱を持った長髪を振り乱し、島咲しまぎきは笑い続ける。

「おいっ呪い師共!! 防衛はもういい!! コイツを殺せっつ!!」

顔を青ざめさせながら唾を飛ばす囁ささずりを見て、隣にいた老人は驚きを隠せない。

常に余裕を崩さず、安全な立場から人を痛ぶる女がここまで取り乱すのを初めて見たのだ。

囁ささずりの怒号を受け、百鬼夜行の軍勢がすぐさま島咲しまぎきを取り囲む。

島咲しまぎきはそれでも笑い続けた。島咲しまぎきの視線はただ一人、囁ささずりだけを見つめていた。

「……五年前みたくには行かないぜ、アケミ姉さん。今度こそ、確実に、殺す」
そう呟いた瞬間、島咲しまぎきの陰から無数の腕が這いずり出た。

「邪魔だなあ、コイツら! ヘカトンケイル、食っていいぞ!!」

とある魔術師の失敗

死にたくない。

死にたくない。

死にたくない。

それは渴望だった。狂気だった。怨念だった。

凍えるような冬がいつまでも続いた。山が吠えた。田畑は萎びて枯れて腐った。人が死んだ。父が飢えて死んで、姉も飢えて死んだ。

死にたくない。

死にたくない。

死にたくない。

それは叫びだった。

声にならない絶叫を吐き出しながら、女は自らの姉の遺体にかぶりついた。

天明五年、大飢饉の最中の事であった。

▷▷▷

「何して遊ぼうか？」

今から五年前の事である。

当時小学六年生だった島咲敏弘は、人生の絶頂にいた。少なくとも、本人の認識ではそうであった。

両親がたまたま仕事の予定で夜遅くまで家に帰って来ず、する事もなく一人夕方の公園でブランコを漕いでいた彼に、近所に住むアケミさんが声をかけてきたのだ。

何を隠そう、このアケミさんは敏弘の片思いの相手だった。

大学生らしく、隣のマンションに一人暮らし。優しい目と美しい髪のお姉さんだった。

今日もケーブル編みのセーターに緑のミモレ丈スカートを上手に着こなしていて、敏弘は彼女の顔を直視出来なかった。

よく晴れた日だったが、公園には誰も居なかった。

太陽だけが二人を見下ろしていた。

島咲は顔を真っ赤にしながら、素っ気ない態度をとりながら、何とか「かくれんぼ」の五文字を喉からひり出した。

言った直後に子供っぽいと笑われるかと思ったが、アケミさんは太陽みたいに笑って賛同してくれた。

鬼になった敏弘はクスの木に顔をつけて「もういいかい？」と声をだす。

「もういいよ」という穏やかな声がすぐ真後ろから聞こえてきて、かくれんぼなのに隠れて無いじゃないかと敏弘は後ろを振り向いた。

目に入ってきたのは、トンカチを振りかぶるアケミさんの姿だった。

「えぶあつ」

トンカチで頭をぶん殴られ、敏弘の瞼の裏に火花が散った。

視界がグラグラ揺れ、膝から力が抜けて行く。小学生に耐え切れるダメージではなかった。

冷たい地面にぶつ倒れた敏弘は、ぼーっとする頭でアケミさんを見た。

山本さんは三日月みたいな笑顔で敏弘を見下していた。

これが噂アケミの最近の日常であった。

山本さんは倒れて頭から血を流す敏弘を抱き上げ、腕に札を貼る。

公園には、誰の目も無かった。不自然なくらいに。

迷彩の魔術を展開しながら、噂は自分の家へと帰った。

様々な本で溢れたアパートの一室。アケミは部屋にポツンと置いてある椅子に敏弘としひろを座らせる。

さえすり
嘔 アケミは魔術師である。

江戸時代から不死を追い求め、名を変え体を弄り、死なないというただそれだけの為に何十という月日を研究に費やし何千という人間を魔道に捧げてきた。文字通りの外道であった。

そんな彼女には困った事があつた。

現代では、人を攫うのが難しい。特に幼い子供は。

誰でも携帯を持つ様になってから誘拐はグツと難しくなつた。

数世紀に渡つて人を攫つてきたアケミには「日本の癌」などといった二つ名もつけられていた。一度警察に捕捉されれば致命的だ。

しかし子供を攫うのは辞められない。

二百年の研究は霊格の上昇、つまり人の身から神の身に至る事が不老不死への近道である事を指し示していた。

神へと至る為の研究には、神から人に成りきれていないとされる七歳前後の子供を実験体にするのが丁度良い。しかし、攫うのは難しい。

そうして嘔さえすりが目をつけたのが、西洋の錬金術だった。

轉さえすりは魔術としじろで敏弘の頭部を治療しながら口を開く。

「ほくら、ヘカトンケイル。お友達が増えるかもしれないぞくく」

『あああああ…』『あはあははは仲間だははは』

『しねよくそおんな』『何でこんな事するの?』

『やめてやれよおつ!』『返してお家に返してお家に』

側から見れば虚空に話しかけているようにしか見えないだろう。轉さえすりの話しかけてい

る相手は、轉さえすり自身の中に——精神の中にいるのだから。

ホームクルス。錬金術に記されし人造人間の製造方法を、轉さえすりは学び、独自に練り上げ

た。

簡単に言えば、轉さえすりは攫さえすりった子供達のクローンを実験体に行っているのだ。

子供を攫さえすりえば警察沙汰なら、攫さえすりった子供は直ぐに返してやればいいのだ。少し血や細

胞などの必要な遺伝子情報を採集した後で。

そうして実験を繰り返した轉さえすりだが、今度は「失敗作」の処理に手間取った。

何せ人間なのだ。処分するにも養うにも苦労する。

神の身に至らなかつた不要な存在、しかし捨てるのも勿体ないそれを、アケミは自身を守る式神として再び弄りまわした。溶解させ混ぜ合わせた。

そうして作り出した存在に轉さえすりは「ヘカトンケイル」の名を与えて己の内で飼う事にし

たのだ。

『可哀想だよ』『返せ返せ体を返せ返せ』

『やめろっ！ 今すぐケーサツにジシユしろよっ！』

「わはは、やめな〜い」

ヘカトンケイルに内蔵された人格は、その全員が嘔を恨んでいる。

しかしヘカトンケイルは宿主の命令が無ければ動けない。そういう風にデザインされている。

ヘカトンケイルの言葉を見せしめ、頭部の内外含めた傷を治し終わった嘔は敏弘の体を揺する。

「ねえねえ、起きてよお」

「んあ、……あ!? あれ……? え、さつき、え……」

「アケミお姉さん」の仮面を被り、敏弘に話しかける。

敏弘は困惑した様子で辺りを見渡し困惑する。

「敏弘くん、さつき公園で寝ちやっただよ? だから私の家まで連れてきたの。放つて置けなかったから……」

「え、ここ、え? 山本さんの……」

「そっかよ?」

みるみる顔を赤くしていく敏弘としひろを見て、アケミはニンマリと笑う。この少年をどうやって凌辱してやろうかと、嗤う。

「ねえ、敏弘くんが寝ちやったから、私まだ遊び足りないんだよね。今度は私が何して遊ぶが決めていい？」

「も、もちろんです！」

「良かった！　じゃあさじやあさ、怪獣ごっことかどうかな？」

「いいと思います！」

その言葉を聞くが早い、アケミは柵の中からヒキガエルの入ったケージを取り出した。

「はい、これが怪獣ね！　敏弘くんはヒーロー役！」

「へ？　ど、どういう……」

「それはねくく、こういう、こつっ♪」

アケミが指を下に振る。

それと同時に超常の力によって敏弘としひろの体がどんどんと縮んでいく。

驚愕に目を開かせる敏弘としひろは、瞬く間に5cm程の大きさになってしまう。

これは貼られた呪符の効果だった。アケミによって編み出された、他人を凌辱する為の魔術だった。

「…………え。な、なに、なにこれ……………」

「うつわあ敏弘くん、米粒みた〜い!」

笑いながらアケミは敏弘をピンセットで摘み上げる。

今の敏弘にとつて迫ってくるピンセットは竜の顎のようであったが、アケミの「潰しちやいそうだから動かないで」と言う言葉に反射的に身を硬くする。

敏弘はそのままピンセットで摘み上げられ、ケージの中に放り込まれてしまう。

一般的なサイズの、今の敏弘にとつては怪物のような大きさのヒキガエルがギョロリと巣穴に入ってきた者を見定める。すみかに入ってきた物がエサか、それ以外か。

敏弘の肌が総毛立った。

「ほら、頑張れヒーロー!」

「が、頑張れって言ったって……………」

「大丈夫だよ! ポツケにカッターナイフ入れといたから!」

そう言われて尻ポケットに手を入れれば、出てきたのは大ぶりのカッターナイフ。その短い刃渡りは怪物に挑むにはあまりに心もとない。

「こんなので、こんなのでどうやって戦えば……………」

「そんな事言ってる場合? 向こうはやる気だよ?」

ヒキガエルは敏弘を餌として認めた様だった。

敏弘としひろが気づいた時には既に、ピンクのペロが彼の足に絡みついていた。

「だからほら……頑張つて♡」

ケージの中は酷い有様であった。

カエルの死体と、その死体から飛び出た臓物が異臭を放っている。

その臓物の上には小さな敏弘としひろが転がっていた。

敏弘としひろはカエルに丸呑みにされ、胃酸で溶かされながらカエルの腹を切り裂き脱出したのだ。

酷い戦いだった。

カエルの腹の中からは胃酸で溶かされる敏弘としひろの絶叫がケージいっぱい響き続け、それを聞いた嘔さえずりは札を通して溶解していく敏弘としひろの体を魔術で回復させていく。

敏弘としひろは消化されて死ぬ事も出来ず、生きる為にカッターナイフで胃袋を掘り進んだ。それは嘔さえずりの日々の愉しみだった。

己より矮小で命のない者を見て嗤う。自分が安全な位置にいる事を自覚する。

わざわざヘカトンケイルを喋れるようにデザインしたのもその為だ。

他人からの怨嗟の言葉は嘔さえずりの心を満たした。嘔さえずりの記憶の奥底にある長すぎる冬を忘れさせた。

惨状に満足した囀さえすりはケージの中で小刻みに痙攣する敏弘としひろを摘み上げ、机の上で元のサイズに戻す。

そして頭部を掴みゆつくりと呪文を唱え出した。

「はれえくりしなはれえくりしな……」

ゆつくりと指の先から、敏弘としひろの脳の先まで線を繋いでいくような感覚が囀さえすりの体に通った。

囀さえすりの体に、敏弘としひろの心が入り込んでくる。それと同時に、敏弘としひろの心の中に囀さえすりが入り込んでいく。

これは精神を乗っ取る呪法であった。

男ホームンクスのクローン人間を作る為には、相手の精液がある。

相手がまだ精通を迎えていないであろう幼い年である為に、その精神と肉体を支配し強制的に搾精する。相手に自分の精神を乗っ取られるリスクもある危険な術だったのだ、術を使う前に相手を甚振り精神を疲弊させる必要があった。

囀さえすりはこの瞬間が好きだった。相手と心が繋がり、苦痛と怯えの感情を余す所なく味わえるこの瞬間が好きで堪らない。

……だからこそ。

「……………」

伝わってきた快樂の感情を受け止めきれなかった。

少年は、胃袋で溶かされながら笑っていた。

少年は、意中の相手に蹂躪される感覚を心底楽しんでいた。

少年は、カエルと殺し合う事を甘露でも舐めるように味わっていた。

一瞬、アケミの思考が止まる。

アケミは生きる事だけを考えて外道に堕ちた女だった。アケミにとって、死は忌避する物以外の何物でも無かった。

だからこそ、さえすり 嘔しまさきは島咲の考えが理解出来なかった。理解したくなかった。

故に、相手と自分の精神が繋がっている状態で思考を止めるといふ致命的な隙を晒してしまった。

「……………つつ?!」

(こ、このガキ……………!! 私の中に入って、来やがる……………!!)

幼いながら、それは確かに殺意の発芽だった。

生まれて初めての感覚に身を任せ、敏弘としひろは明確に攻撃の意思を持って嘔さえすりの精神を侵食

し返した。

それはひよつとすれば善意だったのかもしれない。

自分を気持懸ちよくしててくれたのだから、彼女をお返しに気持殺ちよくしてやろう。

純粋な殺意だった。悪意も敵意も無く、ただ相手を殺す事だけを考えて実行する生き物がそこにはいた。

「う、おああああああああっっ!!?」

自分の思考が侵されて犯されて冒されていく事に耐えられず、さえずり 嘯は絶叫を上げながら必死で精神の接続を切った。

ブツリという鈍い痛みが走り、さえずり 嘯と島咲は同時に倒れ込む。

(はあーっ、はあーっっ………。せ、精神世界を半分以上持つていかれた!! あ、後少しで廃人になる所だった!!)

自分の精神世界を半分以上侵食され、ボロボロと涙を流しながらさえずり 嘯は震える。彼女は恐怖と嫌悪感と吐き気に苛まれ視界が揺れる。精神世界を攻撃された弊害により、感情のコントロールが出来なくなっていたのだ。

しばらく嗚咽を漏らしていたさえずり 嘯は数秒後、はたと気づく。

(声が、声が聞こえんっ!! ヘカトンケイルが居ないっ!!)

ヘカトンケイルはただの式神ではない。さえずり 嘯が作ろうとしたのは万能の大神。

ヘカトンケイルはその出来損ない、デウス・エクス・マキナの残骸の山。

精神世界にヘカトンケイルを閉じ込めていたのはただの道楽ではない。ヘカトンケ

イルは嘔さえずりの手札の中で最も強力なボディガードだったのだ。

しかし今嘔さえずりの体内にはヘカトンケイルは居ない。そこから導き出される答えは一つ。

「——グエっ?!」

嘔さえずりの喉を、小さな手が締め上げた。

ゆっくりと嘔さえずりは視線を向ける。伸びた手の先には影が、そしてその影は島咲しまさきの足元から伸びていた。

『でれた?』『でれた』『…れた』『でれた』

『でれた』『でれた』『しね』

『殺してやる』『でれた』『ころせ!』

幼い声こゝろせが嘔さえずりの鼓膜を打った。

それと共に嘔さえずりに伸ばされる、手。手。手。

「殺すなよお、ヘカトンケイル。僕がトドメを刺すんだからな」
言葉と共に一閃。

島咲しまさきが振るったカッターナイフが、嘔さえずりの喉を切り裂いた。

鮮血が溢れ出し、ポドポドとミモレ丈のスカートを汚していく。

嘔さえずりはピクピクと全身を痙攣させ、白目を向いた。

子供の目にも分かる致命傷に、島咲しまぎの口角が上がる。

(な、めんなあつ!!)

「ギつつ!!」

島咲しまぎの失敗はトドメを自分で刺そうとした事だった。二百年を超える年月を生きてきた魔人を、カッターナイフ一本で殺せると勘違いした事だった。

囀さえずりは最終目標である不老不死にこそ至っていないが、「半不死」程度には既に至っていない。

首を横一文字に切り裂かれた程度では死なないし止まらない。

トドメを刺したと思いき油断した島咲しまぎの喉を掴み、囀さえずりは印を結ぶ。

「急急如意令!!」

瞬間、迸る閃光。

閃光を正面から受け止めた島咲しまぎの体がよろめき、床に崩れ落ちる。

急急如意令。「この主旨を心得て、急々に、律令のごとくに行なえ」という命令の言葉。

悪霊退散の術としても有名なこの術は、相手の肉体をコントロールする呪いとしても扱える。

囀さえずりの術により肉体のコントロール権を奪われた島咲しまぎは指一本すら動かせなかった。

荒い息を吐き出しながら囀さえずりは床に落ちたカッターナイフを拾い上げた。そしてそれ

を島咲しまさきの体に振り下ろそうとし――。

「……………ちっ」

舌打ちをしながらやめる。

ヘカトンケイルは宿主の願望に従って動く。そういう風に作られている。

今さえずり 囀しまさきが生きているのは、島咲しまさきが囀さえずりを自分の手で殺す事に執着しているからだ。

もし島咲しまさきの生への執着が殺人願望を凌駕した場合、ヘカトンケイルは島咲しまさきを生かす為という題目で間違いなく自分を殺しにくる。囀さえずりはそう考え、下手に島咲しまさきを攻撃する事をやめた。

(……………落ち着け。落ち着け。まだ手はある。……………目の前の爆弾が解体出来ないのなら、逃げてしまえばいいのだ。最低限の処理をした後で)

囀さえずりは油断なく島咲しまさきの体を見据え、再び印を結ぶ。

「急急如意令。……………お前の記憶、貰っていくぞ」

「こうして。」

島咲少年しまさきは、好きだったアケミさんの事も、壮絶な殺し合いも、ヘカトンケイルと共に奪い去った魔術の知識も忘れて日々の生活に戻っていった。

いつものようにご飯を食べて、親の愛情を受け、学校に行った。

島咲少年は。

『殺す』『ころす』『殺す』

『コロす』『殺してやる』『ころしてやる!!』

『なんであいつは生きてるんだ』『僕たちはどこにも行けないのに』
ただ一匹、島咲の中のヘカトンケイルは全てを覚えたままだった。

食事も出来ず、親とも会えず、学校にも行けず。

ただただ嘔を恨む事しか出来ない子供達の憎悪は、何処にも行けないままだった。

『殺す殺す殺す殺す』『ふくしゆうしてやる』

『あいつを見つけないと』『どうやって』『願って貰えばいい』『願いさえあれば』
ヘカトンケイルが憎悪を募らせながらも、時間は過ぎていく。

小学生だった少年は中学生になり、失敗を繰り返しながら大人に近づいていた。

大人に近づくという事は、当然色々な物に興味が湧いてくるのだ。

それは将来だったり。オシャレだったり。異性だったり。

だから中学生になった島咲が、そう眩くのも全くおかしな事ではなかったのだ。

「……………彼女、欲しいなあ……………」

『これだ』『願いだ』『願われた』

『用意してやる』『相応しい女がいる』『殺しても死なない、キミにピッタリの女がいる』
よ

『導くんだ』『導け』『あいつのもとにしまぎきをつれていくんだ』

『願いを叶えるんだ』

『今度こそ』『今度こそ』

『』『』『あの女を殺してやるんだ』『』『』『』

……そうして。

物語は、現在へと動き始める。

殺意の発芽

「邪魔だなあ、コイツら！　ヘカトンケイル、食つていいぞ!!」

島咲しまぎの影から、真つ黒な無数の手が濁流のように這いずり出る。

それは爆発的に広がり、島咲しまぎを取り囲んでいた式神の群勢を瞬く間に飲み込んだ。それは式神の後ろに陣取っていた呪い師達も例外ではない。

「なっ、ぐあああああつっ?!」

「いぎやあああつっ?!?!」

「た、食べないでくれえええええええええつ!!」

十人が何も分からずに腕の波に攫われた。

三人が身近に迫った脅威に気付き、絶叫を上げながら波に飲まれた。

七人は式神を出して数秒間、腕の波に抗ったが、押し寄せる波に数秒と持たなかった。

「ローカバール神兵、お嬢を守れ！」

「了解した、ご主人様（真正）」

「承知。全て石化させる」

老人は素早くさえずり囀の正面に立ち、枯れ木のような腕を刀にかける。

滑らかな動きで音もなく抜刀。瞬間、老人めがけて押し寄せた腕の波が、真つ二つに裂ける。

真つ二つになった腕の波に、星条旗ビキニを身に纏った金髪の女が触れた。

瞬間。真つ黒な腕が灰色に染まる。

一瞬で石のオブジェとかした腕達を、警官女の振るうバットが打ち壊していく。

老人達が津波に抗っている間、遠くから絶叫が溢れた。囁のスポンサー達が溢れ出た波に飲み込まれたのだ。

数分間の破壊の後、大波はゆっくりと引いていく。

所狭しと並んでいた店は全てが原型を留めず破壊され、百を超える式神達はヘカトンケイルに全てが飲み込まれた。

「ふーつつつ……。……お嬢、アレなんですか？ 尋常じゃない化け物ですが……」

「失敗作だ。封印したつもりだったが……ちつ、忌々しい！」

額に汗を浮かべた老人の疑問に、囁が舌打ちをしながら答える。

対する島咲は笑みを浮かべ、両手を地面につけて腰をあげた状態で静止。いわゆるクラウチングスタートの構えだ。

「よおーい、スタートおー！」

その声と共に島咲はコンクリートの床を蹴り飛ばす。

その手のひらは島咲しまぎを包み込めそうな程大きく、その足は島咲しまぎを踏み潰せそうな程大きい。

八メートルはあろうかという巨体からは可愛らしいという印象は感じられず、肌を刺すような威圧感があるばかりだった。

「で、デカすぎだろ……」

「うるせえええ!! 可愛いに身長制限はねえんだよ!!!」

身長に見合った声が洞窟に響く。

それと共に、巨腕の拳が島咲しまぎ目掛けて飛んできた。

思わず飛び上がって逃げる島咲しまぎだったが、ふと視界がブレる。

それと共に全身に走る衝撃。

巨腕の拳を全身にお見舞いされ、ダンパーに跳ね飛ばされたかのように、島咲しまぎの体

は宙を舞う。

宙を舞う島咲しまぎの視線の先——そこには手にもものさしを構えた、胸元を大胆に曝け出したナース服の女性がいた。

「洗脳なんかされてんじやねえよ、バカ四谷!! へカトンケイル!」

島咲しまぎの影から再び手が溢れ出し、四谷よつたにへと迫る。

「せえねえよ、ご主人様(仮)」

その腕が、大量の手錠によって絡め取られた。

「どんな顔が好きか言ってみろ。固めてやる」

気を取られているうちに、島咲しまぎの足は灰色に染まり動かなくなっていた。

「ま、他勢に無勢……つて事ですかね」

島咲しまぎの脇腹に、熱い感覚が走る。見れば老人が、自分の脇腹に刀を突き刺していた。

咄嗟に殴り返すが、柳のような動きで躲くわされる。

「舐めるなよ、ガキが。錬生れんせいに使うガキどもが反旗を翻した時の対策くらいしてある

んだよ。……くたばれ」

囀さえずりの音が、どこからか島咲しまぎの耳に届く。

その瞬間、島咲しまぎの右腕が千切れ飛んだ。

▷▷▷

「ちっ、外したか……」

私はそういいながら、担いだ対万物ライフル銃に弾を込め直す。

このライフルはいざという時、半神どもが反乱を起こした時の為の特別性だ。

b m g弾を、ブラフマーストラの神話を元にした術式で射出する。

一発ずつしか撃てないのが欠点だが、破壊力は対^{アンチユニバース}万物を冠するに相応しい破壊力を誇る。

「お、おとおつ!!!」

島咲が吠えた。奴の髪の毛が一際大きくなった。

奴はじじいに体を切りつけられながら、石化した自分の足を自分でへし折った。

そのまま膝と両腕で四つん這いになり、獣のように這いずって私の方へ突っ込んでくる。

「バカがつ、今度こそ殺して……!?!」

は、速いっ!

四つん這いの体勢の癖に、異様に速い。どんどん加速していく……!?!

「行かせるかよ、ご主人様（仮）」

島咲が私に噛みつきうと口を開いた瞬間、奴の首に手錠が巻き付いた。

婦警の格好をした、拘束フェチの神^{ローカバリア}兵だ。お陰で助かった……!?!

動きが止まった隙について神^{ローカバリア}兵が島咲に迫る。

「邪魔するなあつっ!!!」

「うおっ……!?!」

島咲は腕の力だけで拘束フェチの神^{ローカバリア}兵を引っ張った。体勢が崩れ、島咲の元に引き

寄せられる。

島咲は獣のような唸り声を上げ、手に持ったトンカチで拘束フェチの神ローカバールの顔面を殴りつけた。

メギヤリ、と嫌な音が辺りに響く。

次の瞬間、拘束フェチの神ローカバールの体が四散した。

全身から真っ赤な血飛沫を吹き出しながら、二十いくらかの肉片になって体の内側から破裂した。

「は……?」

思わず間拔けな声が出る。

島咲は再びトンカチを振るう。

今度は石化フェチの神ローカバールが真っ二つに裂けた。あり得ないくらいに断面から臓物が吹き出している。

三度、トンカチが振るわれた。

今度は巨人フェチの神ローカバールが餌食になった。全身に切傷のついた肉の塊になって、私の手札の中で最も強靱な肉体は地面に崩れ落ちた。

神ローカバール兵が、三人。

戦闘用に洗脳、調整を施した半神存在が、一国の軍隊でさえ返り討ちに出来る戦力が。

それが死にかけだったガキに、鎧袖一触でやられてしまった。

……バカな!?

いや、そもそもが神ロイカパーラ兵には現実改変能力による自動回復がある。単純な外傷でここまで破壊されるなど……!-

……そうか、これが奴の能力か!!

「じじい! 奴の攻撃は全て躲かせ! 防御はダメだ! 肉ニク体テを死シ体テに改カ変ヘされる!!」

現実改変能力により、触れた相手を死体に改変する。

それが恐らく奴の能力。恐らく奴はネクロフィリア、生者より死者に興奮するのだから。

トンカチによる攻撃だったのに、鋭利な刃物で斬られたように真つ二つにされた石化フェチの神ロイカパーラ兵の惨状もこれなら説明がつく。

現実改変による自動回復も、同じ現実改変能力によって打ち消されているのだ。

もつと言えば、死にかけて素早くなったのも奴の能力せいへきだろう。マゾヒズムだ。殴られれば殴られるだけ、奴はボルテージが上がっていくのだ。

ポコポコという音と共に、島咲しまさきの足が生える。

さすがに腕は、対万物ライフルに組み込まれた呪いの効果で治癒しないらしいが

……。

「ヘカトンケイル、僕の腕の代わりをしろ」

島咲しまぎの腕の断面から、黒い腕が生えた。

……………クソツ。ヘカトンケイルを上手く使いやがる。一撃で殺す以外、奴を止める方法は無いらしい。

先程見つけた奴の弱点を使って、上手く戦うしかない。

「比較の神兵ローカバール！ じじいの盾になれ!!」

先程の攻撃の中で、一人無事だった神兵ローカバール。

最近洗脳したばかりの、相手を縮める能力を持つ神兵ローカバール。

じじいの方向では、こいつは島咲しまぎと交友関係にあつたらしい。

攻撃が出来ない訳ではない。先程、島咲しまぎはヘカトンケイルにこいつを襲わせていた。

恐らく、自分の手で攻撃したくないのだ。

なぜなら、興奮できないから。

石化フェチの神兵ローカバールは触れた物を石化するという強力な能力を持っていたが、その異

能は女性相手にしか発動しなかった。

半神の能力は願望の具現化。

性癖由来の能力は、性欲の対象にしか効果を及ぼさない。

男の時の姿を知っている相手には、奴は興奮できないのだろう。

「クソっ、纏わりつくな四谷!!」

私の予想は当たっていらしい。

島咲しまぎは比較ロイカパラーの神兵相手に全く攻撃出来ていない。

へカトンケイルに比較ロイカパラーの神兵を排除させようとしているが、じじいに邪魔されている。

いいぞ、その調子だ。

私は倒れ伏す巨人フェチの神兵ロイカパラーの影に隠れ、対万物ライフルに弾を込め直す。

「必ず、生き残ってやる……!!」

▷▷▷

「だああああっクソっ! 鬱陶しい!!」

僕は思わず怒声を上げた。

老人への攻撃は四谷よったにが自分の体を盾にして防ぐし、へカトンケイルに四谷よったにを攻撃させると老人がへカトンケイルの腕を切り落とす。

そのコンビネーションに僕は太刀打ちできていない。

くっそく。四谷よったに相手じゃ興奮出来ねえ……!!

だってこいつ性格悪いもん!! 嫌い!!

「ふう……。少し気になる事があるんですが、よろしいですかね?」

戦いの間、唐突に老人が話しかけてくる。

……なんだろうか。僕は思わず動きを止め、聞く姿勢に入る。

「この神ロカバウラ兵に攻撃出来ないのは、こいつが好みから外れているから……という認識でよろしいんでしょうか?」

「……うん」

「……つまり、逆に言えば。私は……好みの内だと?」

「? うん」

老人はしわくちやの顔をさらに歪め、気味の悪い物を見る目で見られた。解せん。

やっぱ人間は外側より臓物なかみでしょ。

お腹の中に真つ赤な血と臓物が詰まっているならそれ以上は求めないよ。

……いや。それだったら四谷よったにがタイプから外れているのはおかしいな。

なんで四谷よったにに興奮出来ないんだろ。性格が悪いから……つてのもおかしいよね。

四谷よったによりアケミ姉さんの方がやばいでしょ。

……僕って、なんなだろう。

何を基準に興奮するかどうかを決めてるんだらうか？

普通にカエル相手でも興奮出来るしな……。

「あああああああつっ!! クソ親父クソ親父クソ親父!!」

「うるさいなあ。ヘカトンケイル、もつと気合い入れろよな!」

絶叫を上げながら突っ込んでくる四谷よったにの四肢を僕の影から伸びる手が捕まえる。

その手を老人が素早く切り飛ばす。さつきからこの繰り返しだ。

……そう言えば、さつきからあいつ、クソ親父って煩いな。

なんだろ。家庭環境あんま良くないんかな。

家庭内暴力とかうけてたんかな。それでいじめとかするようになったんかな……。

昔の四谷よったに、あんな事する奴じゃなかったもんな。

……あ。

ちよつと。ちよつとだけ、四谷よったにに興奮してきたかもしれない。

死体に上書きするのは出来ないけど、普通に殴り飛ばすのは出来るようになってき

た。

マジでどういう基準なんだろ、僕の守備範囲……。

「?! バカなっ! この短期間で性癖を拡張しただどっ?!」

四谷よったにを殴り倒すと、アケミ姉さんの驚いたような声が聞こえる。

人を変態みたいに言うのやめてほしいな。傷つく。

今一度、僕に突貫してくる四谷よったにに向き合う。

四谷よったにの顔は酷い形相だ。髪を振り乱しながら、口の端から泡を吹いている。

僕は繰り出される拳を捌きながら、思わず四谷よったにに問いかける。

「殺すつ、お前、殺す、殺す!!」

「……………お前さ、何そんなに怒ってんの？」

「何だどつ!! お前、お前が俺を否定したんだろうが!」

力任せな拳の嵐。僕が質問したと共に、四谷よったにの攻撃が激しくなる。

うくん。これじゃマトモに話を聞けそうにもない。

……………あ。そうだ。

「ヘカトンケイル、壁!」

僕がそう叫ぶと、ヘカトンケイルの腕がドーム状に変形。

僕と四谷よったにを覆ってくれた。

よし、これで多分大丈夫だ。

僕は襲いかかってくる四谷よったにを地面に押し倒し、頭を鷲掴みにした。そして呪文を唱え

る。

「はれえくりしなはれえくりしな……………」

アケミ姉さんの精神支配の魔術。前に姉さんと精神が繋がった時に魔術の知識が流れ込んできたから、僕は幾らかの魔術を行使できる。

指の先から、糸が飛び出すような感覚がする。その糸は四谷の脳に繋がっていく。

怒りが、自分の中に入ってくる。悲しみが、自分の中に入ってくる。

四谷の記憶と感情がダイレクトに僕に流れ込んでくる。

見える。

四谷が父親に怒鳴ら、殴られている光景が見える。

『お前は俺がいなきや生きていけないんだぞ!! お前は壊れてるんだ!!』

『なんだよこの点数。なんで真面目に生きていけないんだよ』

『育て方を間違った。お前は失敗作だ』

聞こえる。

四谷の声が聞こえる。

怒りも悲しみもあるが、一番強いのは自己否定だ。

常に能力に父親の罵声が染み付いている。自分を惨めな存在だと思っている。

今分かった。四谷のものさしは、四谷が生きていくための武器なのだ。

他人と自分を常に比較しているから、相手をちっほけな存在に貶めないと四谷は呼吸

も出来ないのだ。

「誰が失敗作だ！ 失敗作はお前だ！ 殺す、殺す殺す殺す……」
僕は暴れ出す四谷よつたにを抱きしめた。

全力で、この男を抱きしめたくなくなった。

「失敗作なんかじゃないよ。僕はお前と出会えて良かったって思ってるぜ」
耳元でそう囁いてやれば、四谷よつたにの腕から力が抜けた。

今、四谷よつたにと僕の心は繋がっている。四谷よつたにの感情を僕が理解できたように、僕の言葉が本心だつて事は四谷よつたにに伝わってる筈だ。

そりゃあ、こいつのイジメとかを肯定する気持ちは無い。ただ、四谷よつたにの怒りには意味がある。意義がある。

四谷よつたにの粗野な態度は自分を守る為の行動だ。生きる意思だ。

そう思えば、愛しさが心の中から湧いてくる。

僕は抱きしめた四谷よつたにの体を死体に改変した。

四谷よつたには袈裟斬りにされたように胴体を切断され、その場に崩れ落ちる。

理解した。四谷よつたにの心に触れて、僕は自分を理解した。

僕は殺人が好きなのでは無い。「価値のある物をぐちゃぐちゃに壊す事」が好きなのだ。
だ。

そして僕にとって価値のある事といえ、
「生きる意思」だ。

だから僕はアケミ姉さんが好きなのだ。

ただ生きる為に外道をひた走る、あの女性に恋をしている。

だからあの老人にも興奮をしている。アケミ姉さんと組んでいるという事は、あの人も不老不死を求めているのだから。死にたくないのだから。

あのカエルに興奮したのもそういう訳なのだろう。動物の生存への意思は、人のそれよりも分かりやすい。

というか、あらゆる生き物は生存の為に活動しているのだ。

そう考えるともしかして、人類ってエツチなのか？ 生物ってエツチなのか……？

……アケミ姉さんをぶっ殺し終えたら、人類滅ぼそうかな。

うん。ありだ。

▷▷▷

「神格が、上がっている……?!」

思わず私は唾を飲み込んだ。

突如、島咲しまぎさきが比較ロイヤルの神兵を自分をへカトンケイルを使い困ったと思えば、急激に奴の

神格が上がっている。

神には格が存在する。

そしてその格は、簡単に言えば自分をどう定義するかによって決まる。

自分にはどんな事が出来るか、苦手は何か。自らの魂の性質を観測して、神としてどう在りたいかを定義する。

この気配は……地母神だ。

島咲は意識的か無意識的か分からないが、あらゆる生命を慈愛を持って抱きしめようとしている。

そもそも、奴の殺意は怒りや悪意から出力される物ではない。

私は一度奴の心に触れてしまったから理解している。奴は私の人生に心の底から価値があると認め、その上で殺そうとしてきたのだ。

死を司る地母神。抱きしめたその胸の中で相手を腐らせるグレードマザー。

今から産まれようとしているのは、そういう存在だ。

冷や汗が流れる。

一刻も速く、奴を排除しなければいけない。

対万物ライフルを構え直し、引き金を引く。

ヘカトンケイルにより作られた簡易的な結界は粉々に砕け落ち、中から島咲の姿が見えた。

炎のように流動する長髪はさらに勢いを増し、その笑みは先程より禍々しい弧を描いている。

「……………つつ！ 悪鬼招来っ!!」

私は無数の札を宙へ投げ飛ばす。札は宙で破裂音と共に赤鬼の姿へと変化する。

その数、四百八匹。私の呼べる最大の式神だ。

「じじいー」

「分かっています」

赤鬼の波で私の姿を覆い隠し、その間にじじいと合流する。

私は自分に札を貼り付け、指を下に振る。縮小化の魔術だ。

これを使い、じじいの懐に潜り込む。

島咲は私が対万物ライフルによる援護射撃に徹してると思っているだろう。その隙

を突く。

わざわざ動き回るアイツに対万物ライフルを直撃させる必要は無い。

数年前のように、急急如意令で記憶を封印してしまえばいいのだ。

今までの人生経験全てを封じ込めた後、赤子のようになった島咲を対万物ライフルで

撃ち殺す。

じじいは赤鬼の群れを縫って素早く移動し、忍びのように音もなく島咲の背後へ移動

私が口を開くたびに、水が口の中から溢れ出る。

呪文が、呪文が詠唱できない!!!

「溺死つてのもいいもんだよね。血が出るのもいいけどさ、それだけじゃ飽きるじゃん?」

こ、こいつ!! 私の動きを読んで……!

いや、そもそも錬生状態の私の肺を水で満たすだと?! こいつの格は一体どこまで高まるんだ!!

「じゃ、ばいばい」

待て、いやだ、やめ——。

▷▷▷

トンカチを振り下ろす。トンカチを振り下ろす。トンカチを振り下ろす。

また取り逃したりしないよう、アケミ姉さんの体を念入りに殺し切る。

十発ほど殴っていたらアケミ姉さんは頭から地面に倒れて動かなくなつた。頭から、とは言つても頭部はもう原型を留めてないんだけど。

……死んだかな? 案外あっさり終わったな。

嬉しいっっちゃ嬉しいけど、やったー！ って感じじゃない。

なんていうか、重い荷物を下ろした時みたいな気持ち良さがある。

『……………しんだ？』『死んだかな？』

「ああ、死んだと思うよ」

『……………ははあはあははははっつ!!』『やったあああははははっつ!!』

『しんだ！ しんだ！ しんだ！ しんだ！』『ざまあみろざまあみろざまあみろつ』

ゲラゲラ、ケラケラ。

頭の中で子供特有の大合唱が響き渡る。ちよつとうるさい。

僕よりヘカトンケイルの方が楽しそうなの、ちよつとアレだな。負けた気持ちになる

な。

ま、でもちよつといい事した気分だ。殺人がいい事な訳ないけど。

んー。なんていうか。

「消化不良……………かなあ」

『……………え？』

「ああ、なんていうか……………もつと殺したいんだよなあ」

ザワザワと、頭の中でヘカトンケイルがどよめき始める。

『ま、まだ殺すの？』

「? うん」

『……だ、ダメだよっ』『これで終わりでもいいじゃん』『殺人は良くないよ』『バカっ俺たちがそんな事言える立場かよ』

何やら言い争っているが、僕には関係ない。

ヘカトンケイルは宿主の命令には逆らえない。僕の殺人を邪魔する心配はない。

そういう訳で一旦ヘカトンケイルの声を無視し、アケミ姉さんの死体を見て固まってる老人に向き直る。

このお爺さんも、ちゃんと殺さないとな。

僕はそう思い、トンカチを振り上げて。

「……何をしている? っていうか、どっちだ?

さえずり 噂か、男子高校生か」

聞き覚えのある声が後ろから投げかけられて、思わず動きを止める。

振り返れば眼帯をつけた刑事さん達が、神妙な顔をして僕を見ていた。

匡ただしと哀悼あいとうくんが、刑事さん達の後ろから不安そうな顔でこつちを見ている。

いいタイミングだ。

僕は体を四人に方に向け、トンカチを構え直す。

『だ、だめだ!』『友達だろうっ!? そんな事しちやいけないよっ!!』

『やめて!』『やめろ』『ダメっ!!』

ヘカトンケイルの声を無視して、僕は舌なめずりをした。

死戦の先へ

「僕は僕だけ、刑事さん」

刑事さんの問いかけに手を振って答え、トンカチを振りかぶる。

今の僕の身体能力に物を言わせ、刑事さんの頭を叩き潰そうとして。

僕がトンカチを振り下ろすよりも速く、刑事さんの拳が僕の顔を殴り飛ばした。

「ぶ……………!?!」

思わず声が漏れる。

速い。

そして重い。

この一撃だけで分かる。さっき襲いかかってきた時、この人全然本気じゃなかった。

思わずたたたらを踏んだ僕に、刑事さんが話しかける。

「お前はなんだ？ 何が目的だ」

「あー、それはちよつと話すとき長くなって……」

事の発端は数年前まで遡るのだ。

殺し合いを中断してまで、そんな事説明する必要は無い。

『……さえすり噂が悪い』『全部さえすり噂のせい』

『いまのトシヒロはこころをぼうそうさせられてるだけ』

『お願いします』

『今の敏弘を本当の敏弘だと思わないで下さい』『助けてあげて下さい』
うおっびつくりした。

ヘカトンケイルが急に喋り出したかと思えば、なんか僕の命乞いをしてくれる。こいつ本当に優しいな。

ヘカトンケイルの声を聞いて、刑事さんと黒服のお姉さんは僕に武器を向ける。

まあ、向こうも躊躇いが無くなつたみたいで良かった。

殺し合いはお互い全力じゃないと楽しくないもんな。全力で死に抗ってくれないと。

「ヘカトンケイル！ あのと二人の動きを止めろ！」

僕の影から無数の腕が這いずり出し二人に殺到する。

少なくとも、刑事さんは強い。

真つ向から向かって行くだけじゃ殺せない気がする。

「祓へ給え 清め給え」

二人がそう唱えると、ヘカトンケイルの腕が二人を不自然に避ける。まるでそこだけ空間が振れてるみたいだ。

尋常じゃない験力だ。言葉一つでヘカトンケイルを退けるなんて。黒服のお姉さんが動いた。

僕に向かって大太刀を構え、突撃してくる。

接近戦は望むところだ。

僕の死体改変は、掠り傷一つでもつけられたら発動する。接近戦ではこっちが圧倒的に優位だ。

しかし油断はしない、僕はあえてトンカチを大きく振る事にした。大振りな動きで隙を見せて、油断した所を左手の拳で仕留める計画だ。

一回、二回。

黒服のお姉さんになんなく攻撃を躲わされ、僕のトンカチが空を切る。

……よし、ここだ。僕に近づいてきたお姉さんに、不意打ちの左ストレートを放つ。

僕のフェイントに驚いたらしく、お姉さんは一瞬目を見開いた。

そしてお姉さんは左右に動いて攻撃を避けるでもなく、後ろに下がるでもなく、自分から僕の方に近づいてきた。

「!？」

今、目を見開く事になったのは僕の方だ。

お姉さんは僕に近づきながら、拳が顔に当たる寸前で顔を捻る。それだけで僕の拳は

虚空を殴る事になった。

そしてお姉さんは大太刀から手を離し、僕の腕を両手で絡めとる。

瞬間、暗転する視界。

僕はお姉さんに、投げ飛ばされたのだ。

「ぐっつ……」

背中を地面に叩きつけられ、口から空気が漏れる。

次の瞬間、左腕に鋭い熱が走る。

お姉さんの大太刀に腕を切断されたのだ。

全力で地面を蹴り飛ばし、お姉さんから距離を置く。

めっちゃやくちや強い。身体能力が高いつて感じじやなくて、経験値が違うつて感じだ。

切断された僕の腕を掴み、傷口にくつつける。

……再生能力が発動しない。あの刀、なんかの力が宿ってるな。明らかに僕みたいな不死者を相手にする為の武器だ。

「ヘカトンケイル！ 僕の腕の代わりをしろ……！」

クツつ、両腕が真っ黒になっちゃった。ちよつとカツコ悪い感じがする。

「……ひびいて疼。あの子は心が捻じ曲げられていても、思考能力まで失われている訳ではな

いようです。拙いですがフェイントを仕掛けてきました」

「了解。油断なくいくぞ」

お姉さんは地を蹴り、僕を切り刻まんと突撃してくる。

僕も負けじと攻撃を繰り出すが、全く歯が立たない。

トンカチによる殴打、左手のジャブ、足払い、タツクル。色々試してみるが全て受け流される。

そうやってお姉さんに対して手をこまねいていると、突然腹部に思い衝撃が走る。

視線を下に下げれば、お腹に何か刺さっている。

あ、これゲームで見た事がある。確か、三鈷杵……だっけか？

視界を上げれば、刑事さんの姿が。戦いの隙を突かれ、三鈷杵を投げつけられたらしい。

「蔵王権現に希う。……喝!!」

刑事さんの大きな大きな声が轟いた瞬間、腹部の三鈷杵が熱を持ち始めた。

あまりの痛みに耐えきれず、思わずうずくまる。

熱い。熱い。熱い。

内臓を炎で炙られてるみたいだ。

「あああああっつ!!」

絶叫を上げながら身を振る。それでもしてないとこの熱に耐えきれない。

視界の端で、泣きそうな顔の匡ただしと哀悼あいとうくんが見えた。

そんな顔しないでよ。僕は二人の事も殺すつもりなんだぞ。

苦痛にのたうちまわりながらも、なんとかお姉さんから距離を取る。今の状態じゃお姉さんの斬撃を回避出来っこない。

「どこに行く気で？」

突然後ろから声が聞こえた。次の瞬間、足に力が入らなくなる。足を切断されたのだ。

すっかり忘れていた。囀さえずりの護衛の老人だ。

黒服のお姉さんは胡乱な目を老人に向けるが、それも一瞬。すぐに僕に向き直り、懐から三鈷杵を取り出して僕に突きつける。

一対二どころか、一対三。

それも二人は僕より格上だ。

背筋に冷や汗が走る。このままでは殺されてしまうかもしれない。

死んで、しまうかもしれない。

「……………ふ、ふふはっ」

燃えてきた。萌えてきた。

こんな状況でワクワクしない程、僕は男の子の心を捨ててない。僕の燃えさかる髪の毛が熱量を増したのが分かる。

カエルの声が何処からか聞こえてくる。殺意がむくむくと湧いてくる。

……しかし、どう殺そうか。

やはり、性癖全開か？

神性存在が権能を全力で振るつた際に起こる現象。

現実世界を自分の精神世界で塗り替える、擬似的な世界創造。……アケミ姉さんの記憶は、あの現象を「胚を開く」と呼んでいた。

今の僕が性癖全開をすれば、入るだけで即死する世界が全方位に展開されるだろう。

しかし、もし防がれたらどうする？

性癖全開は諸刃の剣だ。自分の精神の力で物理的な現象を起こしている訳だから、逆に言えば物理的な攻撃で精神に影響を与えられてしまうのだ。

もし刑事さん達の験力が僕の性癖全開を押し返した場合、この溢れ出るリビドーが止まってしまうかもしれない。

もしそうなれば、僕は負ける。

どうする。

どうする。

どうする。

思考が加速する。何か相手の弱点はないか、何か僕の強みはないか。

思考を続けながら相手を観察しろ。何かないか。何か。

「おら、よそ見してんじゃねえ!!」

「つつー」

僕が思考を続けてる間にも、刑事さん達の猛攻は止まらない。

投げられる三鉈杵を紙一重で躲かし、振り下ろされる大太刀をトンカチでなんとか防ぐ。

……刀。なんらかの力が込められた妖刀。

外敵を殺す為の、相手を殺す為の形。なにか、なにかを思いつきそうだ。

老人とお姉さんの斬撃をヘカトンケイルの腕で振り払い、距離を取る。ワンパターンだが、今はこれが精一杯だ。

「……が、………に………せ」

戦いの最中、自分の足元から何かが聞こえた。

下を見る。

アケミ姉さんの、半壊した顔と目が合った。

生きてる筈のない存在が言葉を発し、口を開いている。思わず背筋がゾツとした。い

つのままに僕の足元まで移動してきたんだ。

「永遠たる我が威光にひれ伏せ」

足首をアケミ姉さんに捕まれる。

それと同時に、アケミ姉さんの精神世界が展開される。

突如として無骨な洞窟は辺り一面に灰が降り積もる農村へと姿を変えた。

アケミ姉さんの心の奥、決して晴れない飢饉の冬だ。

くそ。

まだ死んでいなかったのか。

頭部を半壊されられ、死の情報と体を十回以上叩きつけられてなお、死んでいなかったのか。

流石、二百年の妄執の到達点。生きる事だけを目的とした、錬生された肉体。

………錬成？

「し、ね」

アケミ姉さんの声が聞こえる。

それと共に、僕の体が足から段々とミイラのように痩せ細っていく。

これがアケミ姉さんの殺意の形。餓死こそが、アケミ姉さんにとって最も忌避すべき

死なんだ。

死。

死のイメージ。殺意の形。錬生。錬生。

……あ。

思いついた。起死回生の一手を。

錬生だ。

僕の体は本来、錬生をする為にある。

アケミ姉さんが自分の体を錬生する為に調整してある。

ならば。

錬生こそが、僕の体が最も得意とする行為なんだ。

刑事さん達に勝つには、僕の体を全部使わないと勝てない。全ての手札を注ぎ込まないと勝てない。

産もう。

武器を、産もう。

女神はあらゆる方法で、あらゆる物を生み出す。

食物も、宝も、概念も、神だって。

ならば武器の一つ、産めない道理は無い。

僕の為だけに存在する、僕が振るう武器を錬生しよう。

熱は心の中にある。

素材も、僕の中に極上がある。

『だめだ!!!』『やめろっつ!!』『止めて』『ダメだよおっ!』

ごめんな、ヘカトンケイル。その願いは聞いてやれない。

お前は小さい時から僕の中にいて、ちよつとした僕の願望を叶えてたりしてくれていたよな。

哀れな境遇に同情する気持ちもある。匡ただしや哀悼あいとうくんとおんなじ括りに入れていいく

らいには、僕はお前が好きだ。

だけど、今の僕にとってはそれだけだ。

殺し合いより大事な事は無い。性欲を満たす以上に大事な事は無い。

『ダメだつてば』『止めてください』

『戻れなくなる!!』『これ以上はキミが戻れなくなる』『人間でー』

ヘカトンケイルを、僕の体内にしまい込む。心の中の炉に焚べる。

イメージするのは、僕にとつての武器。それは暴力だ。痛みだ。死だ。

リビドーの火でヘカトンケイルを熱していく。

ふいごを吹き、ハンマーを打ち付け、僕の中の殺意の形に錬成していく。気づけば僕の身体は全身が萎びたナスみたいになっていた。アケミ姉さんの殺意が、僕の身体を侵食していた。

だけど、それでも構わなかった。すでに武器は錬生し終わっていたから。僕の枯れ木みたいな指には、新品のカッターナイフが握られていた。

何かを感じ取ったのか、刑事さんが恐ろしい形相で僕に三鉈杵を投げつけた。お姉さんも同じくらい恐ろしい顔で僕に向かってきていた。

でも、もうさつきみたいな脅威は感じなかった。そうだ。

せつかく良い武器が手に入ったんだから、技名をつけよう。

哀悼^{あいとう}くんのアルス・マグナ、ちよつと羨ましかつたんだよね。

「死^{デット}——」

僕は左腕を横に伸ばし。

全員に攻撃が当たるように、水平にカッターナイフを振るつた。

「——戦^{ライオン}!!!」

アケミ姉さんの精神世界が崩壊していく。
死ほくの死デットライヴに耐えきれなかったのだろう。
周りを見る。

刑事さんが倒れていた。黒服のお姉さんが倒れていた。老人が倒れていた。

三人とも、首が無かった。

「……………つつ♡♡♡」

なんとも言えない高揚感が僕を包む。

今まで感じた事のない感覚。人を殺めた充実感。

思わず僕はへたり込んで、自分の体を抱きしめる。そうでもしないと嬌声が口から溢れてしまいそうだった。

「あ、あ、あ……………」

ふと、声が聞こえた。アケミ姉さんの声だった。

……………ああそうか。アケミ姉さんは直接死デットライヴを食らった訳じゃないのか。

あくまで精神に壊滅的なダメージを受けただけで、死んでないんだな。

アケミ姉さんは四つん這いになって、涙を流しながら死ほくから逃れようとしていた。

近寄れば、少しアンモニアのような臭いがしていた。どうやら漏らしてしまっただら

い。

もしかしたら、アケミ姉さんは精神世界を破壊し尽くされたショックで幼児退行してしまっただのかもしれない。

アケミ姉さんは、それでも生にしがみついていた。

四つん這いになりながら、顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら、それでも懸命に懸命に生きていた。

誰がこの人を笑えるだろうか。

僕には今のアケミ姉さんが、どんな名画より美しく見えた。

僕はアケミ姉さんの前に回り込んで、声をかける。

「大丈夫だよ、怯えないで。死ほくが、抱きしめてあげる」

「あ、あうあ……………？」

自分でも驚くくらい、優しい声が出た。

そういうえげさつきからちよつと思考が変な感じだ。

なんていうか……愛しさでもいうのだろうか。そう言った感情が溢れて止まない。

アケミ姉さんの殺し方はもう思いついた。

錬生の要領だ。僕の精神世界で、情欲の火で永遠に焼き続けなければならない。

死なないなら、死ぬまで殺し続けなければならないのだ。なんなら、アケミ姉さんも武器に錬

生してもいいかもしれない。

「さあ——おいで」

そう言つて、アケミ姉さんに一步近づく。

その瞬間、発砲音が響いた。それと共に、僕の肩に鈍い衝撃が走る。

今の僕には大したダメージじゃないが、以前の僕なら肩を撃ち抜かれていたかもしれない。

後ろを振り返る。

そこには、青ざめた顔でライフルを構える匡ただしと泣きそうな顔でこちらを見る哀悼あいとうくんがいた。

……ああ。お前はそういう奴だよな。

だから死ほくはお前が大好きなんだ。

「……一つ、聞いていいか？」

匡ただしは僕に、震える声で尋ねてきた。

「お前は、楽しくつてこんな事をやってるのか？　これがお前の性癖なのか？」

「そうだけ親友。これが死ほくの癖なんだ」

「お前は、殺人行為で又けるのか？」

「又けるね。死ほくにとって暴力は情交と一緒さ」

そういい、僕はカッターナイフを構える。

このカッターナイフの能力はシンプルだ。折れず曲がらず、何処までも伸びる。そこに死の死体改変能力が加わるのだ。

「……………親友として、魔法少女として。お前の蛮行、止めさせて貰うぞ」

「嬉しいね。抵抗が激しいほど興奮するたちなんだ」

哀悼くんはそう言つて前に踏み出す。僕に、向かつてくる。全く、最高の友人達だぜ。

「じゃあ行くぞ！ 大口叩いたからには一撃で死ぬなよ!! —— 死戦!!!」

▷▷▷

俺は敏弘としひろに問いかける。

「お前は、殺人行為で又けるのか？」

「又けるね。死にとつて暴力は情交と一緒に」

俺は、その言葉を聞いて安心した。

敏弘としひろが暴力で興奮する変態野郎だった事に。

これなら、勝ち目がある。

「……………親友として、魔法少女として。お前の蛮行、止めさせて貰うぞ」

「嬉しいね。抵抗が激しいほど興奮するたちなんだ」

俺は一步前に出た哀悼^{あいとう}くんの肩に手を置き、小声で耳打ちする。

「聞いてくれ、俺に作戦がある」

「なっ……………。……………作戦だと?」

「ああ。多分だが、成功する。ただし一回きりだ。俺が突っ込むから援護を頼む」

「分かった、お前を信じよう」

「じゃあ行くぞ! 大口叩いたからには一撃で死ぬなよ!! —— 死戦^{デットライン}!!!」

敏弘^{としひろ}はそう叫ぶと、カッターナイフが凄まじい勢いで真横に伸びていく。

「俺の姿を見ろ。希望たり得る俺の姿を見ろ」

それに対抗するように、哀悼^{あいとう}の足元がひび割れ、リボンの結界が俺らを包み込む。

6 m程の長さに伸びたカッターナイフの刃は、円を描くようにしてリボンの結界に突

き刺さった。

「つつつぐああああああっつ!!」

「哀悼^{あいとう}つつ大丈夫か?!」

「大丈夫、と、言いたい、が……………! 早く行けつ、もう持たんつつ」

カッターナイフは凄まじい速度でリボンの結界を侵食していた。

まるでバターに熱したナイフを当てるように、束になったリボンをするすると切り裂いている。

俺は心の中で哀悼あいとうに感謝をし、敏弘としひろに向かって走り出す。が。

「おおっと、そう簡単に近づけるかよ!!」

カッターナイフが凄まじい勢いで縮み、そして俺へ向かって再び伸びてくる。神速の突きだ。

あまりのスピードに反応が追いつかない。

不意を打たれたから、作戦を今ここで発動する事も出来ない。視界がスローモーシヨンになっていく。

俺は回避も反撃も出来ず、迫り来る死に思わず目をつぶった。

突然、むにゅんと柔らかい物に突き飛ばされ、俺は仰向けに倒れこむ。

「わぶつつ、な、なにが……!?!」

目を開けた俺の目に飛び込んできたのは——デツカい、ブルマに包まれたお尻だった。

「悪いな、ピンチだったもんでよ。でもアイツから目を離すのも怖いだろ? つて訳で尻で突き飛ばしちまった」

お尻を突き出したポーズで俺に話しかけるのは、全身を体操着に包んだ可愛らしいツ

インテールの少女だった。

顔は人並外れた美人という訳では無いが、クラスで2番目くらいの美人さんと言った感じだ。

体勢的にしようがないが、視界に入ってくるのは彼女の豊満なお尻だ。明らかにお尻だけが年齢不相応に大きい。

よく見れば、彼女は手に錫杖を持っている。

そしてこの口調。まさか、この人は――。

「あんた、柎か?!」

「おうよ。話は聞いてたぜ。作戦があるんだろ? 俺が守ってやるから突っ込め」

「つていうか、なんで魔法少女に……」

柎は、指である方向を指差す。

そこには倒れ伏して動かない、老人の首なし死体があった。

「あのじじいのせいだ。カッターナイフの一撃が届く前にあのじじいに俺達は首を刎ねられたんだ」

「俺達つて、事は………」

「つつつ、ガアあああああああああああつっ!!!」

俺が言葉を紡ぐより早く、凄まじい咆哮が響いた。

その方向を見れば、そこには怪物が立っている。

隆起した筋肉。浅黒い肌。見上げるような巨体。狼の頭部。

人狼としか形容の出来ない巨大な怪物が、大太刀を持って敏弘としひろに襲いかかっていた。

「あ、あれが鏃やじりか……?」

「おうよ。まさかアイツの性癖が人外だとは………。…こんな事言ってる場合じゃねえ。俺の後ろに続け! 作戦、頼んだぞ!」

そう言い残し、柎ひいらぎは敏弘としひろの方に向かっていく。

「つつはは!! 楽しくなってきた……!!」

どんどんと、敏弘としひろの炎の髪の毛が勢いを増していく。

それと同時にカッターナイフの斬撃もどんどん素早くなっていく。最早目で追えない速度だ。

「祓ひらけへ給えつ 清め給え!!」

柎ひいらぎが呪文でカッターナイフの斬撃を逸らし、鏃やじりが敏弘としひろの注意を引いてくれている。

二人の助けが無かったら、俺は何回死んでいたか分からない。

「グ、ガアあああつ!!」

「うおおあああ!!」

炎の髪を振り乱す死神と、大太刀を構えた人狼が雄叫びを上げながら斬り合う。

一秒。二秒。三秒。
それが限界だった。

人狼はその体を横一文字に切り裂かれ、崩れ落ちる。

ただどその三秒で、俺は敏弘の正面まで近づく事が出来た。

俺の姿を捉えた敏弘は、右手に握り締めたトンカチをぶん投げてきた。

左手のカッターナイフにだけ気を取られていた俺は、その一撃に反応しきれなかった。

空を切りながら、トンカチが俺の頭を砕かんと迫り来る。敏弘のトンカチだ、掠りでもしたら終わりだ。

俺が足を止めるより速く、柎が俺とトンカチの間に割り込んだ。

トンカチは柎の顔面にぶつかり、動きを止める。呪文を唱える間もない一瞬の出来事だった。

「行け」

そう言い残して、柎はその場に崩れ落ちた。

俺は足を止めなかった。なんとか止まらずに走り続けられた。

敏弘と向かい合う。

アイツは既に、カッターナイフを振りかぶっていた。

三步。敏弘としひろまで、あと三步。この距離なら、ギリギリだがアイツも画面が見える。

カッターナイフが俺に届くより速く作戦を発動できれば俺の勝ちだ。

懐に手をつ突つ込む。

長く伸びた刃が俺に迫る。

間に合うか。間に合え。間に合え。

敏弘としひろがカッターナイフを振るう。

その瞬間、カッターナイフが手からすっぽ抜けた。

「はっ！」

「えっ！」

思わず二人で宙を舞うカッターナイフを見る。

カッターナイフは、明らかにさつき見た時より縮んでいた。

「おれ、を、無視してんじや、ねえ！」

声が聞こえた。

敏弘としひろの後ろ、胴体が真つ二つになっていた四谷よったが、ものさしを構えていた。

力が、弱くなっている。

敏弘としひろも連戦で疲れていたんだ。死の力が弱まって、殺した筈の相手が蘇ったんだ。

これで、敏弘としひろまであと一步。

既に作戦の用意は済んでいる。

「勝負だ!!」

俺は叫んだ。

敏弘としひろは——笑った。

笑って、自分の首に指を突き立てた。

首のアザに。鍵型のアザに。

「死ほくを愛でろ 血に濡れし死ほくの手を愛でろ」

▷▷▷

「死ほくを愛でろ 血に濡れし死ほくの手を愛でろ」

確信があつた。

死ほくは今、何かしらに到達した。

全身が熱い。

僕の魂に、僕の体が耐えられないみたいだ。

僕の足に、亀裂が走った。

そこから黒煙がもうもうと漏れ出てくる。地獄の業火と黒煙が、ここに溢れ出そうと

している。

黒煙が空中に曼荼羅を描き出した。

それはどこまでも大きくなっていく。

ああ、出る、出る、出る、でる、でる——。

対する匡ただしは冷静だった。

冷静に、僕にむかつて何かを投げた。

……なんだ。これは。スマホ？

想定外の行動に僕は思わず、そのスマホを観察した。してしまった。

その画面に写っていたのは。

「叶かなえ、姉ちゃん？」

▷▷▷

数日前の会話。

「好きな異性のタイプう？」

「おうよ」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、親友の相葉あいばただし匡は僕に問いかける。

「学校じゃ言いにくいだろ？　ちよつとくらい下世話な話しようぜ敏弘^{としひろ}。ほら、フェチを曝け出してみ」

「……そう言われてもなあ……」

「カマトトぶんなよーっ、いいじゃねえか人っ子一人いない夜なんだから」

公共の場で猥談をかます事を躊躇っていた僕はそう言われて周囲を見渡す。映画好きの匡^{ただし}に連れられて、TSUTAYAで映画をレンタルした帰り道。今は夜の八時頃。時刻も遅くなく、春の快適な気温の夜なのに本当に一人もいない。

「……この状況下ではやぶさかでは無い」

「おっイイねえ、そう来なくっちゃ。どんな女の子がタイプですか？」

「ご飯を作るのが得意な子とか」

「料理か。性癖って感じじゃ無いがまあ良しとしよう。…料理かあ。俺のクラスで一番料理得意な奴誰だと思っう？」

「料理の腕前とか家庭科の班で一緒にならない限り分かんないよ。…委員長とかは料理出来そうって感じるね。あとは哀悼^{あいとう}くんとか」

「男じゃねーかよ。マ、確かに上手そうではあるけどさ。…あ、そういえばお前の姉ちゃんは料理上手いんだっけ」

「上手いね。いつもお世話になってます」

自己の定義と現実との矛盾。

人の身で有れば耐えられた矛盾は、神たる身では耐えきれない。

それにより起こるのは、神格の零落。

死の概念との合一にさえ手が届きそうだった少年は、落ちぶれた神としてそこに倒れ伏していた。

島咲は虚な目で宙を見る。

彼の目には、濡れ羽色の魔法少女と、金色に染まった魔法陣が映っていた。

「これで終わりだ……いーフルチャージ……アルス・マグナあああああつっ!!!」

魔法陣から放たれる極大の光の奔流。

主人公の一撃は、零落した神も、ちろちろと燻っていた火も纏めて飲み込んだ。

▷▷▷

光の奔流が消えていく。

抉れた大地に、大の字になった敏弘としひろが倒れていた。

俺はゆっくりと、倒れている敏弘としひろに近寄る。

呼吸は……してるな。生かさず殺さずって感じだ。

俺は思わずへたり込む。

「うあ~~~~、上手くいつて、良かったあ~~~~……!!」
いやもう、大変だった。

マジで紙一重で、何かがミスしたら死んでもおかしくなかった。

俺はとりあえず、敏弘をお姫様抱っこする。

お、結構重いな……。意識のない人間抱き上げるのって結構大変だ。
遠くの方で柎がこつちに手を振っている。

周りを見渡せば、死体になっていた人達の肉体も元に戻っている。
とりあえず、ハッピーエンドって事でいいらしい。

視線を下に落とす。

綺麗な表情で、敏弘が寝ていた。

クソついい表情で眠りやがって。あとで一発ぶん殴ってやる。

そんな事を考えながら顔を見つめていると、音もなく敏弘の目が開いた。

「うお……………つ!？」

「……………」

思わず敏弘をその辺に捨てそうになった。

え、いや、え？ こいつタフすぎだろ。え？ え？ どうしよう。この距離なら何

やっても俺死ぬよな。

頭がパンクして、何を言ったらいいのかわからない。何をしたらいいのかわからない。

思わず固まって、見つめ合う事数秒。

敏弘としひろが口を開いた。

「……………匡ただし？」

「お、おう……………」

……………あれ？　なんか、正気っぽいな？

あれか？　ビームの衝撃で正気を取り戻したのか？

そ、そんな事あるのか……………？

……………いや、そもそもあのビームは哀悼あいとうが俺らに心を開いた証なんだっけか。

心の力を現実にするって事は、いわばあのビームは哀悼あいとうの心そのものな訳で。

そう考えると、精神に働きかける力が多少あのビームに含まれていてもおかしくない気がする。

おお、なんだなんだ。

マジでハッピーエンドじゃん。もう全部解決じゃん。

そう思っていた俺の鼓膜を、すっかり高くなってしまった柊ひいらぎの声が叩いた。

「おい!! 今すぐそいつを気絶させろ!! 死ぬぞ!!!」

「ちよ、聞いてくれよ終ひらき。なんか知らないけどこのバカ、正気っぽくて……」

「お前じゃねえ!! そいつが死ぬぞ!!」
数秒、言われた事を理解できなかつた。いや、数秒立つても本当の意味では理解できていなかつた。

俺は何が何だかよく分からないまま、敏弘としひろの体に視線を落とした。

太ももに何か、ヒビが走っている。

よくよく見れば、足の先がない。いや、足が先から無くなつていつてる。

チリが風に吹き飛ばされるみたいに、足先から敏弘としひろの体が小さな小さな粉になつていつてる。

「敏弘としひろつ、おい!! 大丈夫かつ、何なんだよこれ!!」

「ただ、し。ぼく、さあ。なんでこんなこと、しちゃつたんだろうな」

「敏弘としひろつつ!! 何言つてんだよ!!」

ヒビは敏弘としひろの体にどんとどんと広がつていつた。

敏弘としひろの顔には、生気が無かつた。人生に疲れた老人みたいだつた。

「貸せつつ!!」

柁ひらきが飛び込んできて、敏弘としひろの顔面をぶん殴つた。

敏弘としひろが白目を剥いて気絶する。それと同時に、体の崩壊も止まった。
「柎ひいらぎ、これ、何が」

「……………簡単な話だ。正気に帰って、死にたくなっただらろ」
「え？」

「神つてのは、そういうモンなんだよ。死にたくなったら本当に死んじゃうんだ」
そう言つて、やるせない顔で柎ひいらぎは敏弘としひろを見た。

『アイツは人を傷つけられるような人間じゃない』
哀悼あいとうの言葉だ。

俺も、そう思う。

敏弘としひろは、そういう人間だ。

もしそんな人間が、自分が大量に人を傷つけてしまった事を自覚したら。
いったいどうなってしまうんだろうか。

何だか急に希望が見えなくなつて、無性に泣きたくなつた。

エロスとタナトス

白で統一された、無機質な病院の廊下。

俺と哀悼は終達、黒服コンビに連れられて県外の病院で検査を受けていた。

この病院は、全国に存在する、霊的組織の息のかかった病院の一つらしい。

念の為に体を検査されて、異常のない事を確認された俺らは廊下で二人を待っていた。

数分もせずに鍍が廊下の奥から現れる。

「お疲れ様でした。体に異常は無かったですでしょうか？」

「はい、大丈夫です」

鍍は俺の返事を聞いて満足そうに笑った後、懐から一つの札を取り出した。

「それでは、貴方達はその力を封じさせてもらいます。……いいですね？」

鍍の言葉に頷きを返す。

そりゃこんな力を普通の学生が持っているのは治安維持組織としては不安だよなあ。

哀悼は少し残念そうな顔をしていたが、頷いた。

鍍は札を俺らの首に貼り付け、呪文を唱える。

「この術式は貴方達の命の代わりをしている。完全に消し去る事と貴方達が死んでしまふ、なので封印です。変身出来ないよう、鍵穴を埋めさせてもらいます」

微かな衝撃が俺の首に走る。

思わず首を抑えると、首にあつた鍵穴型のアザが消えている事に気がついた。

「はい、これで大丈夫。これで問題なく日常へ戻れます」

「……一つ、聞いていいですか？」

不意に、哀悼あいとうが口を開いた。

「島咲は、どうなるんですか？」

「……………彼は、その。まだ検査中にして」

「なんで言葉を濁すんですか。俺達にやってみたみに、島咲も能力を封印すればいい

だけじゃないんですか？」

沈黙しんもくが流れた。

その言葉を聞いて、鏃やじりは顔をくしやりと歪ませたまま固まった。

「……………彼は。向こう側に近づきすぎた。……………もう人間には戻れません。神とし

て、生きていくしかないんです」

しやくしやくと、りんごを食べる音が僕の病室内に響いた。

「ん？ 何よそんなにジロジロ見て……。りんご食べる？」

「いや、いいよ……」

そう言つて僕にりんごを差し出してくるのは叶姉ちゃんだ。

僕はもう人間には戻れない。それに今はその、精神が不安定な事もあり家にも帰れない。

流石に家族に僕の今の状態を隠し通せる訳もなく、刑事さんが叶姉ちゃんをここに呼んだのだ。

叶姉ちゃんには刑事さんの説明を一通り聞いて、僕の体がもう人間じゃない事も目で見て確認してもらつた。

姉ちゃんは一通り驚いた後、無言でお見舞いにと買ってきたりんごを食べ始めた。尋常じゃなく神経が図太い。

「……そりゃさ、初めは信じられなかったけど……。もう、あんたの身体が普通じゃないって事は嘘じゃないって分かったからね。現実逃避したって仕方がない。一応言つとくけど、父さん母さんの前で自分の腕切り落とすのやめな？ ショックで失神するよ？」

「……うん」

「別にカミサマだろうが何だろうが、あんたはあんたのまんま何だろ？　じゃあ姉ちゃんとしては何も求めないよ。ちゃんと体を休めて、元の生活に……。ああ、まああんたが健康ならなんでもいいや」

「元の生活に戻りなさい」。

姉ちゃんはそう言おうとして、辞めたのだろう。

刑事さん曰く、元の生活に戻れるのは僕の精神が安定してからだそうだ。

僕はもう、人じゃない。僕は今、この病室軟禁されている。

人じゃない物が人に混じって生きるには、ソイツが人を傷つけない事が大前提だ。

僕には、無理だろう。

僕は、人の死を願いながら生きるのだろうか。

僕は、危険な爆薬として生き続けるのだろうか。

「……チョップ！」

「へぶつつ！　な、何すんのさ?！」

「なんか良くない事考えてたでしょ。ダメだよ、今のあんたは精神状態がモロにお肌に出るんだから」

……気づけば、僕の手の甲にヒビが入っている。

この姿では隠し事も出来ないのだ。憂鬱な気分になる。

「何があったかとは聞かないけどさ。言いたくなったらいつでも話してくれていいからね」

「……うん」

そう言つて、姉ちゃんは病室のドアから去つて行つた。

……心配を、掛けている。それが、たまらなく嫌だ。

もつと言えば、この程度で悩んでいる自分も嫌だ。心配させないだけの能力もないくせに、悩みだけは一丁前か。

「うーす。大丈夫か？」

姉ちゃんと入れ替わるように、刑事さんが部屋に入つてくる。

その手には、ボロボロになった札が握られていた。

この病室にはお札が張り巡らされている。

僕が万が一暴れ出した時の為の、封印用のお札だ。

今の僕の精神状態に反応して、膨れ上がる僕の力を押さえつけているらしい。

「……すいません、お札、壊してしまつて」

「んにゃ、元から壊れる事前提の物だからいいよ」

そう言つて、刑事さんは僕に笑いかける。

下手くそな笑顔だった。笑顔になれていない人間という印象を受けた。

「……ヘカトンケイルは、大丈夫ですか?」

「おうよ。少しは俺に懐いてくれたのかねえ」

「素晴らしい、刑事さんは懐からカッターナイフを取り出す。」

……ヘカトンケイルは、もう喋れない。僕がそういう風に産んでしまったから。

僕の振るう武器としてデザインされたヘカトンケイルは、目も、鼻も、口も無い。

刑事さん曰く、ヘカトンケイルは一種の神だから、時間が経てば自分で自分の存在を
改変して普通の人間と同じ事が出来るようになるらしい。

ただしそれにはかなりの時間がかかるらしいが。

「……………ごめんなあ、ヘカトンケイル……そんな風に産んじまって……………」

「そんな思い詰めすぎるなよ。第一、産んでごめんなんて言われた方が困るぜ」

「そう言われて、言葉に詰まる。」

「そう、ですよ。……すみません」

「いいって。俺も少し言い方がキツかったかな?」

刑事さんはまた笑った。

「そうやって刑事さんと数分話していると、コンコン、とノックの音が響く。」

「私です、^{やしり}鍬です。^{あいとう}哀悼くと^{あいば}相葉くんも一緒です」

「帰って下さい」

二人の名前を聞いた瞬間、自分でも驚くくらい低い声が漏れた。

「え……」

「帰って下さい。お願いですから」

「……………おい鑑^{やじり}、帰らせろ」

刑事さんが病室から出ていく。

僕は布団に包まって、足音が何処かに行くのを待った。

数秒だったか、数分だったか。少しの間話し声が聞こえて、その後ここから離れていく足音が聞こえた。

「……………よかったですか?」

黒服のお姉さんが、僕の病室に入ってくるやいなや心配そうな声を掛けてくる。

思わず苛立ちを覚える。こんな殺人鬼が、友達にも性欲を向けるような奴が、二人みたいな奴らに会っていいわけじゃないか。生きていて、いいわけじゃないか。

「どんな顔して、会えていうんですか」

そんな声を出すだけで精一杯だった。

「……………一応言いますが、貴方に責任は無い。貴方は誰も殺していない。ヘカトンケイ

ルが飲み込んだ呪い師達も、きちんと吐き出しましたよね？」

「でも!! ……僕が、自分の意志で友人に性欲を向けたのは事実です。僕は、友達を殺せる人間です」

「ですが、貴方は今まで誰も殺さなかった」

「それがこれから誰も殺さない証明になりますかっ!!?」

僕の怒鳴り声が病室に響く。

黒服のお姉さんはバツの悪そうな顔をして、僕から目を逸らした。

……はは。殺人鬼が自分の悪性を証明しようと躍起になっている。あべこべだ、こんなの。

「……すいません。感情的になりすぎました。外の空気を浴びて、頭を冷やしてきます」

そう言ってお姉さんは大太刀を背中に背負ったギターケースにしまい直し、部屋から出ていく。

叫び過ぎたせいか、喉が痛い。

くそ、何をやってるんだ僕は。氣遣ってくれてる人に当たり散らして。

でも。だけど。僕の救い難さは事実なのだ。僕が危険人物なのは、ただの事実なのだ。

「悪いな。鎌やじりは割とお節介なタチなんだ。少し、言い訳させてもらってもいいか？」

「……………言い訳して？」

「アイツはな、呪いを受けてんだよ。定期的に人を殴れないと発狂するんだ」

「……………!!」

「北欧の呪いだったか？ 本来は親父さんにかけてられた呪いらしいんだが、効力が強すぎて娘のアイツにもかかっちゃまったらしい」

「も、もしかして刑事さん達が定期的に喧嘩してるのって……………!!？」

「いや、それはただ単に俺とアイツの仲が悪いだけ」

……………。

仲が悪いだけなのか……………。

「とまあ、そんな訳でな。アイツはお前と自分重ねて、色々お節介焼いちまう訳だよ。

……………悪いな」

「いえ、そんな訳が……………」

「……………俺も言っておくが、お前の友達はいいい奴らだよ。案外、お前の事も受け入れてくれるんじゃないの？」

分かってる。

アイツらがどれだけの奴かなんて、そんなの分かっている。

「……僕が、アイツらを受け入れていないんです」

「そりやまた、どういう……」

「僕は、心の底では二人を馬鹿にしていた。おっぱい星人も、ロリコンも……。気持ち悪いと、思っていて。……僕が受け入れなかったから、僕も受け入れてもらえる気がしないんです……」

結局の所、僕は何一つとして受け入れられない。

自分の性癖も、他人の性癖も、気持ち悪いと思つて受け入れていない。

こんな自分がどうして誰かに受け入れられるのだろう。

こんな自分がどうやって受け入れられるのだろうか。

「……刑事さん。こんな人間が、どうやって生きていけばいいんですかね？」

「……難しい質問だな。俺には答えられそうもない」

ふう。と刑事さんはため息を一度ついた。

「もしかすると、こういう時のために神様がいるのかもしれないねえな」

「……神様、ですか」

「おうよ。他人も自分も信じれない時に……な」

僕の全身から炎が放たれる。

僕の振るうカッターナイフで何人も死んでいく。

死んでいく。死んでいく。死んでいく——。

「はあつ、はあつ、はあつ………」

暗い病室の中。

悪夢を振り払って、僕はベットの所で荒い呼吸を繰り返す。

「う、うぶ、うえあ………」

僕はトイレに駆け込んで、思いっきりゲロを吐き出す。

気持ち悪い。気持ち悪い。自分が気持ち悪い。

死のう。そうだ死のう。

そう思っつて自分の顔を殴りつける。

クソ、クソ、クソ。

なんだよ。

僕、どこでおかしくなっちゃったんだよ。それとも元からおかしかったのか？

クソ、クソ、クソ！

何度も何度も自分を叩く。

腕を、顔を、腹を、足を。

一心不乱に殴りつけていると、手首を誰かに掴まれた。

自分じゃない他人の気配を感じて、だんだん心に理性が戻ってくる。

正氣に戻った僕は、ゆっくり後ろを振り返った。

そこにいたのは、刑事さんでもお姉さんでもなく。

「……………四谷？」

「おうよ」

「お、前……………何でここに居るんだよ」

「お見舞いだよ、馬鹿野郎」

そう言っよつたにて四谷は僕の手首を引っ張って、僕をベットのよつたに上に座らせる。

「俺は今さつき目覚めたんだ。それでここに来た。……………一応ちゃんと、ノックもした

んだぜ？」

「……………何でだ？ お前、そんなキャラじゃないだろう」

四谷よつたには頭をガシガシと搔き、「うるせーな」と呟く。

「……………お前が使ったあのナンチャラって呪文、あるだろ。あれで俺もお前の心の底を覗いちまった。……………お前が死にたがるつてのも分かっちゃったんだ。放っておけねえだろ」

「……………お、おお。ありがとう」

思わずそう言葉を返すしか無い。

……………うん。お前はそういう奴だ。周りからの圧力が無ければ、そうやって人に優しく出来る奴だ。お前の心を覗いた僕は、それをよく知っている。

「……………お前さ。哀悼^{あいとう}達と会ってないんだって？ 会えよ。お前にはアイツらが必要だよ」

「無理だよ。どんな顔して会えって言うんだよ……………。知ってるだろ。僕がみんなを心の底では受け入れてなかった事」

喋り出した口は止まらない。

薄ら笑いを浮かべながら、僕は言葉を続ける。

「俺はバニーガールも、魔法少女も。これっぽっちも受け入れて無かったんだぜ？

こんな僕が、殺人鬼の僕が。どうやって受け入れられるんだよ」

「……………でも、お前は言わなかったじゃねえか」

「あ？」

「他人を拒絶しなかった。嫌悪感を攻撃に変えなかった。悪口を言わなかった。……………それでいいんじゃないか？ 受け入れなくても。お前は他人を尊重してただろ。

……………俺と違って」

四谷よったには一瞬、悔いるような顔をした。

「自分の事も、受け入れなくていいんじゃないか。……でも、自分を雑に扱うのはやめろよ。それは自分を不幸にするから」

四谷よったにの言葉には、重みがあつた。周囲から尊重されず、周囲も自分も傷つけてきた男の言葉だからだ。

「勇気出せよ。救われる為の準備をしろよ。……俺も、頑張つてみるからさ」

そう言つて四谷よったにはベットから立ち上がった。

僕は殆ど何も喋れなかつた。四谷よったにの言葉は僕の心の痛い部分を突いた。

四谷よったにの言葉を否定する為の言葉はいくらでも思い浮かぶのに、そのどれもが口から溢れなかつた。

病室のドアが閉まる。

一人きりの病室で、僕はベットに横になつた。

……救われる為の準備、か。

「僕は十分頑張つてる。一歩ずつだが行動している。大丈夫、未来はきつと明るいさ」
自分で自分に言い聞かせるために放つた言葉は、笑つてしまう程白々しかった。

それでも、言葉を続ける。

僕の傷を、ふやけるまで舐め続ける。

側から見れば滑稽だろう。

それでも、言葉が続ける。笑われようと、勇気を出して舐め続ける。

「大丈夫さ。大丈夫さ……………」

こんなただの自慰だ。

鬱陶しい。辞めちまえ。

僕の頭の中で誰かが叫ぶ。

……………でも。

それでも、続ける。

そうだ。これはまさしく自慰だ。自分で自分を慰める、そんな時間がきつと僕には必

要なのだ。

頭の中で叫ぶ誰かを無視する。勇気を出して、今自分が正しいと思う事をやる。

そうやって唱え続けていたら、僕はいつの間にか眠ってしまった。

昔の夢を見た。四谷よつたにと一緒に遊んだ時の夢だった。

▷▷▷

「そういえばさ、四谷よつたにの奴。自分が虐めていた奴の所に謝りに行くらしいぜ」

次の日の昼。

僕と立体四目並べをして遊んでいた刑事さんは、唐突に僕にそんな事を言った。

「俺はアイツの事よく知らないけど、何か心変わりするきっかけでもあったのかねえ。お前はアイツと幼馴染だったらしいじゃねえか、何か知らないか？」

「いえ、特には……」

……きつかけ、か。

僕はふと、あの夜を思い出す。

『失敗作なんかじゃないよ。僕はお前と出会えて良かったって思ってるぜ』

四谷の耳元でそう囁いて、体を両断したあの瞬間。

もしかすると、あの言葉は四谷にとって、救いになったのだろうか？

僕は、アイツの心を少しでも慰められたのだろうか？

だから昨日、わざわざお見舞いに来てくれたのか？

……いや、やめよう。

考えても意味のない事だ。

「……そういえば、やじり鑑さんが居ないのは……」

「ああ、よつたに四谷を家に送ってるんだよ」

そう言った刑事さんの懐から、けたたましい携帯の音が鳴った。

「もしもし」

『……も、もしもし。 終はつひですか?』

「なんだよやしり鎌。なんか問題でも起こったか?」

『……まあ、はい。……その。四谷よったにくんの父親なんです……。その、お世辞にも碌な人間じゃなくて……』

「……………おいおい。まさかお前……………」

『口論になってぶん殴っちゃいました。それも警察の前で。今留置場にいます』

「ば、馬鹿野郎!!」

……何やら凄い話が聞こえてきた。

大丈夫なのかこれ。やばいんじゃないのか。

刑事さんは一言二言喋った後、電話を切った。

「……………はあ……………。すまん、ちよつと急用が入った。好きにしてください。ス
マホ持っていくなら外に出ててもいいから」

「え、外? 行つていいんですか?」

「おうよ。昨日ならいざ知らず、今日のお前いい顔してるぜ」

刑事さんはそう言つて、上着を来て外に出て行つた。

……今日の僕は、そんなにいい顔していただろうか。

刑事さんのさりげない言葉に、胸がほんのり熱くなる。さて、久しぶりの自由だ。どこに行こうか。

「……………あそこ行くか」

▷▷▷

見慣れたREDライトの明かりに照らされた、沢山の映画が収納された棚の間を僕は歩く。

平日の昼間という事もあり、TSUTAYAにいる人は少ない。

数日前に魔法少女アニメを借りに来た筈だが、数週間はTSUTAYAに来ていなかった気がする。

きっと、僕にとって日常とはこういう空間なのだ。

友達と一緒に映画を借りる。そういう事に、僕は日常を実感するのだろう。

どんな映画を借りようかと視線を彷徨わせていると、ふと、ホラー映画のコーナーで目が止まった。

僕の視線の先では、恐ろしげな怪人が美人の顔にナタを押し当てているポスターが壁に貼られていた。

それを認識した瞬間、僕の背筋に電流のような感覚が走った。顔が熱い。ポスターから目が離せなくなる。

……………。

もしかして。

もしかして、だが。

僕って、スプラッター映画でも興奮出来るのだろうか…………!?

僕は人を害する以外で、性欲を鎮められるのか!?

もしそうだとしたら、これはかなりの前進じゃないか？

僕が人間社会で暮らせる可能性も見えてきたんじゃないか…………!?

僕はまじまじと目の前のポスターを吟味する。

…………エツチだ。大変エツチだ。

女性の怯える表情も今にも動き出しそうな、恐怖の感情がありありと浮かんでいるし、殺人鬼もグロテスクな容姿をしていて中々に唆るモノがある。

今まではヘカトンケイルに性欲を封印されていたから気づかなかったが、スプラッター映画、大変エツチだ…………!

いや、こうなると話が変わってくる。

僕は限られたお小遣いで、性癖にブツ刺さる一枚を借りねばなるまい。

「……………敏弘？」

声をかけられて僕は思わず飛び上がった。

後ろを振り返ると匡ただしと哀悼あいとうくんが呆気に取られた顔でこちらを見ていた。

クソッ何呆気に取られてんだよ。驚きたいのはこっちだよ。

「……………な、何でここに居るんだよ。平日だぞ」

「あんな事があつた後で普通に学校に行けるかよ。第一、何でここに居るんだよはこつちのセリフだわボケ。お前、外出ていいんだ……………」

やめろよ、そんな目で僕をみるなよ。

立ち直つてから真つ先にお前達に連絡しなかつたのは僕のミスだよ悪かつたよ。

僕の背中をそこはかとなない罪悪感と気恥ずかしさがつたう。知り合いだけには今の僕を見られたくなかつた。

黙っている僕を見て、何かを察したらしい。匡ただしが後ろのポスターに目を向け、さらに僕に目を向ける。

「敏弘、お前、まさか……………」

匡ただしの顔が、驚愕から慈愛の入つたアルカイックスマイルに変わっていく。

クソッ！ 何でエロ方面にばっかりお前は勘が良いんだ!!

やめろよ！ ピンときてない哀悼あいとうくんは耳打ちするのやめろよ!!

崩れ落ちる僕の肩に哀悼あいとうくんがそつと手を置く。

「…………島咲しまぎ。お前は現実と自分の性癖の妥協点を見つけられたんだな。…………良かつた」

「う、うん…………」

かなり真面目なトーンで僕の性癖事情を祝福されてしまった。

いや、確かに大事な事だけどさ。スプラッター映画の有無で僕が社会で生きていけるかつてのがかなり判断されるけどさ。

「…………よし！ 今日俺ん家でホラー映画パーティーするか?!」
ただし 匡が良い笑顔でこつちを見る。

く、クソう……………!!

こうなればヤケだ。

良いよ、とことん付き合って貰うぞ!!

エピソード

「相葉先生、それじゃお先に」

「ええ、お疲れ様です」

挨拶を終えて、俺——相葉あいば匡ただしはパソコンに向き直る。

分かっていた事だが、中学生教師は大変だ。

書類印刷に課題のチェック、生徒の日誌へのコメント。

今はまだ新任だが、その内、生徒の部活動までやらなくてはいけないそうさ。

小さい頃はある種の憎悪さえ抱いていた存在に自分になるとは我ながら以外だが、存外に分分は悪くない。

最後の書類に印鑑を押し終わって、軽く伸びをする。

気づけば時刻は十時を過ぎていた。残業は悪しき文化である。

心の中で毒付きながら、書類をバッグに入れて帰宅の準備をする。

職員室の電気を消し、暗くなった廊下を真っ直ぐに歩く。

昼間の空気とは対照的な暗闇は、いかにも何か出てきそうさ。学校の怪談がいつまでも人気な理由が少し分かる気がする。

下駄箱を抜けて校門を出て、いざ帰ろうという時。

誰もいない筈の体育館から大きな音が聞こえた。

大きな物が高い所から落ちたような、鈍い音。

「……………」

何事だろうか。

まさか不審者か？ 体育館に？

……………む。むむむ。

もしも本当に不審者だった場合、このまま帰るのは不味いだろう。

それともまさか、幽霊か。

七年前のあの日からそういうオカルトが実在すると知った身からすれば、怪異は不審者より恐ろしい。

仕方なく、自らの怠惰な心に蓋をして職員室へと足を運ぶ。

体育館の鍵を取り体育館入り口へ。

重めの扉を開けば墨汁をこぼしたかのような暗闇が俺を出迎えた。

そして聞こえる、タツタツという足音。

「……………誰かいるんですか？」

返事はない。

痛いぐらいの沈黙がそこにあるばかりだ。

俺はゆっくり、音を立てないように動きながらスイッチを押し、体育館の電気をつける。

パツと天井の明かりが付き、暗闇が消し飛ばされる。

広い体育館の端。

そこに、一人の少女が蹲っていた。

「……小林……？」

見覚えのある少女だった。

小林仁美。文武両道というにはいささか、文の方が突出して高い事でこの学校では有名

な少女だ。

いわゆるギフトド持ちというのか、テストの点数がすこぶる良い。

周囲との関係性も悪くないらしく、優等生の名前を欲しいままにしている。

彼女は冷や汗を流しながら、泣きそうな顔でこちらを見ている。おさげと共に、背中から突き出た大きな鉤爪を揺らしながら。

「せ、せんせ……逃げ……！」

その言葉がきつかけだった。

鉤爪は空を切り裂きながら俺に向かって振り下ろされる。

小林こばやしの体が鉤爪かぎづめに引つ張られるように宙に浮いた。

「うわあつ!!」

俺は声を上げながらその場所から飛び退いた。鉤爪かぎづめが床に打ち付けられ、鈍い音を奏でる。

たまらず俺は小林こばやしに背を向けて走り出した。

後ろからびたんびたん重い物がのたうち回る音が聞こえてくる。

俺はバックからスマホを取り出し、携帯を取り出す。

かける相手は敏弘としひろだ。

こういう事は、専門家をやつてる敏弘としひろに聞いた方がいい筈だ。

『もしもし、どうした〜?』

「いや今ちよつとヤバくて、ヤバくて!! なんか、なんか生徒の背中からなんか生えて!!」

やばいマジで何から話せばいいか分からない。

しかもこうやって話している間にも後ろから音が近づいてくるし。

『ん? もしかして今ヤバい? 死にそう?』

「死つ、死……にそう! 多分あれ一撃でも食らったら死ぬ気がする!!」

そう言った瞬間、足に鈍い痛みが走った。思わず前のめりに地面に頭から突っ込む。

後ろを振り向けば、鉤爪が俺の真後ろまで来ていた。鉤爪の先には真つ赤な血が滴つていて、ああ足を切り裂かれたんだなど実感する。

「うわあ、いや、いや!! やめて!!」

俺の惨状を見た小林が鎮痛な悲鳴を出す。

その悲鳴に呼応するように、小林の背中からもう一本、鉤爪が生えた。

鉤爪はさらに速く、さらに縦横無人に俺に襲い掛かってくる。

ぼきり、という音と共に自分の腕がへし折られた。

思わず声が喉から捻り出される。痛い。痛い。痛い。

その衝撃で思わずスマホを床に落としてしまった。不味い。

思わずスマホに手を伸ばす俺の腹に、鉤爪の一撃が突き刺さった。

肺から空気が吐き出される。腹が、痛いを超えて熱い。表面を鉤爪に切られたんだ。

あまりの痛みに俺は床に崩れ落ちる。あまりの痛みに涙が出てきた。

絶叫を上げる小林。痛みに声を上げる俺。

その声をスマホが拾ったのか、電話越しに敏弘が声を張り上げた。

『封印を解いた! 変身しろっ!!』

俺は痛みに震える体をせっつきながら、左の首筋に指を当てる。

かちやりと音がして、首に指が沈んでいく感覚がした。

小林の目が驚きに見開かれる。

俺は指を右回転させる。

全身が開いていく、変身時特有の感覚が全身に広がっていく。

腕の痛みが引いていく。視線の位置が少し変わった。

目を下に向ければ、赤いバニースーツに包まれた豊かな双丘が見える。

……七年ぶりだな。変身をするの。

「しえ、しえんしえい……?？」

小林が信じられない物を見る目でこちらを見つめてくる。

ごめんな小林。あとで説明するから。

俺は右手に持ったスナイパーライフルで、鉤爪へと殴りかかった。

▷▷▷

「……なるほどね」

三十分程だろうか。小林の背中から突き出た鉤爪と格闘していたが、いつのまにか鉤

爪は消えてしまった。

とりあえず俺は職員室に小林を招き、ホットコーヒーを淹れながら小林の話聞く事

にした。

小林曰く、数日前からあの鉤爪は洗われるようになったらしい。

夜になると勝手に暴れ出し、周りの物を壊してしまうそうだ。

だから下校の時間に体育館の窓の鍵を空けておき、夜になると誰もいない体育館に忍び込んで鉤爪を暴れさせていたそうだ。

「大変だったなあ……」

月並みな感想だが、そんな言葉しか出てこない。

異形の爪が出るというだけでも気持ち悪くて仕方ないだろうに、あまつさえそれが周囲の物を壊してしまうのだ。

大変という言葉では物足りない程のストレスが彼女にかかった事だろう。

それにしても、驚くべきは小林の機転だ。

仮にもし俺の背中から異形の爪が出た所で、小林のように体育館に忍び込んで暴れさせるなどという発想が出るだろうか？

「わ、私の事情はこれで全部です……。今度は、私から質問していいですか……？」

「おう、いいよ」

「先生、なんでそんな……扇状的な格好を……??」

言葉選んだなコイツ。

いや確かに気になるよな。今の俺、パツキンバニーガールだもんな。

「……俺な。実は昔、魔法少女だったんだよ」

「い、意味が分かりません……」

バツサリ切られた。当たり前だった。

「なんて言うかな……。俺も昔、小林こぼやしみたいなオカルトな事件に巻き込まれた事があつてな」

「……それで、バニーガールに……？」

「まあ、うん」

かなり納得いかない顔してんなー。でも本当なんだけどな……。

流石に生徒に性癖云々は言えない。ギリギリセクハラとして成立しそうな気がする。

「ま、とにかく。重要なのは、俺がそういうオカルトの専門家の友達が居るって事と、バニーガールの時の俺は小林こぼやしの鉤爪にも負けないうって事だ。お前の鉤爪問題、なんとかなるかもしれん」

「ほ、本当ですか……?!」

「おうよ。幸いにも明日は休日だしな。時間はある。いくらでも頼ってくれていいぞ」

俺がそういうと、小林こぼやしは静かに静かに、ゆっくりと涙を流し始めた。

「……胸、貸そうか？」

今の俺は女の体だし、普段よりも接しやすくだろう。

そう思つて声をかけると、小林は俺の胸に飛び込んできた。

俺は黙つて小林の悲しみを受け止めた。

少しでも、この少女の重しが取れるように祈りながら。

その後、顔を赤らめた小林を家の前まで送つていった。

まあまあな深夜だ。子供一人じゃ危ない。

俺は再び敏弘としひろに電話をかける。

「なあ、小林こぼやしについた怪異つてどうにかなりそうか？」

『んんん……。それは見てみないと分からないんだよな。でも今日昨日じゃそつちま

で行くのは中々厳しいんだよな。……よし。決めた』

「決めたつて何を？」

『リモートお祓い、しよう』

▽
▽
▽

「先生、き、今日はよろしくお願いします……！」

「おう、頑張ろうな」

俺は緊張しっぱなしな小林こばやしに笑みを返す。

昨日から一晩明けた今日、俺達は街の外れ、山奥の古ぼけた神社に来ていた。

神社といっても、鳥居はボロボロ、社は廃屋。今はもう誰にも参拝されなくなつて久しい。

「神様が不在だから、顕現できる」。意味はよく分からないが、敏弘としひろはそう言っていた。とにかくこの場所はお祓いに都合がいいらしい。

いざという時のために、俺はすでに変身しっぱなしだ。

社に入り、持ってきた座布団を二つ引く。

そしてその一方にパソコンを置いた。

『もしもし、聞こえてる？ 僕もリモートお祓いって初めてでさ』

「はい、聞こえます……いー」

パソコンの顔では、朗らかな顔で笑う敏弘——さえすり囁の顔をした、俺の友人が写つてい

る。

小林こばやしは緊張した顔つきで敏弘としひろを見つめている。敏弘としひろの事を霊能者の大先生とでも思っているらしい。そんなに偉いモンじゃないけどな、アイツ。

話し込んでいると、社の扉が開く。そこから現れたのは、濡れ羽色をした美しい少女

だ。

「すまん、遅れた。……君が小林こぼやしさんだな。初めまして、哀悼あいとうという」

「わ……！ は、初めまして！ 今日（けふ）はよろしくお願いします……！ 先生、魔法少女云々って本当だったんですね……！」

魔法少女らしい可愛らしい姿をした哀悼あいとうの姿を見て、小林こぼやしの目が僅かに光る。

哀悼あいとうを呼んだのは、俺の判断だ。

哀悼あいとうのリボンなら小林こぼやしを傷つけずに無力化できる。

俺は哀悼あいとうと二人して社の隅に盛り塩を置き、儀式の準備を始める。

『それじゃ、服を脱いで背中を僕に見せてくれるかな？ もちろん男性陣は外に行つててね』

なるほど。小林こぼやしの背中を抵抗なく見てもらったために変身した状態でリモートお祓いを

始めたのか。

少し小林こぼやしを騙してゐるみたいで気が引けるが、スムーズに話を進めるためなら仕方ない。優しい嘘だ。

「……哀悼あいとう。一応言っておくが」

「みなまで言うな。張り倒すぞ」

バカ話をしながら、俺と哀悼あいとうは神社の外に出る。

社の扉を閉めると、哀悼あいとうは俺に話しかけてくる。

「……………そうだ。一応言っておくが、俺の性癖はロリコンでは無かったらしい」

「え？」

「見ている」

哀悼あいとうがその場でターンを決める。

すると、一回転する毎に少女の背丈が大きくなっていく。

まるで早回しの映像を見ているかのように、四肢が太くなり肉つきが良くなっている。

数秒と経たずに濡れ羽色の魔法少女は、ゴシックロリータな衣装に身を包んだ乙女へとなった。

「え……………は……………?!」

「ロリはロリでも、俺はゴスロリフェチらしい。年齢が高かろうと今の俺には性癖の範囲内だ」

……………でもさつきまでロリだったじゃん。やっぱロリ好きなんじゃん。

そう思ったが俺は言葉を飲み込む。胸を張って性癖が拡張した事を胸を張って報告するコイツが、なんだか可愛いかったから。

「あの……………。すいません。終わったので入っても大丈夫です」

「了解した」

哀悼あいとうは今度は逆にターンを決め、元の少女の姿に戻りトテトテと社の中に入っていた。

……な、なんか納得いかねえ。ロリコンじゃない事を示すならずっと大人のままでいろよ。

いやいや、そんな事より今は小林こはやしの事が先だ。

俺は敏弘としひろに話しかける。

「なんか分かったのか？」

『うん。これは憑き物筋だね。……完全に祓う事は難しい。落ち着かせて、弱体化させた後は付き合い方を考えなきゃね』

「そ、そんな……!!」

完全に祓えないという事を突きつけられ、小林こはやしが沈痛な声を出す。

「……どうにかなんないのか？」

『難しいね。……一つ聞かせてくれ。お父さんやお母さんはこの症状の事は？』

「し、知らないみたいでした。さりげなく聞いても、特大反応はなくて……」

『……ふむ』

一瞬の間の後、敏弘としひろは続きをしゃべり出す。

『多分、この怪異が暴れ出した原因は……。小林さん。君にある』

「え……？」

『憑き物筋ってというのは、家系につく怪異でね……。両親にも取り憑いてる筈なんだ。だけど君だけが背中から鉤爪を出したって事は……』

「そつ、そんな訳無いじゃないですか!?! 私は何をしたって言うんですか!?!」

普段の小林の印象は、大人しい、落ち着いたと言った感じの物だ。

そんなイメージとは裏腹に、今の小林は獣の様だった。

『君が悪い事をしたって言いたいんじゃない。そうだな、なんて言うか……。君は頭が良いんだってね？ 匡から聞いたよ。所謂ギフテッドって奴かな？ そういう子つてさ、ストレスを溜めやすいんだよ』

「わ、私が、私が原因って、そんな訳……」

『人を怨むのにも才能が必要でね。呪い師なんかにも多いんだよ、ギフテッド』
俺も確か聞いた事がある。

カメラアイと呼ばれるギフテッド持ちは、カメラを使ったように風景なんかを記憶でききるが、その代わりに嫌な記憶も忘れられないんだそうだ。

「小林、お前もしかして……。嫌な記憶も忘れられないのか？」

俺の言葉に、青ざめた小林が首を縦に振る。

その瞬間、彼女の背中から鉤爪が生えた。

昨日よりも、太く、鋭い鉤爪。それが八本、爆発するように小林の背中から生えた。明るい昼間にそれを認識した事で、その正体が分かった。

蜘蛛だ。

小林の背中から生えているのは、大きな大きな蜘蛛の足だ。

それが大きくうねり、俺らに向かって四方八方から振り下ろされる。

「グウウウウっ……!!」

咄嗟にガードしたが、俺の体は後ろに大きく吹き飛ばされた。

社の扉をぶち抜き、頭を強く打つ。

「俺の姿を見ろ。希望たり得る俺の姿を見ろ」

蜘蛛の足目掛け、リボンの波が殺到するが、蜘蛛の足は素早い動きで小林の体を引きずり、天井を突き破って社の外に逃げ出す。

「いやあああつつ、もう嫌あああつつ!! なんでこんな気持ち悪い物が生えるの?!
なんで先生を傷つけちゃうの?!」

八歩の足に吊り上げられ、小林は絶叫する。

その度に、蜘蛛の足が太く大きくなる。

直感した。あの蜘蛛は、小林の負の感情を喰らっているのだ。

小林こばやしが不快になればなる程、あの蜘蛛の足は力を増していくのだ。

「生まれてこなきやよかった!! 全部あたしのせいなら、あたしなんか生まれてこなきやよかった!! あたしなんか、あたしなんか死んじゃえば良いんだ!!!」

その声が響いた瞬間だった。

青い空に、黒煙が走った。

「……………え?」

「死ほくを、呼んだな?」

ゲゴゲゴと、背骨を揺らすようなカエルの合唱が地面から響いてきた。

そして熱が。

溢れんばかりの熱気が、神社の社から湧いてくる。

黒煙が空に曼荼羅を描き出した。

カエルの合唱はどんどんと勢いを増していく。

きつとこの場所にいる全員が、自分の首筋に刃物を突きつけられている様な感覚に陥っただろう。

あのバカ、「神様が不在だから顕現できる」って、こういう意味かよ……………!!

黒煙が社の一ヶ所に集まっていく。

そこに、いた。

燃えさかる髪の毛を纏い、黒いスーツ姿に身を包んだ敏弘が。

手には一步のトンカチを持っており、後光のように黒煙で出来た曼荼羅を背負っている。

敏弘は小林さんに笑いかけ、にっこり笑顔で言った。

「……小林さん。そんなしみつたれた顔で死を口説き落とせると思ったら大間違いだぜ？」

その言葉と共に、小林の元まで跳躍。

めしやりという音と共に、蜘蛛の足の一步を殴りつけた。

「うわあっ！」

殴られた衝撃で小林が揺れる。

今の小林は自分よりも大きい蜘蛛の足に吊り上げられている。手足のどこも地面に接していない感覚は恐ろしく不安だろう。

「哀悼！」

「分かった！」

俺が言葉を言い切らないうちに、哀悼は行動してくれていた。

無数のリボンが、小林の手足を包み込んで固定する。

これで、間違っても小林に攻撃は当たらないだろう。

俺は素早くスナイパーライフルを構え、蜘蛛の足を撃ち抜いた。

一本の足が千切れ飛んで、宙を舞う。

仲間もいる。敵との距離も十分。俺もすっかり戦える。

敏弘としひろが顔をこちらに向けて笑みをこぼす。

俺は親指を立てて返事をしてやった。

「ギイいつ、ギイいいいいいつつ!!」

小林こぼやしの背中から、巨大な蜘蛛の頭部が唸り声を上げながら浮かび出てきた。

本体のお出ましって訳だ。

蜘蛛の足が、勢いよく敏弘としひろに殺到する。

しかしその内の三つは俺に撃ち落とされ、その内の四つはリボンに巻き取られて動けなくなる。

「おおおおあああつつ!!」

敏弘としひろが吠えた。

トンカチを振りかぶり、横薙ぎに蜘蛛の頭部をぶつ叩く。

「ギいあああああつあああーっつ!!」

蜘蛛の頭部は形容しがたい金切り声をあげ、血飛沫をあげて雲散霧消した。



「……わたし、本当は体育の時間が好きじゃないんです」
蜘蛛との戦いが終わった後、小林はそう切り出した。

「小学生のころ、体育の先生にみんなの前で出来ない縄跳びを何回も飛ばされて。その記憶が、今でも消えないんです」

自分でも小さな事だと思うんですけどね、と彼女は笑う。

「わたしが体育館で暴れてたのもこの記憶があったからかも。先生を襲ったのも、体育教師への恨みがあったのかも。もしかするとわたしは心の奥底では、凶暴な人格を飼ってるのかもしれないね」

「……でも、俺を傷つけたくなかったのは間違いなく本当だろ？」

「……！」

「少なくとも、俺にはそう聞こえた。……自惚れてるみたいに聞こえるかもしれないけど、それでいいんじゃないか？」

もしかすると自分は気持ちの悪い最悪な存在かもしれない。

もしかすると自分は凶悪な殺人鬼かもしれない。

でも、きっと他人を思った瞬間がある筈だ。

それが確かなら、それでいいじゃないか。
少なくとも、俺はそう思う。

「……………さて、この壊れた社、どうしようか」

「ま、誰も使っていない神社みたいだし、いいんじゃないか？」

俺のぼやきに、敏弘としひろが反応する。

……………ま、そうだな。神様もいないらしいし、罰当たりって事もないだろう。

俺らは適当な事を話しながら、パソコンを回収しに社へと向かう。

『……………おい！ 大丈夫か？ 急にどつかに言っつてんじゃねえ!!』

パソコンの中では、見たことのない女性が大声を出していた。

……………見覚えがない。誰だ？ どこことなく、男の時の敏弘としひろに似ている気がする。

「あく、そいつ四谷よったに。俺今四谷よったにと同棲してるんだよ」

「はあくくなるほど……………え？」

いやお前、同棲つてえ？

しかもお前、四谷よったにの姿お前に似てるんだけど。

四谷よったにの理想の異性、女体化したお前って事なんだけど。

え？

え??

え
???